

---

# 私をボードへ連れてって

相良 マミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私をボードへ連れてつて

### 【NZコード】

N3028P

### 【作者名】

相良 マリ

### 【あらすじ】

「う、嘘でしょ？！」

大人しくて引っ込み思案の雪奈。ゆきな 雪奈は大学の友人たちの策略で、冬休み、雪山のペンションで住み込みのアルバイトをすることになってしまつ。覚悟を決めて向かつたペンションで、雪奈は、金髪ピアスの関西人、昴すばる に出会つた。異性に慣れない雪奈は、優しいけどちょっと強引な昴に翻弄される毎日で……。

## プロローグ

雲ひとつない、高く青い空。

私の下に、斜面に沿つて広がる白い大地。

私は、自分の少し後方にある小高く白い丘を見上げた。

太陽の光がまぶしくて、私は少し、目を細くした。

そのとき、丘の上から、何かが勢いよく飛び出した。

人だ。

わかる、彼だ。

青い空に、彼の姿だけが映える。

彼が宙で踊る。

空中で回転し、身体を反らせ、舞い降りてくる。

その背中に、私は、翼を見た気がした。

ああ、私、きっと。

この人のこと。

好きに、なつちゃつたんだ。

「よいしょっ……と」

私は小さく気合をいれ、両腕に力を入れた。  
海外旅行用のトランクが、両腕に支えられて少しだけ持ち上がる。  
うう、重い……。

それでもなんとか、脚に引っ掛けずに列車を降りた。

その途端、予想以上の冷氣に包まれる。列車の中との温度差に思わず目を瞑つてしまいながらも、両足の前に、トランクを下ろした。結構、重くなっちゃったなあ……。もっと荷物減らしてくれればよかつた。

つてゆーか、雪国なんて初めてだから、何を持ってきたらいいのかわからなかつたんだよね。

「ふう」

ようやく、力を抜く。

うわあ。息が真っ白。

私は両手を擦り合わせた後、冷氣がコートの中に入つて来ないようにしてしっかりとマフラーを巻き直した。

ついに来ちゃつたんだ。

もう、みんな薄情なんだから……。

それにしてもこんなに晴れてるのに、なんでこんなに寒いの？

凍えちゃいそう。早く駅の中に入らなきゃ。

改札口は……あ、あつた。あそこね。

大学生活一年目の冬。

私、こと、渡辺雪奈は、トランクの取つ手をしつかり握ると、真

つ白な未知なる世界への第一歩を踏み出した。

事の発端は二週間近く前。十一月の末。

私が、冬休みの件でお母さんの携帯電話に電話をかけたことから始まる。

渡辺家では毎年、年末年始の休暇を実家で過ごします。私は今年ももちろんそのつもりだったから、いつから帰るかだけを電話で伝えるつもりだった。

今年は講師の先生方の間でインフルエンザが蔓延してしまい、休講が相次いだ。それで急遽、大学は例年よりも一週間ほど早く冬休みが始める決断した。

だから、いつもよりも早い日程で家に帰るより、お母さんに連絡しておかないとつて思つて。

でも、電話に出た雪奈の母親は異常にハイテンションで。「もしもしし、お母さん？ 冬休みのことなんだけどね。大学のお休みが

「あ、雪奈、ちょうどよかつた。母さんも電話しなきやつて思つてたのよ。ねえねえ、聞いてよ、雪奈。母さんとお父さんね、年末年始のお休みで旅行に行くことになつたのよー」

「えつ？」

「それも、海外なのよ、海外」

「ええつ？！」

「ヨーロッパに行くの。ホラ、母さんたち、今年で結婚して二十五年でしょ？ 記念に旅行に行かないかつて、お父さんが言つてくれたの。キャー

「ちょっと、そんなの聞いてないよ……」

「だから、今言つてるんじゃない。でね、せっかくだから色々回りうつてお父さんと話して、結局、一ヶ月くらいの長期旅行になつたの。イタリアと、スペインと、フランスに行ってくるのよ

「一ヶ月も？！え？で、えつと、いつから行くの？」

「えーっとねえ、三週間後の金曜日かしら？うん、そう、その日

ね」

それって、私の冬休み初日と同じ日じゃない。その上、一ヶ月もだなんて。

「だからね」お母さんの声は無常にも続く。「冬休み、帰ってきてもいいけど、あなた一人になっちゃうの。じめんね。雪奈もどこか旅行に行つたら？」

私は一人っ子だ。大学進学のため、家を離れて上京している。お父さんが転勤族だということもあって、今の実家は高校を卒業したときの実家とは違う都市にある。だから、近所に幼馴染たちが住んでいるわけでもない。

両親のいない実家に帰るのは、私にとっては全く意味のないことだった。

それにしても。

困ったなあ。

冬休み、どうやって過ごしていく……。

「雪奈、どうしたの？ 元気ないね」

私、よっぽど落ち込んだ顔をしていたのかな。友達の典子ちゃんが肩を叩いた。

「うん……帰るとこる、なくなっちゃった」

「ええっ？」

「雪奈、ちょっと、大丈夫？」

「ご家族に何かあったの？」

私の言葉に、仲良しグループの他の子たちまで加わっていく。

私は慌てて顔の前でぶんぶんと両手を振った。

「あつ、ううん、全然違うの。『めんね、そうじゃなくって、えつ」と

私たちは、大学の同じ学部の仲良し六人グループ。

典子ちゃん、恵美ちゃん、晶子ちゃん、朋子ちゃん、秋江ちゃん、

そして私。

授業もほとんど同じものを取つていて、一日中一緒に。

もともと私は、人見知りが激しくて口下手で、あんまり自分から話す方じゃない。

その上、お父さんの転勤にくつついで引越しばかりしてきたから、『友達』って呼べる人たちがなかなかできなかつた。

いつも、本や人形が『お友達』だったの。

大学に入つて初めて、同じメンバーで長い時間を過ごすつていう経験をして、ようやく『友達』ができた。

いつもやつて普通に同年代の子と話すのは、私にとってじく最近になつてようやく手に入れた『普通』なんだ。

オシャレな子、お話が上手な子、頭のイイ子、いろんな友達ができて、それがとても嬉しくて、楽しい。

「ごめんね、変な言い方になつちやつた」

私は照れ笑いして、昨日のお母さんとの電話を搔い摘んで説明した。

何度もつづかえたり言い直したりしちゃつたけど、多分、伝わつた。と思う。

せつかくの、いつもより長い冬休みなのに、たつた一人つきり。何かしないと損だよね？

お母さんの言つとおり、旅行にでも行こうかな……？

それにも、お母さんつてば「旅行に行けば？」なんて軽く言つてたけど、誰と行けつて言うんだろう。

みんな、冬休みは、実家で家族と過ごしたり、彼氏と過ごしたりするはずだもの。いまさら私と旅行だなんて無理だよ。誘つてもらうならまだしも、自分から誘わなきゃいけないし、何より気が引け

るもの。

もし、私にも彼氏がいたら、いろんなとき一緒に過ごしてもいいえるのかな。

彼氏だなんて、今までに一度もできたことないから、正直よくわからないんだけど。

一人旅かあ。ちょっとそれは心細いなあ。

「なーんだ。『帰る場所がない』なんて言つから、ビックリしたよ

「雪奈あ、元気出しなつて」

「つでゅーかさあ、雪奈の『両親つて仲がいいね』

「そーそー。親の仲がいいって、イイ事じやん

みんなが口々に励ましてくれるけど、私の頭の中は、相変わらず『どうしよう』の五文字が支配していた。

## 2　冬休みのアルバイト（2）

落ち込みっぱなしの私を他所に、会話はどんどん進んでいく。  
「お母さんの言つよつて、旅行にでも行けば？」  
「雪奈が？　一人で？　雪奈、あつという間にオオカミさんに食べられちゃうよ」

「恵美つてば、それは雪奈に失礼よ？」

「だつて、雪奈つてば、名前どおり真っ白なんだもん」「すつじぐ、ピュアだしね。可愛いし」「確かに」

「この大学が女子大でよかつたかもねー」

「ん？　どういう意味だう？」

みんな、たまに私のわからないコトバで話すんだ。

ううん、言葉はわかるんだけど、意味がよくわからないの。

「でも、いつまでも免疫ないのもねえ……」

免疫？　インフルエンザのこと？　流行るつて言つから予防接種は打つたけどなあ。

「そーだ。雪奈、バイトしてたんじゃなかつた？」

「そういうえば、カテキョのバイトしてたよね？」

みんながいっせいに私を見る。

「それがね、年末年始は、この両親さんの実家に帰られるんだって。だから一ヶ月間お休みなの」

「それじゃ、その間、収入もないの？」

その言葉を聞いて、よつやく気づいた。

うそ　　つー！

耐え切れなくなつて、私は机の上に突つ伏した。

親からは、きちんと仕送りを貰つているから、別に生活に困るこ

ではない。

だけど、それは家賃と生活費の分だけ。遊ぶためのお金はアルバイトして稼ぐよつこ、って言われている。

「そのままじゅ、せつかくのこつもよつて休みを、ヒキコモリで過ごさなきゃいけなくなつちやう……。

いつそのこと、冬眠でもしようかな。

「じゃあ、新しくバイトすればいいんじゅない？ 冬休み限定の短期バイト、たくさんあるでしょ？」

その通りだよね。うん、その通りだ。

私も頭を切り替えて、ちゃんとしなきゃ。

家に閉じこもつて越冬とかしてゐる場合じゅないのよ。冬休みのこど、考えなきゃ。

「あ、私ちゅうどバイト情報誌持つてるよー」

典子ちゃんの声だ。典子ちゃんは私の隣に座つてゐし、とつても特徴のある声だからすぐわかる。

「ホント？ 見たい見たい」

「雪奈にピッタリなバイト、ないかなあ

え？ みんな探してくれちゃつてるの？

私はのろのろと頭をもたげた。

私以外の五人が、嬉々として私の隣の机に群がつてゐる。

典子ちゃんが持つてゐる雑誌の表紙はこんな見出しが書かれていた。

冬休みのアルバイトはこれで決まり！

短期集中バイト特集

特集1 忘年会・新年会のバイト

特集2 住み込みのバイト

毎週発行されるバイト情報誌。冬休みが近いって言つのもあって、特集が組まれているみたい。

「あ、『ム』、イイ感じじゃない?」

典子ちゃんの声がした。

「あー そうかも」

「いいんじやない?」

朋子ちゃんと恵子ちゃんの同意の声。

そして、五人の顔がいつせいに私の方を向く。

え? 何? なに? ナー?

何か……イヤな予感。

そしてまた、私以外の五人で一瞬顔を見合わせると、典子ちゃんがスチャッとケータイを取り出した。

「あの、今、アルバイト情報誌見てお電話しているんですけど、お電話で応募ってできるんでしょつか?」

え? 典子ちゃん、バイトするの?

冬休みは家族と過ごすから実家に帰るって言つてなかつたつけ?

「あ、ハイ、名前ですね? 『わたなべ・ゆきな』です」

え? 典子ちゃんつ!?

それ、私の名前! !

「ええ、お天気の『雪』に奈良の『奈』って書きまや  
ちょっとつ! 典子ちゃんつ! しばっ! !

声に出しゃつとしたら、恵子ちゃんに口を押さえられた。  
むぐう……、声が出ないよ。

「え? あ、学生です。女子大学の文学部英文学科で……あ、  
ハイ、ええ、わかりました。じゃあ、今日中に発送します。よろしくお願いします」

電話が終わり、典子ちゃんがケータイをしました。

五人とも、私の方に笑顔を向けている。

笑顔のはずなんだけど、それが、なんか怖いよ……。

「えっとお……典子ちゃん、今、どこに電話してたのかなあ、なんて、聞いてもいいかなあ？」

恐る恐る、私は聞いてみた。

「ん？」「によ？」

さも当たり前であるかのじとく、典子ちゃんは私の方へバイト情報誌を差し出した。

綺麗にケアしている爪でトントンとあるバイト募集の記事を弾く。私は雑誌を受け取り、その記事の部分を読んだ。

「雪のペンション 住み込みバイト募集！」

最寄のゲレンデからは徒歩五分。自由時間アリ。食事付。

明るく、元気な方、やる気のある方、歓迎

期間　十一月中旬～三月中旬（応相談）

年末年始に来ていただける方優遇します。

日給　八千円

連絡先　×××・××××・×××

「……」

私の中は文字通り真っ白。

の、典子ちゃんつてば、どういうつもりなのよ……。

「ほら、今の雪奈にはちょうどいいでしょ？ 食事付きの旅行気分で行っておいでよ。オマケにお金にもなるし。あ、今日中に履歴書を発送してくれって言つてた」

「確かに、食堂に履歴書用の写真撮れる機械、置いてなかつた？」

「あ、あつたあつた」

「確かに、購買部に履歴書も売つてたはずだし」

「じゃあ、今から行こつ、ね、雪奈」

えつ？ えつ？？？

私は未だ状況がよく呑み込めていない状態。

恵美ちゃんと秋江ちゃんと手はずつ掴まれて食堂に拉致されてしまつた。

ワケがわからぬまま、手際良く写真を取られ、朋子ちゃんが履歴書を書いて行く。

そして気がついた時には、構内にあるポストに典子ちゃんが履歴書を投函していた。

えっ、えええええ！？

どびどび、どうなつちやうの、私？

そしてそれから約一週間後、つまり、十日ほど前。

運がいいのか悪いのか、私はペンションのマスターを召乗る人から、アルバイト採用の連絡を受けた。

そして今日、そのペンションがあるといつ長野県の某駅に着いたところというわけだ。

住み込みバイトなんて、初めて。

不安でいっぱいだけど、ドキドキもある。

本当は、ちょっと期待してるんだ。

この冬休み、自分にとつて初めての経験をすることでの、自分で何かが変われるんじゃないかつて。

引っ込み思案なところや、上手く話せないとじりが、もしかしたら、変われるんじゃないかつて。

その、きっかけになるんじゃないかつて。ううん、そうしたい。本当は、いつも羨ましいんだもん。典子ちゃんや恵美ちゃんたちが。

私も、周りに流されてるだけじゃなくて、もつと血口主張したいし、素敵な恋だつてしたい。

だから、自分に対して、三つの誓約を立てた。

初めてのことでも挑戦する。弱音を吐かない。それと、笑顔でいる。

がんばりうね、雪奈。

雪国なんだから当たり前かもしれないんだけど、見渡す限り真っ白で、お日様が反射して眩しい。  
サングラス、欲しいかもしない。  
どこかで売ってるかなあ？

改札口を出て、ちょっと周りを見渡してみた。  
ほとんど人がいない。

ペンションから、お迎えの人があつてることになつてゐるんだけ  
どな。

雪で、車が動かなくなつちやつてるのかなあ？

「もしかして、あんたがワタナベさん？」

突然、背中越しに声をかけられた。

振り向くと、私とそう年齢の変わらない感じの男の人。  
えーつ、私、全然、慣れてないんだよ、同年代の男の人つて。  
それに、この人金髪だし……。人懐っこい笑顔だけど、ちょっと  
コワい、かも。

とりあえず「クククを頷いた。

「あ、ホンマ？ よかつたー。遅れてもーて、会えへんかつたらど  
ーしょーかと思つとつたんや。大介兄チャン、怒るとメッチャ怖い  
ねんもん」

ぎゃー！

関西弁なんですけどー！

「あ、あのー、ペンションの方、ですか？」

恐る恐る聞いてみた。

「ん？ ああ、まあそんな感じやな。ワタナベさんと一緒にや。オレ  
もペンションに働きに来とんねん  
ですよね。関西弁だもん。

長野に住んでる人じゃないと思つた。

「大介兄チャン あ、ペンションのオーナーのことな。大介兄チ  
ヤンが忙しくて行かれへんなんて言いだすもんやから、急にオレが  
代わりに迎えに来ことになつてしまつてん。連絡でけへんくて、ご  
めんな。心細かつたやろ？」

あ、そや。自己紹介が未だやつたな。オレ、中野。なかの・すばる中野昂や。ま  
あ、しばらく一緒にあることになるんやし、仲良うしたつてや」  
中野さんが、手を差し出してきた。

慌てて私もそれに倣う。

「渡辺雪奈です……」

「へー、『みきな』ちゃん書うんか。かつわええ名前やなあ。べっぴんさんやし、イメージぴったりやん。ラシキーやわー」

中野さんはそう言いながら私の手を握り返した。

うわあ。初めてかもしれない、男の人と握手するの。

男の人の手って、大きいんだ。

私の場合、男の人って言うとお父さんのしか知らないから、なんだか新鮮。

「ほな、行こか。いつつまでもこいんなとこにおつたら凍えてまうし。車、向こうの駐車場に停めとんねん」

中野さんは車回しの向こう側にある平面駐車場を指差した。中野さんが示した方向には平面の駐車場があつて、車がぽつりぽつりと停まっている。

あそこまで、雪の中歩くんだ。

実は私、こんなに積つてる雪を見るの、初めてなんだー。なんだか楽しいかも。

歩き出でた私の手から、中野さんがサッとトランクを奪つた。

「そいや。渡辺さんて、スキーとかボードとか、やるん?」

「え? あ、い、いいえ……」

「あー。もしかして、雪、初めてなん?」

「はい……」

あの、トランク……。

持つてもらっちゃってるんだけど、こーの?

「ほな、気につけて歩きや? 滑つてまうで?」

え? 滑るの? 平らな場所なのに?

私はそう思つたけど、歩き始めてすぐに、中野さんがそう注意してくれた意味がわかつた。

何これ、歩きにくい……。両手でバランス取らないと、い、転ぶ。

あ、もしかして。それで中野さん、私のトランク持つてくれたの?

「この辺は暖かいさかい、昼間に雪が解けて、夜になつたらまた凍つて、それで滑りやすうなんねん」

「いえ、十分寒いです。

中野さんは雪の中を歩くのには慣れてこらじしく、おしゃべりしながらもスイスイと進んでいく。

それに比べて、私は一步一歩踏み締めるみたいにして歩いてるから、ちつとも進まない。

私、運動神経だけは、それなりにある方なのになあ。

うー。なんか恨めしいかも。

中野さんが私の方を振り返つてちよつと笑つた。既に間が十メートルくらい離れている。

「 渡辺さん、そこでちよお待つといでんか。動いたらあかんよ？」

中野さんが私に向かつて呼びかけ、先に行つてしまつた。

確かに、下手に動くと転んじゃいそつだから、私は言われた通り大人しく待つことにした。

中野さんの姿が、車の影に隠れて見えなくなる。

まさか、置いて行つたりしないよね？

ちよつと不安だつたけど、動くとやつぱり倒れちゃいそつで。つうう、もどかしい……。

まさか、バイト始める前に、こんな苦労するとは思わなかつたわ。しばらくすると、中野さんが手ぶらで戻つて來た。

「お待たせ。トランクが邪魔やつたし、先置いてきてん。ほら、オレに掴まつとき。ほんなら転ばへんよ」

中野さんが自分の左腕を差し出してくれた。

「えつと……」

この腕に掴まれつてことだよね？

でも、いくらこんな非常事態だからつて、そんな、男の人の腕とか普通に掴んじゃつていいものなの？

「オレの腕じや、あかんか？」

「えっ？ いやっ、あの、全然っ、そうじゃないっですっ」

私は右手でそっと中野さんの腕に触れた。

中野さんが右の手で私の手を取つて、自分の腕にしっかりと絡める。

「うわーっ！ うわーっ！ 恥ずかしいよおお。

「ほら、もう大丈夫やろ？」

中野さんの言うとおりだつた。

ぐらぐらしていた私の身体が、途端に安定した。

「ほんとだ……」

「雪の上歩くのってコジがあんねん。すぐ慣れるわ。それまで掴まつとき」

そして、一人で一緒に、車があるつていう方向へ歩き始めた。

中野さんは、しつかりした足取りで私を支えながら歩いてくる。歩きながら、私は、中野さんの歩調は、いつもよりもぐっと遅くなつてゐるに気が付いた。

多分、私に合わせてくれてるんだ。

初め、見た目でちよつと怖いつて思つちゃつたけど、なんか、中野さんつてもしかして、すつこじジョントルマンさん？隣の中野さんを見上げると、「ん？」と笑顔を向けてくれた。「それにしても、ホンマ役得やわー。」んなかわええ子と堂々と腕組んで歩けるんやもんなー。大介兄チャンにお礼言わなあかん」私は慌てて下を向いた。

多分、真っ赤だ。

カワイイなんて言われたことないんだもの。

学校のお友達も言つてくれるけど、でも、あれば、なんかお人形さんとかワンコちゃんとかに言つみみたいな言ひ方だし。本気じゃないと思つ。

「あ、ホラ、あの田口ポンがベンションの車や。もつもつといへし、がんばりや？」

私は頷いた。

支えてもらつてゐるナビ、やつぱり氣を付けてないと転んじゃう。

今転んじゃつたら、中野さんまで倒れちゃう。うう。

結構必死だ。

それにして、未だベンションに着く前からこんな状態なの、元の

私、ベンションのお仕事なんてできるのかなあ？

オーナーさんや中野さんに迷惑かけちゃつたらどうしようつ?

中野さんが開けてくれた車のドアから、助手席に乗り込む。ワゴンの中は広く、後ろには一列分のシートがあった。

運転席に回り込んだ中野さんが車に乗り込み、シートベルトを着用する。

あ、そうか。

私もシートベルトしなきゃ。

普段、車で移動なんてしないから、つい忘れちゃうんだよね。

中野さんが、キーを差し込みながら言った。

「そや、先言づくわ。運転中は、どつか掴まつとった方がええかもしねへんで？ オレの運転、荒っぽいらしいし」「ええっ！？」

私は急いでドアの上部にある取っ手につかまる。

それを見た中野さんが声を出して笑いだした。

「あははは！ 渡辺さん、よーやくしゃべってくれた。すまん。本気にするとほ思わへんかった。大丈夫やって、オレ、安全運転やかうら」

それ、ホントにホントですよね？

「そんなに緊張せんといでーな。取つて喰うたりせえへんさかい。こんなかわええ子を助手席に乗せとんのに、危ない真似でけへんつて。ただな？ オレも氣いつけるけど、この時期、雪に慣れてへん車がぎょーさんあるさかい、オカマ掘られたりすんねん。せやから、もしふつかられてしもたときは、堪忍な」

中野さんがエンジンをかける。

バックで駐車場を出るとき、中野さんが左手で助手席のヘッドレストを持って後ろを振り返った。

なんか……変な気持ち。同年代の男の人をこんな近くで見る」といふんて今までなかつたからかな。なんか、惹き付けられる。

よく、テレビや雑誌で『男の人に惹かれる瞬間』ってテーマにこの格好が出てくるけど、あれ、ホントだつたんだ。

中野さんの運転は、意図したとおりの安全運転。とにかくいつも全然スピードを出さない。

おかげで、窓の外の景色をゆっくりと眺めることができた。

青い空、遠くに見える白い山、道や街路樹を覆う雪。

どれもとっても綺麗。

「さつきはホンマにごめんな。渡辺さん、名前以外、何も話していくへんさかい、嫌われたんかと思つた」

中野さんが、運転しながら話しかけてきた。

未だもうちょっと外を見ていたいけど、失礼だよね？

「あの、ただの、人見知りなんで……」

私は中野さんの方を振り返ると正直に答えた。先に知つておいてもらつた方がいい気がしたし。

「そーなんか。確かに、大人しい感じやもんなん。そしたら、オレみたいなヤツ、つむれいんとかやつ?」

「いえ！」

そんなことないです。逆に、羨ましいくらいです。

私もそんな風に話してみたいなあつて、さつきからずつと思つてるくらいなのに。

「そや、渡辺さんって、学生さんなん?」

「ええ」

「オレも学生やでー。歳は? 聞いてもええか?」

「今、十九で、もうすぐハタチです」

「ホンマに? なんや、オレとタメやんか。渡辺さんて、なんか落ち着いてるさかい、オレよりも年上やと思うとつた」

「ただ、無口なだけなんじやないかな。」

落ち着いてるなんて、恵美ちゃんたちに言つてもうつたことないけどなあ。

「なんや、そつかー。やつやつたんやー。それやつたら、オレ、今

から『雪奈ちゃん』って呼ばせてもいいな

はい?

「ひ、ひ……」

『雪奈ちゃん』?!

思わず中野さんを見上げた。

「あかんのん?」

中野さんは、そう呼ぶのが当たり前、みたいな顔をしてくる。  
そんな風に聞かれても……。

「……え、ダメじゃない、です、けど」

ただ、恥ずかしいんです……つてこいつを持ちはやっぱり言葉にならなくて。

ああ、ほんなんじゃダメなのに。

「ほな、『雪奈ちゃん』て呼ばせてもいいつな」中野さんは満面の笑みを浮かべた。「ホラ、なんか苗字に『ちゃん』付けて堅つ苦しげやん? そういうの、オレあんまり好きいやつねん。雪奈ちゃんも、オレのこと『歸』って呼んでんか」

そんな気楽に言われると、かえつて構えちゃうなあ。

とてもじゃないけど、今日会つたばかりの、しかも男の人を、名前でなんて呼べないもの。

それにしても、中野さんつて、ちごこ。口から言葉が突いて出でくるみたいに話す。

今だつて、会つてからずっと中野さんが一方的に話してる感じだし。

いいなあ、私もほんんな風に、思つてこないことをどんどん話せたりいいのに。

私は一人っ子で、高校生卒業まで、学校でもずっと無口で地味な子だった。

どうせ、すぐに引つ越しむちゅうじつと言つ考へもあつたのかもしない。

女の子とばかりほとんど話せなかつたから、男の子となんて話した記憶すらない。

だから余計に、困惑っちゃう。

「『みんな、ホンマ、オレ、つるをこやる。よおツレに言われんねん。』『五分でいいから黙れ』って。大介兄チャンにも、よお言われるさかいなあ」

「そりなんですか？」

確かに、中野さんつてよく話す。

関西弁の人つて確かにそういうイメージあるけど、あれはテレビの中だけだと思ってた。

でも、私みたいな口下手な人には、話しかけてくれる安心感っていうのがすごく感じられるんだけどな。

「なあ、雪奈ちゃん、同じ年なんやし、その敬語やめへんか？」

「えっと、がんばります……」

中野さんは小さくため息をついた。

「……。ま、ええわ。オレに人見知りせんようになつたらでええし、普通に話してんか。それまでは我慢しといたるわ。

そうそう、今の内に何か聞いておきたいこととかつてある？」

え？ 急に話せつて言われても……。困ったなあ。

でも、ペンションがどんなところとか、バイトの仕事内容とか、聞いてみたいなあ。

あ、それに、さつき中野さん、ちょっと氣になる言い方してたなあ。

なんて聞こう？

ちょっとと考えてから、思い切つて、さつき飯になつたことを聞いてみることにした。

「あの、中野さんも、アルバイトさんなんですか？ さつき、なんか、ちょっと違う言い方、してた気がして」

私の言葉に、中野さんはちょっと驚いたみたいだった。

「雪奈ちゃん、よお覚えとんのんなー。んー……確かに、ちょっとち  
やうねんなー。」

実はな、大介兄チャンつて、オレの親父の弟やねん。そんでな、  
オレ、ボードがめっちゃ好きやさかい、何年か前に大介兄チャンに  
頼み込んでな、この時期になると毎年ペンションに住み込ませても  
ろとんねん。ペンションの仕事を手伝つ代わりに、宿と食事を提供  
してもらつちゅー約束なんや。そやし、オレはバイトじやのーで  
『タダ働き』つちゅーやつちゅ

中野さんがあっけらかんとして言つた。

タダ働きだなんて、明るく言つ葉じやないと思つんだけどなあ。  
その言い方が可笑しくつて、私はクスクス笑つてしまつた。

「ん？ オレ、変なこと言つた？」

「いえ、中野さんつて、ボードが、好きなんだなあつて思つて  
「おう、楽しいでー、ボード。雪奈ちゃんもやらへん？」

「私？ ……できるかなあ？」

「大丈夫やつて。ボードつて、いろんな技があんねんけど、ホンマ  
はそんなんどーでもええねん。自分の好きなように雪の上を滑つたら  
ええ。極端な言い方したら、斜面転がつとつてもええんやで。自  
分が楽しつつて思えるように滑ればええねん」

「じゃあ、ちょっとだけ、やってみようかな」

チャレンジ。誓約の一つだもんね。

「そうそう、そうせなな。そーや、オレが教えたるわ

「それは……悪いです。私、本当に初心者だから、中野さんの足引  
つ張つちゅうだけになりそうですし」

「ええねん、一人より二人の方が絶対に楽しいし。オレは毎年来と  
るんやし」

「じゃあ……バイトの空き時間にでも」

「おっしゃ。まかしどきー 受講料は安づじとくわ  
ええつ？ お金取るの？」

私の思つたことが、表情にも出ていたらし。中野さんが笑つた。

「冗談やつて。本気にせんといでんか」

「 中野さんつて冗談ばっかりですね」

「そりや、関西人やもん。冗談言つてナンボつちゅー感じやしなあ」「えー。あ、そうだ、アルバイトのお仕事つてどんなことあるんですか?」

中野さんは赤信号で止まると、私の方を向いてニヤリと笑つた。

「 雪奈ちゃん、やつと普通に話しかけてくれるようになつたな。ちよつとはオレに慣れてくれたん?」

あ……。

思わず、手で口を抑える。

私、いつの間にか、中野さんのペースに巻き込まれてた?

「すみません……」

「ええつ、そこ謝るト」「なん!？」中野さんが大袈裟に驚いた。「別に雪奈ちゃんはなんも悪いことしてへんよ。もともと、そうせいっちゅーたんはオレやし。後は『中野さん』が『昂』になつたら合格やな」

中野さんの左手が、私の頭をポンポンと優しく叩いた。

ひやああつ!!

シートベルトの抵抗を僅かに感じた。慣性の法則だ。つまり、車が動き出たんだ。

でも、私は顔を上げられない。

今は、膝小僧を見つめるしか、できない。

だつて、私、きっと、また、真っ赤だ。

男の人には頭を優しく叩かれたことなんて、今までに一度もないんだもの。

男の人って、みんな、こんなこと平氣であるのかな?

ペンションは、駅から車で一時間近く走ったところにあった。

もつとも、雪道のせいで時間がかかっただけで、距離にしたらそこまで遠くないのかもしれないけど。

その間、中野さんといろいろ話したおかげで、随分打ち解けられたと思ひ。

いつの間にか、緊張が解けていた。

私としては、すこく珍しい。

私が、こんなに早く、初対面の人と話せるようになるなんて。さすがに未だ、『中野さん』としか呼べないけど。

「でな、今向かってるペンションなんやけどな。大介兄チャンと奥さんの浩美さんの一人で経営してんねん。めっちゃええトコやで。白樺とか生えとんねん。雪で地面が白いのに木まで白ついで、氣いつけなぶつかりそうになるくらいなんやけどな。でも、晴れた日にレンティの頂上から見る景色とか、めっちゃ綺麗やねん。運がよかつたら、樹氷とかも見れんねんで」

車の中で、中野さんが口をキラキラさせしゃべっていたけど、その意味がなんとなくわかった。

窓の外の世界は、それまで私が知っていた世界とは全く異なるもので、まるで異世界に来たみたいだ。

『一面の銀世界』ってよく言つけど、ほんやつとしたイメージだったものが、そのまま具現化されたような気分。

中野さんが車を止め、エンジンを切った。

ペンションに着いたんだ。

「雪奈ちゃんも、ここならきっと独りで歩けんでー。この辺は雪でも雪が溶けへんさかい、歩きやすいんや」

中野さんはシートベルトを外すと、先に車を降りた。

私もそれに習つて車を降りる。

足の裏から、ふんわりとした感触が伝わってきた。

あ、雪だ。

いや、当たり前なんだけど。  
でも、駅に合った雪とは、明らかに感触が違つ。  
すつゝ／＼フワフワする。

「雪奈ちゃん、行くでー」

中野さんの声に顔を上げる。

中野さんは、右手の指で車のキーをぐるぐる回し、左手には私のトランクをぶら下げていた。

あつ、荷物、また持つてもひさしひさつてる。

「それ、私、持ちます」

「ええよ。こんな雪の中、トランクなんて転がされへんで?..」

足下を確認する。

確かに、道じきもあるけど、それは雪を踏み固めたような感じになつてゐるだけで、とてもじやないけど、何かを転がせそつにない。

トランクは、列車を降りるときに持ちあげるのがやつとだつたらしくこの重さ。私一人では運べそつになかった。

「すみません」

「オレが勝手に『持つ』ってやーてるんやし、『気にせととき

「ありがとつゆぞこまわ」

私はお礼を言つた。

ペンションは、ログハウスみたいな外観。玄関のドアの脇に『ペンション・ソフトライム』っていう同じく木でできた表札代わりの看板があった。

中野さんが玄関を開け、中に入る。ペンションの中はとても温かかった。

エントランスの天井がこんなに高いのに。  
きつと気密性が高いんだ。

「大介兄ちゃん、帰つたでー」

「あ、昴。お帰り。ちゃんと会えたか？」

男の人の声だ。

私の緊張が一気にぶり返した。

「おお。あ、雪奈ちゃん、あの誕生日やしたオッサンが、このペンションのオーナー、大介兄ちゃんな」

「初めてまして、渡辺さん。私がこのペンションのオーナーです。皆さんにはマスターって呼ばれますけどね」

「こちらこそ、初めてまして。渡辺雪奈です。しばらぐの間、お世話になります」

言いながら、礼をする。

よかつた。なんとか、つつかえずに言えた。

マスターは、とても優しそうな人だ。

ただ、こういった場所に住んでいるからか、手がこづれと節くれだっていた。

中野さんの言つとおり、顎髭をおしゃれに整えている。血が繋がつてるつてだけあって、目元がちょっとだけ、中野さんに似てなくもないかも。

そう思いついたら、不思議と緊張が緩んだ。

それにしても、叔父って言つには随分若い気がする。

「その分だと、もう私と昴の件は、聞いたみたいですね」

と言いながら、マスターの目が急に鋭くなつた。

その視線の先には中野さんがいる。中野さんが僅かに後ずさつた。

「昴？　お前は誰のことを『オツサン』って言つたのかなー？　ご希望とあれば、今夜、部屋から追に出してもいいんだぞ、俺は」

「うわ、それがかわえ甥っ子に言つ言葉かいな。こんな時期に外なんかに追ん出されたら、それこそ死んでまうやん」

「お前なら大丈夫だる。コキブリ並みの生命力だ。ちょっとやらそつとじや死にそうにないからな」

私はつい、笑つてしまつた。

仲がいいんだ、この一人。そうじやなきや、こんな風に言い合えないもの。

「オ…オレ、荷物置いてくる」

分が悪いと思つたのか、中野さんがトランク持つたまま退散した。

「まったく……」マスターがその後ろ姿を目で追つた。「昴の生意気なのは、本当に困るよ、全く。兄貴はどんな育て方してるんだか」

マスターはそこでふとため息をつくと、私に笑顔を向けた。

「なんか見苦しいところを見せちゃつたね」

「いえ、そんなことないです。緊張していたので、なんか、かえつて、ホツとしました」

「本当かい？　それならよかつたのかな？　あんな奴でも役に立つもんだな。

さあ、そんなところに立つてないで、どうぞ中に入つて。あ、靴はそこで脱いでね」

私は玄関で靴を脱いで揃えると、出されていたスリッパに足を滑り込ませた。そしてマスターに促されるまま、中へと入つた。床には絨毯が引かれていて、とても暖かい。

マスターがホールに入つてすぐ右にあつたドアを開けた。  
その先には、ラウンジがあつた。

窓は小さめだけど南を向いていて、ソファにテーブル、テレビ、

それに暖炉がある。

居心地のいいお部屋。まるで、リビングのような空間だ。  
マスターの人柄が表れてるみたい。

「さて、改めて」マスターがこほんと咳払いした。「渡辺さん、ペンション・ソフトライムへよついた。これからしばらくの間、宜しく頼みます」

「こちらこそ、よろしくお願ひします。あの、私は、いつも…住み込みのアルイトつて初めてで……」

みなさん足をひっぱっちゃうかもしねいんです。

語尾は口の中で消えてしまつたけど、多分、マスターは私の言いたいことがわかつたんだと思つ。

マスターが朗らかに笑つた。

「大丈夫だよ、誰にでも初めてはあるさ」

私の中にあつた後ろめたさが、ゆっくりと溶けて行く。

「実は、俺もアルバイトを雇うのは初めてなんだ。今までは、俺と奥さんと埠でやつていけてたしね。客室もそんなに多いわけじゃないし。でも、今年はちょっと事情があつてね」

マスターが言葉を切つた。

私の後ろの何かに気を止めているんだと気づいて振り返る。

この部屋に入ってきたドアの方だ。

そこには、女性の姿があつた。お腹が大きい。

え、妊婦さん？！

「大介つてばー、渡辺さんが来たら私も呼んでつて言つたのに

その女性が言つた。

マスターよりも少し若そう。口を尖らせて、ちょっと拗ねてるみたい。

31

「その仕草が、なんだか可愛らしき。

「ごめん、浩美。忘れてたよ。よくわかつたね」

「せつめいじで、昴君に会つたの」

もー、と言しながら、その女性がマスターの隣に座つた。

マスターが、その肩を抱く。

「わあ、なんかこっちが恥ずかしいよお。

「紹介するよ。俺の奥さん。浩美<sup>ひろみ</sup>って言つんだ。浩美、こちらが今田からお手伝いしてくれる渡辺雪奈さん」

「はじめまして」

浩美さんが手を差し出してくれた。私も手を出し、握手する。

「いらっしゃいそ初めまして。雪奈ちゃん…って呼んでもいいかしら?」

「え? ええ」

浩美さんの笑顔も、マスターと同じで暖かい。

マスターがするし、とばかりに横から口を挟んできた。

「じゃあ、俺もそう呼ぼうつと。なんか、さつき昴もそう呼んでたんだよな。若こいつていいよなー」

「ホント? あの子も隅に置けないのねえ」

「??? 何の話だるづ?」

私は曖昧に笑顔を浮かべることで、その場を凌ぐことにした。もはや、名前で呼ばれる」とへの抵抗心も沸いて来ない。

「もう察してると思つたけど」マスターが言つ。「雪奈ちゃんに来てもらひーになつたのはね、浩美のお腹に赤ちゃんができるからなんだ。もう安定期に入つてゐし、ちよつとは動いた方がいいんだけど、この身体じゃ、無理はさせられないからね。あ、だからって、雪奈ちゃんに重労働をやらせるつもりはないから安心してくれていよい。客室の掃除とか、料理を作るときの手伝いとか、洗濯とか、そういうつたものを手伝つて欲しいんだ。力仕事は全部、昴に押し付けていいから」

ちょうど、中野さんが部屋に入つてきた。

「 ちょお待ち！ 大介兄チャン、そりやないでー。大介兄チャンも手伝つてえな。未だ三十代なんやろ？」

ええつ？！ 若そうとは思つてたけど、マスターつて、未だ三十代なの？

確か、中野さん、『叔父さん』つて言つてたよね？

「何せ俺は『オッサン』らしいからねえ。腰痛めて動けなくなつても困るだろ？」

「未だ怒つとんのかいな……。ホンマに、もお堪忍してえな」

中野さんのその言い方が、いかにも哀れっぽくて、私はつい噴き出してしまつた。

よかつた、いい人たちばっかり。  
がんばれそうだ、私。

今日は木曜日。ここに来たのは月曜日だから、ペンションでのアルバイトを始めて、三日経つことになる。

さんざん緊張していた割には、普通に仕事をこなしていくと思う。

逆に、これでお給料もらつてもいいの？ つてくらいで、ちょっと拍子抜けしている。

朝は早く起きて、朝食作りの手伝い。自分たちも食事を取つて、片付け。

お客様が出かけている間、または、チェックアウトしたら、客室の掃除、寝具シーツの交換と洗濯、それにお風呂の掃除。

その後、廊下やリビング、プレイルームといった共用スペースの掃除。

その後は、夕食まで、自由時間だ。

買い物と夕食作りは、マスターと浩美さんでしている。

だから私は、それをお客様のいるダイニングまで運んだり、後片付けをしたりする。

私は、大学に入つてからずっと一人暮らしをしてるから、家事はなんとなく一通りこなせるようになつていたし、わからないことがあつても、マスターも浩美さんも中野さんも、みんな親切に教えてくれた。

ペンションの人たちへの私の人見知りも徐々になくなつて（人見知りなんてしている場合じゃなくて）、すげく、居心地がよかつた。

マスター や 浩美さんといろいろ話したりもした。

どうやら、マスターと中野さんのお父さんは、随分年の離れた兄

弟らしく、マスターは未だ三十七歳なんだそうだ。浩美さんは、その四つ年下の三十三歳。

ちょっと結婚が遅かつたらしく、今、浩美さんのお腹にいるのが、初めての赤ちゃんなんだって。

確かに、初産にしては、ちょっと遅めかな。

だから余計に、マスターは浩美さんの身体を気遣つてる。ふとした瞬間にね、感じるの。ああ、この一人は、すくなく愛し合つてるんだなあって。

例えば、食事の終わつた食器を浩美さんの代わりにマスターが運んでいたり、浩美さんが階段を昇り降りするとそれにせり気なくエスポートしていたり。

本当に、些細なことなんだけど。

中野さんとも、やらない打ち解けた……と思ひ。

まず、呼び方が『鼎さん』になつた。でもこれは、打ち解けたつて言つよりも、マスターからの希望、かな。

男の人の友達（？）っていうだけであんまり慣れてないのに、名前で呼ぶなんて、なんだか恥ずかしい。

でも。

「俺も浩美も『中野』だからね。雪奈ちゃんが『中野さん』って言つたびに、反応しちゃうんだよね。誰のこととか区別するためにも、あいつのこと『鼎』って呼んでくれないかなあ？」

マスターにそう言われちゃうと、拒否できない。

確かにその通りなんだもの。

そして、それに呼応するみたいに、鼎さんは私のことを呼ぶとき、いつの間にか『雪奈ちゃん』から『雪奈』に変わつた。

それは全然嫌じやない。親しみこめてそういう呼んでくれてるのがわかるから。

でも、鼎さんこそう呼ばれるたび、なんか、落ち着かない気持ちになる。

「そばゆいよつな、歯がゆいよつな。脳の奥がざわざわする。

それが、なんか気になつちやへ。

同じ屋根の下に居て、しおちゅう顔を合わせるんだから、いい加減に慣れなきやつて思つてるんだけど。

鼎さんは、朝のお仕事を一通り終えると、毎日のようにゲレンデへ繰り出してくる。

今朝は未だ、お仕事しているはずだから、ペンション内のどこかにはいるはずだけど。

もう言えば昨日は、ペンションに泊まりに来ていたOの一人組さんと一緒に、仲良さげに帰つて来ていた。ゲレンデでたまたま遇つて、そのまま一緒に滑つてたんだって。

すじく明るくて陽気なOさんたちで、鼎さんもとっても楽しんだみたいだった。

本当は、昨日も一昨日も、ゲレンデに出る前に鼎さんは私を誘つてくれていた。

ペンションに、貸し出し用のウーハーやボードがあるから、それを使わせてもらえばいいって口も教えてくれた。

でも、私は未だ仕事を覚え切る前から遊びに出でやうことになんとなく抵抗があつて、断つていた。

それに、雪山 자체が初めてで、恐怖心もあるだけだ。

今日は、ちょっとと出てみようかな、ゲレンデ。

せつかくここまで来たんだもの。チャレンジしてみたい。

鼎さんと一緒にだときっと迷惑かけちゃうから、とりあえず一人で。

「『案ずるより生むが易し』って言こますけど、本当ですね。私もつと皆さん足を引っ張っちゃうんじゃないかつて思つてました」密室に運ぶ新しいシーツを積み重ねながら、私は言つた。

洗濯機の前には、浩美さんがいる。

「そんなことないわよお。雪奈ちゃんが来てくれて、私、すっごく助かってるんだから。家事もできるし、気も利くし、よく働いてくれるし、本当にいい子が来てくれたわ。ねえ、大介さん？」

浩美さんが見上げた先には、マスターがいる。

マスターは脚立の上で点かなくなってしまった電球を取り替える作業をしていた。

「ホントだよ。アルバイトってやつぱりアタリ・ハズレがあるからねえ。電話が来たときは、もつとハキハキした子かなって想像してたけど、会ってみると全然違うね。なんか雪奈ちゃんってふんわりしてる。名前とイメージがピッタリだ」

私は苦笑するしかない。

電話したの、実は私じゃないんです……なんて、いまさら言い出せないし。

それに、今はここに来て本当によかったって思つてるも。典子ちゃんやみんなに感謝しなきや。

「本当にそうよね。とっても可愛い名前。なんか、このペンションにもピッタリだし。もしかして、冬生まれ？」

「え？ ええ……クリスマス・イブなんです、誕生日」

「えーっ！ すごいじゃない。なんか口マンティックね」

浩美さんは皿をキラキラさせている。

私は曖昧に相槌を打った。

実際は、そんないいものでもないですよ？

だいたい冬休み中だし、イブなんて言つたら友達たちは彼氏と一緒にだ。家で過ごすだけだもの。

もちろん、お父さんもお母さんも、お祝いしてくれること。

お父さんはおめでとうってプレゼントをくれて、お母さんはいつも手作りのケーキを作ってくれる。お母さんは「いい加減、彼氏の一人もないの？」って要らないしつゝも一緒にくれたりして。

そういうえば、今年は、そんな風に祝ってくれる家族もいないんだ  
つた。

ちょっと気分が萎える。

「ねえねえ、大介さん。イブの日、私たちで雪奈ちゃんのお誕生日会しましょ？」

浩美さんが脚立を降りてきたマスターの服を引っ張った。  
「そうだな、せっかく頑張つてもらつてるんだし、お礼も兼ねてお祝いしなきや」マスターも笑顔だ。「イブって言つたら、もうすぐじゃないか。今日が十八日だから……六日後?」  
えつえつ?

思つてもみなかつた話の展開についていけない。

「あのつ、いいです、そんな、気を使わいでください」

私は一生懸命言つたけど、もうマスターも浩美さんもヤル気満々だ。

「面白そ'うじやないか。昂にも言つておかなきやな

「あの、ありがとうございます」

私は頭を下げた。

他人の私を祝つてくれるつて言つ「一人に心から感謝した。

「でも、この週末から冬休みに入る学校や会社が増えるから、イブの頃には、お客様がたくさん来てるわよー。きっと忙しくなるから、今のうちに覚悟しておいてね」

おどけた調子でそんなことを言つながらも、浩美さんは手を休めない。

「はい」

私は積み重ねた今日の交換分のシーツの下に両腕を通すと持ち上げた。

その高さで前方が見えなくなる。

「雪奈ちゃん、そんなに持つて大丈夫?」

浩美さんの声がする。心配してくれてるのかな。

「大丈夫です。意外と力持ちなんですよ、私」

「本当? 無理しないでね」

それは私のセリフですよ、浩美さん。

浩美さんつてば、四六時中何かしら働いてるんだもの。

ただでさえ身重で、いろいろと動きにくいはずなのに。本当に働き者だ。

そんな浩美さんを田の前にして、ラクしようだなんて思えない。

「じゃあ、行つてきますね」

私はシーツの脇から顔を出しつつ、歩き出した。

ペンション・ソフトライムには、全部で十の客室がある。全部ツインルームだ。

マスター や 浩美さん、 専門さん、そして私の過ごす居住区は別棟になつていて、ペンションとは屋内廊下で繋がつている。

今いらしているお客様は四組。

だいたいの人が、一泊二日や一泊三日で帰つていいく。

このペンションの雰囲気からか、恋人同士だつたり、女同士だつたりと、お客様はみんな若い年代の方ばかり。

そして、お客様までみんな、いい人たちばかりだつた。

やっぱり、いい人の近くにはいい人が集まるのかな。

そんなことをぼんやり考えながら、階段を上ろうとして廊下の角

を曲がった途端、何かにボフッつとぶつかつた。

あれ? ここには何もなかつたはずなんだけどな。

私、何か置きっぱなしにしちやつてた?

シーツが崩れて来ないように氣をつけながら、一、二歩後ろに下がつて、上半身を横に倒して見た。

人の脚がある。

お客様は、もうみんな、出掛けられたかチェックアウトされたはず……。

「なんやなんや？！」

私の腕から、重さが消えた。

「あ……」

昴、さん。

目が合つた。ドキッとする。

「なんや、雪奈かいな。こないなもん持つたまま階段歩いたらあかんつて。危ないで」

昴さんは私から奪つたシーツをひょいつと自分の腕の上で整えた。

「どいや？ オレが持つて行つたるさかい」

昴さんが先に立つて、階段を上つて行く。

私はその背中を複雑な気持ちで眺めた。

昴さんは出会つて四田田。

そんな短い時間しか一緒に過ごしてないのに、気がつくと、昴さんは目で探ししている自分がいたりする。

なんか、変な気持ちだ。

すっかり頼りにしちゃつてるのかな、とも思つし、私にとっては初めての男の人の友達だから、変に意識して気になつてるだけかな、とも思う。

昴さんは、優しい。

私がこいつやって何かを運んでいるといひ出でわすと、必ず代わりに持つてくれる。

掃除しているときだつたら手伝ひてくれるし、一人で休憩してるときは声をかけてくれる。

ゲレンデにだつて、毎日誘つてくれる。

そのたびに、私はとっても暖かい気持ちになるけど。

でも、それは、きっとみんなに対して同じように振舞つっていて

「雪奈？ 何しとるん？ ビの部屋なんか教えてくれな、運ばれへ

「ん

昂さんの声にハツとする。昂さんが、階段の踊り場で私を見下ろしていた。

「いけない。私の仕事なのに。  
「「」、「ごめんなさい……」

私は急いでその後を追つた。

アイロンの効いたシーツが、バツと宙に広がった。

四隅の内の一箇所を持つて、静かに下ろす。反対側の一箇所は、昂さんが持つてくれていた。

いつの間にか、シーツの交換まで手伝つて貰つちゃつてる。  
私が頼んだわけじゃくて、昂さんにとっては当たり前のことによう、シーツを部屋に運んだ後自分から広げ始めたのだ。

昂さんは昂さんで、お仕事あるはずなのに。

「すみません、ここまで手伝つてもらっちゃつて……」

「そんなん気にせんでええよー。手伝つてもらってるのは、いつかの方やし」

昂さんがこり笑う。

その笑顔に、なんか急に落ち着かない気持ちになつた。  
慌てて俯いて、シーツの皺を伸ばす。

「で、でも、昂さんも、自分のお仕事があるでしょ?」

「オレ? オレはもお終わつたで? 未だお客様も少ないし、樂チンなんや。明日あたりから、さよーさん来おるけどな。雪奈も、今のうちに覚悟しどきや?」

あ。さつき、浩美さんに言われたことと同じと書いてる。  
なんだかおかしくなつて、クスリと笑つてしまつた。

昂さんがそれを目敏く見つける。

「ん?」

「いえ、なんでもないです」

「なんや、氣色悪いなあ……思に出し笑いか?」

「そんな感じです」

昴さんが表情を歪めて頭を搔く。でも、すぐに脣の端を片方だけ上げて笑つた。

「なあ、雪奈、知つとる? 思い出し笑いする人つてな、えつちなんやつて。

そー言えば、オレら、今、密室のベッドの脇で一人つきりなんやけど……なんか変な気分になつてけーへん?」

「変な気分?」

「そりや……男と女がベッヂであるコトつちゅーたら、一つしかないやろ?」

昴さんの話が私の頭に到達するまで、一瞬、間が空く。  
えつと、それって……?

その意味を理解した瞬間、私の顔が火を噴きそうなくらい熱くなつた。

「なつ、なりませんつ!」

もおーつ! 昴さんのバカツ!

なんでそんな恥ずかしい」と、平氣な顔で言つのよー。  
信じられないつ!

昴さんが真っ赤になつた私を見て、お腹を抱えて笑い出す。

「もしかして、雪奈、想像したん？」

「してませんからっ！」

「あははは、雪奈つて、ホンマにかわええなあ。真っ赤つ赤あや」

「言わないでくださいッ！」

火照りが治まらない。

ああ、ホント恥ずかしい。

昴さんが未だ笑いながら、私を宥めるよひよ頭をポンポンと撫でた。

「そんなんじや、雪奈の彼氏は苦勞しどるんやうなあ

「彼氏なんていませんッ！」

「あ、おらへんの？」

「そーなんです。いないんです。

だからもおあんまりからかわないでください、ホント、お願ひ。

「なんや、彼氏おらんのんか」

「昴ー！ 昴？ なんだ、ここにいたのか」

昴さんが何か言いかけたのを遮つて、マスターが客室のドアから顔を見せた。

「おお、大介兄チャン、どおしたん？」

「あ、雪奈ちゃんも一緒か。ちょいびよかつた。明日の夜、森田さんが恒例の鑑賞会やるけど来るかつて誘つてくれてるんだ。昴、雪奈ちゃんと行つて来たらどうだ？」

「ホンマに？ 行く行く。また誘つてくれたんや、嬉しいわあ。雪

奈も行くやろ？」

鑑賞会?

「あの、何の話……」

「あ、森田さんっちゅうのは、近所に住んだはるオッチャンでな、星見るんが趣味なんやで。毎年、年末に、星空鑑賞会開いてん。メチャメチャ綺麗やで」

星空鑑賞会だなんて、なんか素敵。

行ってみたい……。

確かに、このあたりなら、星も綺麗に見えそудもの。

冬の大三角、見えるかな。もしかしたら、冬のダイアモンドもはつきり見えるかも。フレアデス星団も見えるんだろうなあ。

「じゃあ、一人共行くつて、森田さんに言つておくよ」

私の表情から、イエスの返事を読み取つたらしく、マスターが言う。

「おおきに。大介兄チャンは、一緒に行かへんの?」

「今年は辞めとく。浩美を置いていけないからね。家で一緒にのんびりしてるよ。といひで、一人とも、今日、これからじうするんだ?」

マスターの声に、昴さんが何かを思い出したように手を打つた。

「あ、そいや、雪奈、今日、この後ヒマ?」

「え?」

「今日、ヒマ一緒にゲレンデ行かへん? わりきな、ホンマは、雪奈を誘おう思て探しとつたんや。昨日も、昨日も、天氣があんまりよおなかつたけど、今日は快晴やさかい、きっと、めつちや氣持ちええよ」

どうしよう。

確かに、今日はゲレンデに行つてみよつとは思つてたけど、

昴さんと一緒に……。前に教えてくれるつて言つてたけど、そんなことしたら、それこそ、昴さんが楽しめなくなっちゃうんじやないかな。

昨日昴さんが一緒に滑つてたつていうの、ちゃんとくらこに、私

も滑れるんだつたら別だけど。

私は枕に手をつけた。

枕カバーも取り替えなきやね。

「でも、私、滑れないし」

挑戦したいとは思ひけど、そのせいで昂さんがつまらなくなつちやうのは、嫌だ。

「初めてなんだろ？ それなら滑れなくて当たり前さ。教えてもらえばいい」

マスターが後押ししてくれる。

「せやから、オレが教えたるんやんか」

昂さんが言つた。

本当に、優しいなあ。

私なんかに構つてたら、自分が楽しめなくなるの、わかってるはずなのに。

「私も、滑れるようになるかな、ボード」

ぱつりと呟いた。

「なるつて。なるなる。オレが保証したる」昂さんが自分の胸を叩く。「オレが手取り足取り教えたるさかい、安心しいや」

その言い方に、私はさつきの話を連想してしまった。ちょっと安心できない……かも。

「お前の『手取り足取り』は安心できん」

私の代わりに、マスターが言つてくれた。『トニーに、手ツツコミ付きで。

「なんやねん、大介兄ちゃん。まるでオレに下心あるみたいな言い方せんといでんか。雪奈が誤解するやん」

「そんなことないだろー。雪奈ちゃん、こんなに可愛いんだ。お前だつて健康な二十歳の男性だし？ 男だつたら、多少の下心は持つてるだろー」

「うつ、うつさいわ。放つといでんか。大介兄ちゃんかて、浩美さんのこと、ゲレンデでナンパしたつてゆーとつたやないけー。」

「そーだ。すつじく可愛かつたんだ。文句あるかな、なんかすごい内容なんんですけど……。

聞いてる私の方が、また赤くなっちゃいそう。

でも、内容はともかく、昴さんとマスターの掛け合いは、漫才を見るみたいだ。

「ま、冗談は置いといて」マスターが私の方を向く。「雪奈ちゃん、ゲレンデに行くなら、浩美の道具一式、使ってよ。どうせ浩美は使えないし、レンタルの物を使うより絶対にその方がいいから」

「ホンマに? 浩美さんの借りてええんやつたら、その方が絶対え

えわ。雪奈、借りといたら?」

「えっ、いいですよ、そんな」

私は胸の前で両手を振った。

これ以上善くして貰っちゃうなんて、恐縮しちゃう。

バイト代ももらってるし、レンタル代くらいは自分で出さなきや。それに、浩美さんに断りもなく、勝手に借りられないよ。

「大丈夫。浩美がそう言つてるんだ。雪奈ちゃんがゲレンデに行くなら、私の道具を使ってもらってくれつて。雪奈ちゃんに使ってもらえなかつたなんて言つたら、俺が浩美に怒られる」

う…なんか、断る術を失つた気分。

「じ、じゃあ、お言葉に甘えて……」

私はぺこりと頭を下げた。

マスターが、それでヨシ、と頷いた。

## 10 マスター夫婦の心遣い（4）

「実はもう、浩美の道具一式、準備できるんだよねー。雪奈ちゃんが行くつて言つたら『ハイツ』つて渡せるよつと、メンテナンスまでバツチリ。見たトコ、雪奈ちゃんの身体のサイズは浩美とそろ変わりなさそうだし」

手で顎鬚をいじりながら、マスターは私の身体を上から下までぞつと眺めた。

そのマスターを、昴さんが枕で叩く。

「あでつ！」

「そのやらしい目え、やめえや、このHロオヤジ！」

「昴ツ！ 何を人聞きの悪い……」

マスターが打たれたところを擦る。

な、なんか、ケンカ始まっちゃうの？

私はおろおろしつつも、どうにか一人に声をかけた。

「あの、私、気にしてませんから……」

「ほら、な？ 雪奈ちゃんもああ言つてるだろ。そう見えるのは、お前の心がヤマシイからだ」

マスターは勝ち誇つたようにヒヒ笑つたが、昴さんは不服そうだ。

「とにかく、心配なのは靴だけかな。試してもらつて、もし合わなかつたら、そのときはレンタル用の靴から選んでもらつね。足が痛いと、せつかくのボードも楽しめないからな」

「すみません。本当に、何から何まで……」

それから手早く仕事を終わらせて、ペンション内のドライルームに向かつた。

今、私は、浩美さんのものだというスノーボード用のブーツに足を通している。

とても運よくと言うか何といつか、足までサイズがピッタリで、板も靴もそのまま使わせてもらうことになってしまった。

今履いているブーツはちょっと大きく感じるんだけど、それでいいらしい。

「雪奈、利き足どっちかわかる?」

昴さんが、スノーボード用の板が入ったケースを開けながら私に聞いてきた。

「利き足?」

足にも利き足ってあるの?

「知らんのんか。んーと、じゃあ、右足前にして、筋斗雲に乗る力ツコしてみて?」

「へ?」

筋斗雲つて、アレ?

「いーから、はよおやるー」

「はっ、はい!」

右足を前に出して、体重をかけてみた。

……なんか、ぎこちない感じ。

「どお?」

「うーん……」

「ま、すぐにはわからんか。今の感覚、覚えときや? ほな、次、逆な」

今度は左足。

あ。こっちの方が、なんか自然だ。

「こっちの方がしつくりくる……かも」

「そか。雪奈は、レギュラーみたいやな。なあ大介兄ちゃん、浩美さんつて、レギュラーやつたつけ、グーフィーやつたつけ? ちょうどやつて来たマスターに、昴さんが聞く。」

マスターは、肩に何か大きめのバッグをかけていた。

「浩美はレギュラーだ」

「おお、ラッキー。浩美さんもレギュラーなんやつたら、板、このまま使えるやん」

なんかよくわからないけど、ここことがあったみたい。

「雪奈ちゃん、ウエアはここに置いておくから。中に「ゴーグルとか帽子も入ってる。後は昂に聞いて?」

「はい、本当にありがとうございます」

「おおきに」

「それじゃ、気を付けて。楽しんでおいで」

もう言い残して、マスターは行ってしまった。あとと浩美さんのところに戻ったんだ。

昂さんは、自分の板とブーツを持ってペンションの外に向かって歩き出した。

私も浩美さんの板とブーツ持つ。

うわあ、結構重いんだあ……。

よたよたと歩いていると、昂さんがすぐに戻って来て、私から板を取り上げた。

「結構重いやろ? でも、履いたらあんまり重さは感じひんようになるし」

昂さんはいつも笑顔だ。

「あ、ありがとうござります……」

まだ。

いつも助けられちゃってるな、私

板とブーツを、ペンションの外の、邪魔にならないところに置く。いつたん、ドライルームに戻った。

「じゃ、雪奈、オレたちも部屋戻るか。ウェア着なかんし」

昂さんが、マスターから渡されたバッグを持ち、マスターの居住区の方へ歩き出す。

マスターが私のために空けてくれた部屋は、昂さんの部屋の隣。

ちゃんとした部屋なんだけど、天井だけは屋根裏部屋みたいに斜めになつてゐる。

普段は使つていない部屋で、私が来るから慌てて掃除したつてマスターが言つてた。

マスターは、キャスターの付いた姿見まで用意してくれていた。その姿見とトランクを隅に立てて、布団を敷くと、それだけでいっぱいになつちゃうくらいの部屋だけど、あんまり部屋で過ごしていないからそれで十分。

もちろん、布団は毎朝上げている。

昴さんが、部屋の中にバッグを置いた。

「綺麗に使こてるなあ。オレの部屋とえらい違いやわ

昴さんが部屋の中をぐるりと見回した。

えつと……なんか、恥ずかしいんですけど。

私が俯いているのに気付いたのか、昴さんが謝つた。

「おお、すまんすまん。じゃあ、これ着て来てんか」

昴さんがバッグを開けて、中からいろいろと引っ張り出す。

その一つ一つを示しながら、着方を教えてくれた。

「ウェアの中は、タートルのフリースとかがえんちやうかな。動くと暑うなるさかい、あんまり着込まん方がええよ。下は、タイツ履いて後は、この中に入つとるスペツツと靴下履いて、その上からウェアな。

あ、それと、今のうちに、脚の筋、よお伸ばしちきや？ 傷めたらあかんし

「ハ、ハイッ！」

「ほな、オレもウェアに着替えてくるさかい」

昴さんが部屋から出て行く。隣から、ドアの音がした。  
えつと、フリースは、確か何枚か持つてきてたはず。

私はトランクから、ピンク色のタートルネック・ブルオーバーを出した。タイツは、今履いてるのでいいや。

うわあ、このスペツツ、クッショーンが付いてる？

膝とか、お尻とか……。なんか、一周りくらい太った感じだあ。  
靴下も、こんなに分厚いんだ。

だから、ブーツがちょっと緩くてもいいって言つてたのか。  
ウェアのズボンを履き、ベルトを締める。ジャケットを羽織り、  
ジッパーを上げた。

姿見を引っ張つて来て、覗き込む。

全然知らない私がそこにいた。

茶色いズボンと白いジャケット。ちょっとぶかぶかしてる?  
ニット帽を被つて、ゴーグルで抑えた。

鏡の前で、身体を右に左にひねりながら、着崩れしてるとこらがないようにウェアを整える。

うん、格好だけは、今のところ一人前……かも。

着こなしに自分なりに満足して姿見を片付けたところで、部屋の戸がノックされた。

「雪奈？ 着替え終わつた？」

「あ、ハイ」

「入つてもええか？」

「ええ」

「開けんでー」

昴さんが部屋に入つてきた。

あ、昴さんも着替え終わつてゐる。

うわあ、なんかカツコイイ、かも。

昴さんのウエアは、グレーと赤が基調色。一シットの帽子はウエアに合わせてグレー。ゴーグルが赤。

似合ひうなあ。スノーボーダーです！ つて感じがする。

私は……どうかな。

珍しく昴さんは何も言わない。顎に手を当てる、繁々と私を見ている。

そんなに見られると、は、恥ずかしいんですけど。

「あの、どうですか？」

私は聞いてみた。

「ホンマにめちゃめちゃ似合ひうなよ。ビックリした」そして「ひひりと笑ひ。『ほな行』いか

それからもう三十分後、私は昴さんに連れられて、ゲレンデへとやつて来ていた。

初めてのゲレンデ。初めてのスノーボード。

ドキドキするーーー！

心臓がバクバクしてゐのを感じながら、ブーツに足を包んだ。浩美さんのブーツは、ワイヤー式つていうタイプらしいって、普通のタイプよりも着脱がラクなんだそうだ。

脛のところに丸いダイヤルみたいなものがあつて、それをぐりぐり回すことで、靴紐の代わりのワイヤーが巻き取られて足が締まり回すことで、靴紐の代わりのワイヤーが巻き取られて足が締まつていく。

緩めたいときは、そのダイヤルの真ん中を押しながら、ブーツを開けばいいんだって。

昴さんのブーツは靴紐式だ。こつちが普通のタイプらしい。ぎゅーっぎゅーって、一編み一編み、自分で堅く締めていくつている。大変そう……。

「ワイヤータイプ、ええなあ。オレも今度、それ買おとこかな」昴さんよりも早く履き終えてしまった私を見て、昴さんがぼやく。次は板だ。

昴さんが、板を履く前に、インフォメーション・センターから少し離れた人の少ない場所に行こうって言った。

「雪奈は、スキーもやつたことないんやつたな？」  
「はい……」

「ほんなら、まずは、板履いて立てるようにならな。その後、スケーティングやる？ 転び方覚えてもろて、そん次はリフトやな」ええええええつ、もう今日リフト乗つりやつの？

自分の顔が一気に引きつったのがわかつた。

昴さんが私の表情を見て大笑にする。

「雪奈、今日中に、リフト一回は乗ろな。大丈夫やつて。オレがついてるさかい。な？」

インフォメーション・センターから十メートルほど離れて、ほとんど平らな、人の少ない場所まで来ると、昴さんが立ち止まった。  
「いじなられえやろ」

昴さんが私に雪の上にお尻をついて座るよつに元げつ。

足を前に出すと、板の装着の仕方を教えてくれた。まずは固定される左足から。

かかととアキレス腱を板の金具に当てて、つま先と足首にベルトを巻いて固定する。

「じゃあ、一回立つてみよか」

昴さんが言い、私と向かい合つたまま数歩下がつた。

え、イキナリ？

どうやって立つのか、教えてくれないの？  
うーん……。

私はいろいろ考えた挙句、右足を板の手前に置き、手を後ろについてから両足の方へ体重を移動してしゃがみこむよつな格好をする。左足が、なんか変～。

それでもなんとが立ち上がつた。

「片足は立てるな。よし。ほな、次は両足固定してみよか」  
昴さんは容赦がない。

もう一度座り、さつきと回じよつに右足も固定した。

うわ、膝下が全然動かない……。なんかすつじく不安なんですか  
どつ！

さつきと回じよつに、昴さんが数歩先で私が立つのを待つている。  
やつぱり、立ち方は教えてくれないのね？  
さつきと回じよつにしたら立てるのかな？

まず、板の上にしゃがんで、両膝を……伸ばした。

「おお？」昴さんが目を丸くする。「雪奈、立てるやん！ 立てる  
よつになるまで、もつと時間かかると思つとつた」

ん？ もしかして、私って案外すごいの？

それにしても、ボーッと足が開きっぱなしになるんだ。  
よく考えてみたら、当たり前なんだけど……慣れないなあ。

「雪奈つて、もしかして運動神経ええの？」

昴さんが私の目の前まで来た。両手を肩に置かれる。

私は脚を板に固定されてるから動けない。うう、ちょっと近いですよ。

「多分、悪くはない、かな?」

「走るんは? 速いん?」

「高校生のとき、五十メートル走は七秒代でした」

「それってかなり速いんとちやうの?」

「んー……どう、なのかなあ?」

「そういえば、クラスの女の子の中では三番目だつた気がする。やれつて速いの?」

「人は見かけによらんもんやなあ」

「昂さん、昂さん。それつて絶対に褒めてませんよね?」

「そーか、そーか。そーやつたんや。それやつたら、今日中に木の葉くらい滑れるようになるんとちやうかな……」

「昂さんがずつとぶつぶつ眩いでいる。」

「コノハ? つて何? ? ? ?」

「よし、雪奈、予定変更や」

「え?」

「今からリフト乗るで。一日券買お」

「え? スキー テイ イングは? 転び方は?」

「一日券つて、今日いつたい何回リフト乗るつもりなんですかー? ! 「スキー テイ イングだけは、ちょっとはできなリフトに乗れへんさかい、今からリフト券売り場までの間でスキー テイ イング教えるわ。転び方は、自然と覚えるやろ」

「それで終わり? !」

狼狽する私を他所に、昂さんは私の足下にしゃがみこんで、右足のベルトを外した。

そして、あつという間に、昂さんも自分自身の板を片足だけ装着する。

「あ、昂さん、私と逆の足だ。」

「オレ、グーフィー やねん。あ、グーフィー つて言うんは、右足が

前の人な。雪奈はレギュラー。左足が前の人「  
そんな違いがあるんだ。

いまさら、筋斗雲ポーズの意味を知る。

「ほんなら、スケートティングな。雪奈はやつたことなぞうやけど、  
つまり、スケートボードに乗る感覚や。固定してへん方の足で地面  
蹴つて、体重を固定してる方の足　　軸足な、そっちに乗せる。こ  
んな感じ」

昴さんが、私の周りを回つて実演してくれた。

昴さんの滑りはとても綺麗だ。スイーツ音がしそう。

ある程度見せると、昴さんは板を両足で踏み締めずらし、ブレー  
キをかけた。

雪煙が舞う。

「ほなやつてみ?」

昴さんのフォームを思い出す。確か、こんな感じ?

右足で板の内側の地面を蹴り上げ、同時に左足に体重を乗せた。  
雪の上を板が少しだけ滑つて、すぐに寸詰まつてしまつ。右足  
を地面に付いた。

やっぱり、いきなりスイーツと行くのは無理かあ。

どうしたら、上手に滑れるのかなあ。

五分経過。

私、かなり必死です。

だって、全然滑らないんだものー！

転ばない代わりに滑りもしないって、ちょっと悲しい、かも。

昴さんが私の方に近づいてきて、頭に手を置いてぐりぐりと撫でた。

「雪奈、ちょっと力みすぎや。リラックス、リラックス」

リラックスって言つたつてつ！

私、初めてなのにーっ！

「雪の上やとな、前傾に力入れるとブレーキがかんねん。リラックスして、ちょうどええくらいに体重かけたら、前に進むさかい。さつきからずつと見とるけど、雪奈、全然こけへんし、焦らんでもすぐに上手あなるわ」

昴さんが、またスイーツと進む。

私もその後を追いかけて、地面を蹴った。

リラックス、リラックス。

あ、滑つた。

滑つたー！

昴さんが、そんな私を見てにっこりしている。  
なんかすごく嬉しい。

「雪奈、慣れてきたんやつたら、地面蹴つた後、右足も板の上に乗せられるか？」

昴さんが既に実演している。

私も。

お？ ちょっとびっくりする。けど、なんか、それっぽくできる？ かな？

しばらくそのまま滑つて、昴さんが止まった。

ん？ いつの間にか、人の多いところに来てる？

「よつしゃ。合格。ほな、リフト乗ろな」

気が付くと、そこはチケット売り場の前。

えつと……これは、もしかしてもしかします？

まだ、板を付けて、一時間も経つませんよ？

「あの、も、もお、ですか？」

「そ。もお。そんな顔せんでも、大丈夫やつて。リフトから降りるときは、オレが支えとくさかい。ちょお、ここで待つときや？ 動いたらあかんよ？」

昴さんがチケットを買いに行つてしまつた。

うわあああ。

心臓がばくばくしてます。

私、小心者なのにー。

私の心臓さん、この緊張に耐えられるかしら。

私つていつつもこいつ。

やる前に、緊張して、いろいろ無駄に悪いことばっかり考えて、一人で焦つちやつて、初めの一歩がなかなか踏み出せないの。

今日は、大丈夫だよね？

昴さんが一緒にいてくれるもの。きっと大丈夫。

大丈夫だよ、雪奈。

あ、昴さんが戻つて來た。

「雪奈？」

「は、ハイツ！」

「うひやー変な声出たーー!?

昂さんが笑い出す。

ノルマニ

「そんが、お腹まで抱えて笑ひとないし、ないつちは死にそうなくらい緊張してゐんだから！」

「あははは、はは、雪奈、緊張しちゃう！」

「だつて」

「まあ、初めてやもんな。緊張すなつちゅ一方が無理やうなあ」

卷之三

墨田は動く様子である。

落つこちたらどーするんですか？

仮に上手く乗れたとしても、どうやって降りるんですか？

すよ？

鳥さんかため息を一ぐ

「いや、ないなあ。雪奈ちゃんがうまいって泓の真っ前で立つよ。」

おまじない？ そんなんのがあるの？

昂さんが腰をかがめて、私と目線を合わせた。

すこく優しい笑顔、  
だけど

近いからー！

卷之三

手を伸ばさなくとも、触れてしまえをこの距離で、  
私、完全に硬直。

昂さんの手が、私の顔に伸びてきた。その手はグローブをしていない。

昴さんの指が、私の額に触れた。柔らかく。

息を呑む。

そのままスッと横にスライドしていく指が、私の額にかかつていた髪を、耳にかけた。

そして、指先は額の輪郭に沿って流れて行き、顎の先で止まる。その指に、少しだけ、力が入った。私の顎が、少しだけ、上がる。昴さんの笑顔が、すくなく色っぽく見えた。

昴さんの指が、名残惜しそうに、ゆっくりと離れる。

昴さんの身体も、ゆっくりと離れていく。

同時に、私の身体が一気に脱力した。

「ホラ、な？ 緊張、解けたやろ？」

昴さんがニヤリと笑つた。

もしかして、す、昴さんの言つてたおまじないって……。今の、ですか？

その場にへたり込みそうになつた私を、昴さんが、おつとと持ち上げた。

「雪奈、大丈夫か？」

「な、なんとか……」

なんだか、どつと疲れが……。

し、死ぬかと思つた……！

なんか、体力使い果たしちやつた感じ。

「雪奈つて、ホンマに初心なんやなあ」

昴さん。その言い方つて、絶対に褒めてないですよね？ どうせ私には、彼氏いたことなんてないですよ。

それどころか、同年代の男の人とも、ほとんどまともに話したこ

とすらないですよ。

昴さんが、初めてなんですもん。

だから私、昴さんの側にいると、どうしていいかわからなくって  
ドキドキしつぱなしなんです。

「冗談のつもりやつたんやけど、雪奈には刺激が強すぎたんやろか。  
ま、カワエイから許したる。さ、行こか。今やつたらちようど、リ  
フト空いてるみたいやし」

何を許してもらつたのかサッパリわからないまま、私はリフト乗  
り場の列に並ばれてしまつた。

「リフトに乗るときは、焦らんと、椅子を待つんや。椅子の方から膝の裏にぶつかってくるとかい、そしたら座ればええ。雪奈が上手く乗つたら、オレも座るな」

リフトはいよいよ私たちの番。

私が右で、昴さんが左。

私は身体を半回転させて、大きな滑車に沿つてこちらに向かってくる椅子を待つた。

昴さんの言ったとおり、膝の裏に当たる。それを感じてから、腰を下ろした。

乗れたー。

隣で、昴さんも座る。弾みでリフトが軽くバウンドした。リフトに運ばれ、足が宙に浮いていく。同時に、左足が板の重さで下に引っ張られる。

うう、重い……かも。

「落ちたらあかんし、セーフティ・バー降ろすな」

昴さんが、上からセーフティ・バーと呼ばれた金属の棒を降ろした。

あ、これで落っこちないようにするのか。

それにも関わらず、リフトに乗ると板の重さを感じる。やつさまで全然そんなこと思わなかつたのに。

「雪奈？」 こうしたら、楽やで

昴さんが自分の足下を指差した。足を持ち上げて、私が身を乗り出さなくても見えるようにしてくれている。

昴さんは、右足に固定された板の半分を、左足の足首に乗せていた。

ああすると楽なの？ 私もやつてみよう。

「よいしょっ」

板が重くて、声が出てしまった。

左足にぶら下がっていた板を、右足に乗せる。あ。確かに、楽になつた。重さが分散されたのかあ。

リフトは、地面よりも随分高いところを通りでていた。下を滑走する人たちが小さく見える。

今は、スキーヤーさんもボーダーさんもたくさんいるんだ。

あ、あの人転んだ。うわあ痛そり……。

あっちの人は、上手だなあ。雪の上に波線を描いてるみたい。

あれ？ あそこにあるのって、オリンピックとかでやつてる『ハーフパイプ』っていうやつだよね？

その隣は、ジャンプ台？！

ふわああつ、跳んだ！ すじおい……。

「ん？ 雪奈、ああいうんに興味あるんか？」

昴さん、私の見ているものに気づいたみたい。

「興味、つて言つか、みんなすごいなあつて思つて。怖くないのかなあ」

「そやなあ。初めは誰でも怖いんとちやうの？ でも、途中でいつべんでも『怖い』つて思つてしまふから失敗するさかい、思い切らなかん。あ、ホラ、落ちた。うわー背中から真っ逆さまや。かわいそ。めっちゃ痛そうな落ち方しほつたなあ。……でもな、不思議なもんで、技が一回決まると、病み付きになんねんなあ」

昴さんも、あんなこと、やるのかな？

きっと、技が成功したら、気持ちいいんだろうなあ……。

「あ、雪奈、もうすぐ頂上に着くで。バー、上げるな

また、緊張してきました……。

胸の辺りをぎゅっと掴む。

あー地面が近づいてきたよ。

ふんわりと、腰に何かが当たる。

六

す、異さん？！

「オレが雪奈を支えてるやかい、雪奈は何も考えんど、右足を板の上に乗せてスケーティングな。転びやうやつて思つたらオレにしがみついてき? な?」

おのづれと云ふではないか

私の右腰に昂さんの右腕が回っていて、左肩には左手が当たられて、  
ぎゅう…て、ぎゅうてされてるー

「これで、どう考へても、抱き寄せられてるよね？」  
「そんな風にされたら、私、身体起立してられないじゃないですか」

自然と、しがみつくしかないじやないですかー！！

ナガノ取扱一覧

「雪奈、板立てて」

板の裏が雪に覆われた地面に当たる。  
うつあああ！

もお着いちゃつたの？

待つて!! 未だ、心の準備が足りない

日文 千葉市立図書館

そして、思い切って立ち上がった。

ヒヤアア…………。 鳴さんのウエアのしゃりしゃりした感覚が頬に伝わってくる。

顔はふねりとした涼しい風を感じ止まつた  
目を開ける。

無事だ。つてゆーか、私つてば、いつの間にか昂さんのジャケツト、しつかり掴んでるし。

ジャケットをそつと放すと、昴さんが私を立たせてくれた。

「な？ 別にリフトつてゆうても、たいしたことなかつたやう？」

「イイエ。そんなことは、ナイです。

リフトじやなくて、別のことにして意識を奪われてたのは確かだけど、  
ひとつも、たいしたコト、あります。

「ま、次乗るときには、今よりもむしと上手く乗れるはずやし、あ  
んまり気にせんとき」

そう言ひながら、昴さんは私の頭にぽんぽんと手を置いた。

「ん？ どしたん？」

「昴さん、よく私の頭、叩きますよね？」

なんか、小さい子を相手にしてるみたいな仕草。

昴さんの手、安心するんだけど……私つて、そんなに子供っぽい

？ 昴さん、私と同じ年だつて言つてたよね？

「あー……そう言えれば、そーかもしけんna」昴さんはまた私の頭  
をぽんぽんつてする。「ちようじええねん。高さが。なんか、雪奈  
見とると、やりたなんねん」

そんな理由？！

「嫌なんやつたら、やめるで？」

「そういうわけじや、ないんですか？」

ただ。ただね。そうされる度に、なんか、なんだか、ちょっと、  
切なくなるの。

「ならええやん。急にそんなこと言ひださかい、嫌なんかと思た」  
昴さんが私の背中を押す。「さ、滑ろおな。まずは板、履かなな」

昴さんが隅に寄つてしまがむ。そして、自分の隣の雪の上をぽふ  
ぽふと叩いた。

「雪奈も、早お。ここ座りいや」

「はっ、ハイ！」

あーもお。もしかして、私、昴さんに振り回されっぱなし？



結局、板を履いたのは私だけ。昴さんは両足を固定した私の手を取りつて、スケーティングで引っ張り始めた。

「あの、どこへ？」

「こっちに、ええ「コースあんねん。雪奈でも滑れるトコや。心配あらへん」

どつちにしろ、未だ一人じゃ滑れない私は連れて行つてもう少しかない。大人しく、されるがままにしていた。

んだけど。

「さ、着いたで」

そう言つて昴さんが止まつた。コースの入口、下り坂に入るか入らないかって言つところ。

上半身を左右に捻つて準備運動する昴さんの向こうに、私は『中級向け』という立て札があるのを見つけてしまつた。

ええっ！？

「あの、ここ、中級者向けつて……」

「ん？ ああ」私の視線の先にある立札に、昴さんも気がついた。「あんなん気にしどつたらあかん」

気にします！

昴さんつてばスバルタ教育過ぎ！ いきなり中級者向けのコースつてどうなの！？

すつごく不安そうな顔をした私を見て、昴さんは苦笑した。

「ホンマやつて。このコースはずつとなだらかなんや。中級者向け書いてあるんは、途中に休憩できるポイントが全然ないつてだけやねん。下手に初級者コース行くとな、あっちにある人らみんな初心者やから、ぶつかりそうになつてもお互に避けられるほど上

手がないし、返つて危ないねん」

そうは言つてくれるけど、すうじぐ、不安。

「まあ、ちょっとずつ滑る、な？ 初めは立つて斜面をズルズル降りるだけやさかい。ゆ一つくり行こ。オレも板履くし、雪奈、ちょお座つててんか」

昴さんはそう言つと、私の手を取つたまま私を座らせた。そして、その隣に自分も座ると、手早く左足をボードに固定する。

あつという間に終わらせるといよいと立ち上がった。

「雪奈も立てるか？」

えつと、どうだり……。平らなところとは違つから、ちょっと

難しい、かも。

両足に力を入れようとすると、案の定、板がずるりと滑つた。どうやつたら上手く立てるの？

周りをちょっと見回す。少し離れたところに、同じようにな立ち上がりをしてる人がいた。そつとその人を観察する。

あ、動きとしては、平らなところで立つの一緒だ。でも、あの、板が全然動かない。どうやってるのかなあ？

また別の人を観察してみる。その人も、難なくヒョイと立つと、颯爽と滑り去つて行つた。

あ、そうか。ボードは斜面の下に向かつて滑るんだ。だから、斜面に對して垂直に板を置けば……

私はボードで何度か足下を削り、雪の堰を作るとその上に斜面と垂直になるように板を置いた。後は、平らな所と同じ要領で……。

「よつ……と」

よつやぐ、斜面に立ちあがつた。

正面を見ると、いつの間に移動したのか、昴さんがいた。すうじぐ驚いた顔をして。その右手が僅かに私の方へ向かつて上がつていてもしかして、引っ張り上げようとしてくれてた……？

「あ、あの、ごめんなさい」

なんだか申し訳なくなつて、とりあえず謝る。昴さんはハツと表

情を変えて、笑い出した。

「なんやの、雪奈。すごいやん。何も教えどらんのに、イキナリ斜面で立ちよるとは思わへんかったわ。オレ要らんやん」

「そ、そんな」とないです」

「そおか?」

昴さんが悪戯っぽく聞いてくる。私は一生懸命頷いた。だつて、これからどうしたらいいのか、さっぱりわかんないですもん。もし今置いて行かれたりしたら、私ホントに、泣いちゃう。

でも、昴さんはやっぱり笑って。

「なんかオレ、すげい楽しなってきたわ。雪奈、今日一田でどれくらい滑れるよ」になるんやひが」

昴さんはそう言つと、勢いよく身体を捩つて反転した。私と同じ方向 斜面の下の方が正面になるよつに立つ。そして、私を振り返つた。

「雪奈、オレが今から滑るとおんなじよつにして、つこて来てんか」

「は、はい」

私が頷くと、昴さんはにっこり笑つた。

昴さんが前を向く。そしてそのままずりずりと斜面を降り始めた。板を斜面に垂直にしたまま、ずるずるとずつ落ちて行くような感じ。スピードも全然出でない。

あれなら、私にもできやう。

私はきゅっと唇を一文字にして決心を固めると、昴さんの後を追つて、斜面をずり落ち始めた。

数メートル先で、昴さんが止まつている。いつの間にかまた反転して、身体」と私の方へ向いている。

「そおそお。上手いやん」

昴さんまでもう少し。あとちょっとで手が届きそつ。

と思つたら、昴さんは私の方を向いたまま、後ろの方へとむり

斜面をずり落ち始めた。

ええーっ！？ 鳴さん、するい！

離れて行つた鳴さんは、私とある程度の距離を取ると手を振つた。

私の負けん気が働く。

私はその後を追つた。

ずずすす……ずずすす……ずず……

「う、なんだかカツコ悪いなあ。

もうちょっと、カツコよく滑れるようになるといいんだけど。

私の後ろから、たくさんの人たちが滑り降りて来ては追い抜いて行く。でもみんなすつじく上手くて、私を綺麗に避けてくれた。

鳴さんが言つてたのって、このことだつたんだ。

しばらくずり落ちていると、だんだんコツがつかめて來た。余分な力が抜けてくる。

あ、そうか。膝を使えばいいんだ。膝を屈伸するとスピードが変わる。重心を落とすと安定するみたい。左右の脚にかける体重のバランスを変えると、ちょっとずつだけど体重をかけた方に移動しながらずり落ちていぐ。

うんうん、なるほどなるほど。

鳴さんは、十メートルほど下のコースの隅の方で立つてゐる。私は鳴さんのいる方へと体重を左右の足にかけながら滑り降りて行つた。

よつやく、鳴さんに追いついた。鳴さんは何故かすつじく嬉しそうな顔をしてゐる。

「雪奈、よおがんばつたな。ほんなら、次は逆やつてみよか」

私は鳴さんに言われるまま、その場にしゃがむと雪の上を横に転がるようにして身体を反転させた。

そのまま立ち上がりつとしたら、ボードが雪に取られた。身体ががくんと落ちる。

「きや……

「あかん！」

「わわわあああっ！」

閉じていた目を開けると、田の前にあったのは、一面の白。私は斜面にうつ伏せになつて倒れていた。

冷たい……。でも、思ったよりも痛くなかった。雪、だからかな。私は起き上がろうとして、頭の方に投げ出していた腕を動かそうとした。そこで、腕に妙な抵抗があるのに気づいた。見ると、私の腕を昴さんが掴んでいた。雪の上に座り込むよつとして。

昴さんのボードの下には、大きな雪の堰ができる。相当力を入れてブレーキをかけてくれたみたい。

「あ、あの、ごめんなさい……」

私が言うと、昴さんは上体を起こして私を覗き込んだ。そのまま私の両腕を取つて引つ張り、斜面に座らせる。

昴さんは私のウェアについた雪を手で払いながら聞いてきた。

「雪奈、大丈夫か？」

「平気です」

「怪我は？ してへんか？」

「大丈夫です」

昴さんはホッとしたように大きくため息をついた。  
「よかつたあ。ホンマ、心臓止まるかと思つた……」

古人は偉大だ。

油断大敵。本当にその通り。

ちょっと斜面を進めるようになつて油断してたから、盛大に転んじやつたんだろうなあ。

反省しなきやね、雪奈。

昂さんにも、ものすこく心配されちゃつたし。今でさえ迷惑かけっぱなしなのに、これ以上迷惑かけたら、嫌われちゃうよ。

私はボードに右足を固定すると立ち上がった。

昂さんはとっくにボードを履き終えていて、数メートル程下まで滑つて私が追いかけて行くのを待つている。

今は、今日三回目のリフトを降りたところだ。  
さつき結構派手に転んだことで、逆に転ぶことへの恐怖心がなくなつた、かな。何事も、失敗しないと見えないと改めて身を以つて理解した気がする。

リフトは相変わらず怖くつて、未だ昂さんの助けがないと上手く降りられないんだけど。でも、別の意味でドキドキするから、本当に、早く慣れなきやつて思つ。

「雪奈ー、はよお！」

昂さんが両手をメガホンみたいにして私に向かつて叫んだ。

「今行きますー！」

私は手を振つてそれに応えて、左足を前にし、斜面に対してもボードが斜めになるようにすると、左足に体重をかけた。

重力に従つて、ボードがスイーっと斜面をほとんど真横に滑る。まずは左方向へ。

そのまま勢いを失つて止まりかけたとき、今度は右足に体重をかける。斜面の方を向いたまま、今度は右横の方へとボードが滑り始めた。ある程度行つてまた止まりかけたら、今度はまた左足…。

ボードのエッジの描く軌跡が、左右にギザギザとした線になる。これが昴さんが言つていた『コノハ』って言つ滑り方らしい。木の葉が左右に揺れながらひらひら落ちる感じに似てるから、この名前なんだって。

さつきのすりすり斜面を滑り落ちて行くのよりもずっと、スノーボードをしてるって気持ちになれる。

すりすり斜面を滑り落ちると同じく、この滑り方にも表と裏があつて、それが上手く滑れるようになつたらよしやく、左右のタン。そこまでできるようになつたら、普通のスノーボーダーが滑つての波々した軌跡のスラロームつて滑り方ができるようになるんだつて。

私はよつやく、コノハの表ができるようになったといふ。

昴さんが待つていてくれたところに追いつくと、昴さんはこつこ

り笑つて、私の頭をぽふぽふと叩いた。

「雪奈、ホンマに上達早いな。教えがいあるわー」

「そう、ですか？」

結構体力消耗してるなあ。普段、運動なんてほとんどしないから。身体動かすのなんて、通学のときの自転車くらいだもの。きっと明日は筋肉痛だろうなあ。

「そおやつて。ホレ、あつち見てみ？」

私は昴さんの指さした方向を見た。

ちょっとした谷を隔てて五十メートル程離れたところに、初心者向けらしきコースが見える。そこにはボードを付けたまま上手に立てずすぐに転んでる人や子供たちが大勢いた。

「な？」

確かに、すぐに立てるようになつたし、の人たちよりは上手、

かも。

でも、それはきっと、私の上達が早いからじゃなくて。

「先生がいいからですよ、きっと」

「ああ確かに、それもあるやうな」

「ああ、『あ』」  
昂さんが納得したように腕を組んでうつむいたと頷く。私は堪え切れなくなつてクスクスと笑つてしまつた。

「なんやの、雪奈が言い出したんやん」

「そうですけど……昂さんってば、すこしく納得するかい」

「ええねん。褒められたときは素直に受け取つとけば。

せやけど、ホンマに雪奈、オレの予想以上や。まさか今日、お昼食べる前にコノハが滑れるようになるとは思わへんかった

「でも、まだ表だけですし」

「大丈夫、雪奈やつたら、すぐに裏もできるようになるわ。表コノハかて、さつき始めたばっかりやのに、もう滑れるんやから。

じゃあ、今から裏コノハで下まで降りて、もう一回リフト乗つたら、頂上でメシ喰お。もおー時や。腹減つたわー」

「えつ？！」

昂さんに言われて初めて、まだお皿いはんすら食べていないこと  
に気がついた。

「私、そんなに熱中してやつてたの？！」

「あ、ごめんなさい……」

「え？ なんで雪奈が謝るん？」

「時間、全然気付かなくつて」

「時間わからんようなるべりー一生懸命やつてたつてことやね？

オレも嬉しいわ。面白いやろ、ボーッ」

「うん、面白い。」

私は頷いた。昂さんが満足そうににっこりと微笑んだ。

「ほな、行こか。今度は雪奈が先な。後から追いかけるとかい、好きなトコまで行つて止まつといへんか。一気に下まで降りれるんやつたらそれでもええし」

いや、それは無理です。だってまだ、コースの半分も滑つてないもの。

私は裏コノハに切り替えるため、一度雪の上に座つて身体を反転させると立ち上がった。

「じゃあ、先に行きますね」

そう言つて私は裏コノハで滑り始めた。

右……左……右……左……

単調だけど、すべく楽しい。冷たいはずの風も、全然そう思わない。

滑つっている内に、コノハのコツもつかめて来た。

まず、進行方向を向ぐ。目線が落ちないように、遠くを見る。裏コノハの場合は足首と膝をちゃんと使って、エッジを立てる。

初めはほとんど真横に進んでは切り返していくけど、だんだんと角度をつけて斜面を下れるようにもなつて来た、かな。未だスピードが出過ぎると怖いけど。

しばらくそのまま滑つて、コースが大きくカーブする少し手前で私は止まつた。斜面の方を向いたまま、膝を雪に着く。

昴さん、どこかなあ？

斜面上を見上げて、昴さんを探す。でも、みんなスノーウェアを着て、帽子を被つて、しかもゴーグルしてるから、誰が誰かわからなくな。

昴さんのウエアってどんなのだっけ？ えっと、確か、グレーと赤だったよね。

あ、あれかな？

コースの中央を滑り降りてくる、スノーボーダー。ウェアの色が、昴さんと同じ。すごく綺麗なフォームで、コースのこぶの間を細かいターンで抜けながら滑り降りて来る。

そのボーダーさんがエッジを立てるたびに、粉雪が舞う……。

ボードがこぶに乗り上げた。今までの勢いで身体が宙に浮く。そ

え？

の人はそのまま空中でしゃがむように膝を抱え、また雪に着地する前に膝を伸ばす。そのまま大きく急ターンして私の方へと進行方向を曲げると、真っ直ぐ進んできた。

あのボーダーさん、やつぱり、昴さんだ。すぐ、上手い。本当はあんなに滑れるのに、きっと滑りたいんだろうに、今日は私に付き合つて我慢してくれてるんだ……。

昴さんは私の目の前まで来ると身体を捻り、ブレーキをかけた。

“わわわああつ……”

大きく雪が舞い、私の身体にかかる。

私は首を振つて顔や髪に着いた雪を払い落すと、大笑いしている昴さんを見上げた。

「あははは、すまん」

「もお！ 悪戯しないでくださいよつー」

「あ、雪奈。どお？ 元気でやつてる？」

「うん、元気だよ」

夜、典子ちゃんからケータイに電話がかかってきた。  
夕食の後片付けも終えて、お風呂にも入って、歯も磨いて、ちよ  
つとみんなで雑談して、後は寝るだけ。ボードで疲れた身体を布団  
に横たえた状態で話す。

「そ？ 泣いてない？ バイト先の方々に迷惑かけてない？」  
「だあいじょうぶだつてば」

私は苦笑しつつ答えた。

典子ちゃんは、ときどきお母さんみたいだ。どんなときでも、何  
をやるにも、いつも一番最後になる私を忘れずに待っていてくれ  
る。今日の電話も、きっと私のことを心配してかけてきてくれる  
んだ。

「そつちは寒いでしょ？」

「うん。でも、雪がすごく綺麗なの」

「へえ……いいなあ。私も今度、彼氏にボード連れて行つてもらお  
うつと」

「あ、そうだ。あのね、私も今日、ボードやってみたよ」

私がそう言つと、典子ちゃんはすく大きめの驚きの声を上げた。  
耳がキーンつてなる。

「ウツソ、雪奈が？！ できたの？」

「うん…まあまあ、かな。コノハつて言つのができぬよつこなつた  
「本当？」 すゞこじちゃん

「でもたくさん転んで、アオアザいつぱー」

お風呂に入つたとき、鏡見て驚いたもん。膝とか、腕とか、アオ

アザつて言つよりなんかグロテスクな紫色になつてた。

「それでもすゞいよ。雪奈のことだから、ボード履いて立つのがやつとかと思つたのに」

「先生が、よかつたから……かな」

昂さんが、丁寧に教えてくれたから。だからきっと、今日が初めてのボードだったのに、一日でコノハまで滑れるよつになつたんだと思つ。

「先生？」

訝しげな典子ちゃんの声が聞こえた。

「うん。えつと、ベンションのオーナーさんの甥っ子さん。同じ歳なの」

「ふーん……」

典子ちゃんはそう言つたけど、なんか、納得してないみたい。別に嘘は言つてないんだけどな。

なんだかケータイの電波を通して私のことを探られてるような気がして、なんだかすゞく恥ずかしくなつてくれる。

典子ちゃんお願ひ、何か話して。

私の願いが届いたのか、典子ちゃんの声が聞こえてきた。

「雪奈、あのね……」

「ん？ 何？」

「……いいや、やつぱぱやめとく」

「やうなの？」

「うん。あ、もうこんな時間じゃない。明日の朝、早いんでしう？」

？ そろそろ切るね

典子ちゃんに言われて時計を見たら、いつの間にかビックリする時間になつてた。今からすぐ寝ても、六時間くらいしか眠れないなあ。疲れてるから、八時間くらい眠りたいけど。

「うん。典子ちゃん、電話ありがとう」

「また電話するよ。じゃあね、おやすみ」

「おやすみ」

ケータイを閉じて枕元に置くと、私は目を閉じた。

\* \* \*

ケータイにセットしていた目覚ましアラームが鳴り始めた。

私はそれを止めようと腕を伸ばした。その途端、痺れるような違和感が腕を走る。

「う、痛い……。

我慢して、とりあえずアラームを止めた。

一の腕を擦りながら寝返りをうとうとしたら、身体中が筋肉痛になつてているのがわかつた。脚も腹筋も痛い。

やつぱりなつちゃつた、筋肉痛……。なるよね、そりゃ。普段全然運動しないんだもん。でも、一日で来たんだからヨシとしておこう。

ぎしそきし言う身体を叱咤して、私はなんとか布団から這い出した。屋内は暖房施設が完備されてるから、部屋の中はむしろ大学の下宿先よりも暖かい。

頭がぼーっとする。私、低血圧だから、朝、弱いんだよね。

眠い目を擦り擦り顔を上げると、側に置いている姿見に、大きめの薄い桃色のパジャマを着た自分が映つていて見えた。寝起きつていうのもあって、なんだかすこく情けない感じだ。

あ、寝癖が出てる……。

さすがにそんな状態でみんなの前に顔を出すわけに行かないから、私はとりあえず、顔を洗いに洗面所に行くことにした。ついでに、寝癖も直そう。

「よつと」

立ち上がり、部屋のドアに手を掛ける。

欠伸しながら外に出ると、ちょうどタイミングよく、隣の部屋の

「ドアも開いた。

出てきた昴さんと田が合ひ。私は慌てて欠伸の口を閉じた。見られちゃった、かも。

「ああ、雪奈。おはようさん

昴さんが言つた。

「お、おはよりござります……」

私が俯き加減で言つと、昴さんはくすりと笑つた。

「昨日がんばつたし、未だ身体が疲れとるんやな。欠伸も出るはずや」

「ああ、やっぱり、見られちやつてたんだ。恥ずかしいなあ。昴さんの方、向けないよ。

待つてたら、先に行つてくれるかな。

私は俯いて昴さんのつま先を見つつそのままちよつと待つてみたけど、昴さんは全然動かない。不思議に思つて様子を見ようとしたとき、昴さんの手が私の頭にぽんと乗つた。今度はそのせいで、前を向けなくなる。

「あの、昴さん……？」

ちよつと困つて私が声をかけると、昴さんが言つた。

「雪奈、その格好のまんま、あんま部屋の外に出えへん方がええよ」頭の上から、昴さんの手が離れた。重さがなくなつて、よつやく前を向けるようになる。

昴さんを見ると、悪戯っぽく笑つていた。

「ま、オレとしては、パジャマ姿の色っぽいねーちゃんやつたら、いつでも何人でも大歓迎やけどな」

そう言われて初めて、自分の状態を意識する。

私、パジャマ一枚だ。パーカーも着てない。それに、寝起きだし、寝癖も立つてゐるし。

嘘  
つ！？

は、恥ずかしすぎる……つ。

「あはははは、雪奈、また顔が、真つ赤つ赤あや。そのまんまやと

冷えるさかい、風邪引かんようにしそや

鼎さんはそのまま、手をひらひらと振つて廊下の向いへと歩いて行く。

私は、その後姿を複雑な思いで眺めていた。

今日から、ペンションのお仕事が一気に忙しくなる。今日はチェックアウトのお客様が一組、入れ替わりで新しいお客様が一組六名いらっしゃる。そして、明後日からは予約で満室だ。

私は身支度を終えると、厨房へ向かった。お客様への朝ごはんを作るマスターと浩美さんのお手伝いをするためだ。野菜を切つたり、卵を焼いたり、食器を並べたり。

いつもはすぐ楽しい作業だけど、今日は腕と脚が痛くって何かと苦労する。

それでも、そんなこと微塵も顔に出さないよつて気を付けなきゃね。身体が痛いのは自分の運動不足のせいだもん。しかめつ面のスタッフじゃあ、お客様だけじゃなくて、マスターや浩美さんにまで嫌な思いさせちゃう。

笑顔でいるつて、バイトする前に誓約も立てたし。

お客様の朝ご飯が終わつて、後片付けをして、そうしたらようやく私と昴さんの朝ご飯。

マスターと浩美さんはいつも、お客様の食事を準備する前に食べ終えているから、一人つきりで隣同士に座つての食事だ。

でも、気まずさとかは全くなくて、たいていは昴さんがずっと話してくれてる。

「そう言えば、雪奈、身体は痛つないか？」

「痛いです……」

私は苦笑しつつ答えた。なんだか、朝起きたばかりのときよりも、今の方が痛みが大きくなつてゐる気がする。氣のせいであつて欲しいなあ。

「今日の仕事、あんまり無理したらアカンよ。重いもん持つときは、必ずオレ呼びや」

「ありがとう」ゼこます」

それにしても、昂さんってすげくよく食べる。私の二倍くらい食べてる。だから体力あるのかなあ。

そうじゃなきや、あんな上手に滑れないよね。

私の視線に気づいたのか、昂さんはパンを銜えたまま「ん？」と、いう視線を投げかけて来た。

「雪奈、どしたん？」

「あ、えっと。あの、よく食べるなって思って」

「そおか？ こんなくらい普通やわ。雪奈が食わなさ過ぎやねん。せやから、そんな細つこいんや」

そう言って、昂さんはおもむろに私の腕を取った。もちろん、私は昂さんの方へ引っ張られることになる。

「ほれ、やつぱり細すぎ。骨と皮しかないみたいやん」

私の肘の下あたりをガツチリと掴んだまま、昂さんは私を覗き見た。私の身体が知らず強張る。

あつあの、近いです、顔……。

もうちょっとと距離がないと、なんかドキドキして、だめなんです。でも昂さんは離してくれなくて。私は、ちょっと困った顔で、無言のまま、昂さんを見つめ返した。

「ま、そう言つても、いきなりは食われへんもんなんやろなあ」  
昂さんが、ふう、とため息をつき、腕を放した。そして、上に大きく伸びをする。

「あー食つた食つた。ほな、オレ仕事行くわ。さつき、大介兄ちゃんが外で何かやっててん。それ手伝つてくるわ。雪奈は浩美さんの方お願ひな」

昂さんは椅子から立ち上がりると、食器を流し台に置き、ダイニングを出て行った。

私は、自分と昂さんの朝食分の食器を洗つてから、浩美さんを探

しにお洗濯の部屋へと向かう。この時間はいつもそこにいるはず。浩美さんを手伝いつつ、出掛けられたりチェックアウトされたりしたお客様の客室に行き、空気を入れ替え、掃除し、シーツを取り替える。これがなかなか重労働。満身創痍の今の身体には少し堪えた。

それが終わったら、共用スペースのお掃除。ラウンジとか、エンタランスとか。

マスターはこのペンションはあまり大きくないよって言ってたけど、私にとっては十分過ぎるくらいに大きい。

ラウンジの鐘時計が鳴った。

いつの間にか十一時。もうちょっとで、午前中のお仕事が終わる。あとは玄関の掃き掃除だけ。

私は簞を取り、玄関に降りた。

そのとき、ペンションの扉が開いた。外から見たことのない一人の男性が入つて来る。誰、かな。

「すみません、今日からここに予約している河合と申しますが……」先に入つて来た男の人私がに向かつて言った。

育ちのよさそうな、物腰の柔らかい人だ。未だ若しうだけ、すごく落ち着いてて、大人の男の人つて雰囲気がする。優しそうな笑顔が、安心させてくれた。

その後ろにいるのは、河合と名乗った人よりも背の高い男の人。ペンションの中を物珍しそうに見回している。ちょっとワイルドな感じで、昂さんとは質の違うヤンチャさを感じた。恵美ちゃんや朋子ちゃんがいたら、さぞうるさくはしゃぐんだろうなあ。

「河合様、ですか？」

私はそう答えながら、昨夜確認しておいた宿泊予定者の名前を思い出す。

確かに、今日から三泊四日で宿泊することになつて、いる四名様の、

代表者さんのお名前が『河合』だった。きっとこの方がその、『河合』さんなんだ。

「ようこそおいでくださいました」

私はそう言って礼をする。

河合さんは会釈を返してくれた後、私に尋ねてきた。

「チェックインは十五時以降でしたよね？ すみませんが、荷物だけ預かっていただけませんか？ それと、できれば着替えもしたいんですが」

えつと、荷物を預かるのはできるけど、着替えとなると……私が勝手に決められないことなんだけどな。

「うーん、どうしよう？」

「雪奈ちゃん、どこだい？」

ちょうどタイミングよく、廊下の奥の方からマスターの声が聞こえてきた。

私は窺うよじにして、河合さんともう一人の男の人の方を見た。二人とも、目が「どうぞ」って言ってくれてる。それを確認すると、私はマスターの声がした方に向かって声をかけた。

「あっ、あのっ、マスター！ 私、ここです」

「なんだ、そっちか」

マスターがそう言いながら、パタパタと玄関の方へ歩んできて、私の目の前に立つ一人に目を止めた。

「おや、お客様？」

「あの、マスター。今日から宿泊される」予定の河合様です。お荷物預かりと着替えをされたいっていうことなんんですけど」

私が言つと、河合さんはマスターに向かってにこやかに軽く頭を下げた。

マスターが私の隣まで来て、小声で尋ねて來た。

「雪奈ちゃん、今日からのお客様のお部屋つてもう準備終わってたよね？」

「ええ」

「じゃあ、もうチェックインしてもらつていよい。僕は荷物持ちに  
昴を連れて来るから」

マスターはそう言つと、一人の方を向き直つた。

「ようこそおいでくださいました。もうお部屋を用意できますの  
で、どうぞチェックインなさつてください。お着替えもお部屋でど  
うぞ。チェックインの手続きは、この子が行いますので」

マスターに言われて私は急いでカウンターに入った。宿泊者の管  
理帳簿を出す。

河合さんがカウンター越しに寄つて来た。

「どうもありがとう」

笑顔でそう言った河合さんに、私の心臓が、とくん、と鳴つた。

私はマスターが昴さんを呼びに行つている間に、河合さんにチエックイン用の書類を書いていただくことにした。

河合さんにボールペンを手渡しながら書類を見せ、どこに何を記入して欲しいかを簡単に説明する。そんな私たちを見て、もう一人の男の人が外に出で行つた。

「あ、あの……」

私が引きとめようとしたら、河合さんが顔を上げた。ふんわりと笑う。

「浅倉なら、放つておいて大丈夫だよ。きっと、車で待つてゐる一人を呼びに行つただけだから」

すぐ目の前で、本当に優しそうな笑顔を見せる河合さんに、私は思わず見惚れた。

「って、私、何考えてるの？！ 今、仕事中なのに。

「ここに、全員の名前を書けばいいんだね？」

河合さんはそう言って、明らかに変なはずの私を気にする様子もなく、書類を記入し書き始めた。

……こんな笑顔の男の人、初めて、かも。マスターとも、昴さんとも違う。もちろん、二人ともどつても優しい人なんだけど。大人の余裕つて言うのかな？ あ、でもマスターも大人の男の人だよね。

「へー、ここ？」

「かわいー」

女性の声と共に、またペンションの扉が開いた。

「お前ら、そんなトコで止まんな。さみい。早く入れつて」

入つて来たのは、髪が長くて背の高い女の人と、可愛らしい女人。それと、さつき河合さんが『浅倉』って呼んだ男の人。その両

手には荷物を持っている。

「何よ、浅倉。随分眠そうね」

背の高い女の人が、浅倉さんに声をかけた。

「つるせーな。誰かさんがすぐ隣でグーグー鼾捶いてたせいで、うるさくて眠れなかつたんだよ」

「嘘? !」

「もー、浅倉君つてば。冗談でも女の子にそんなこと言つちやダメよー。香蓮、大丈夫。鼾なんて捶いてないから」

河合さんの後ろでは楽しげな会話が繰り広げられている。

さり気なく河合さんの記入する書類を覗き見ると、想像通りの綺麗な字が並んでいた。既に宿泊する四名全員分の氏名は既に書き終えて、今は住所を書いている。

私は書かれている名前とわづきの会話を頼りに、誰が誰なのかを当て嵌めてみた。

書類を書いてくださつているのが河合正紀さん、眠そうだと言われていたのが浅倉大地さん、そして、背の高い女性が永野香蓮さん、可愛らしい方は武田真由子さんつていう名前らしい。

随分仲良さそうだな……。社会人っぽいけど、どんな関係の人たちなんだろう? もしかしたら、ダブルデート、かも。

「雪奈、お客さん来たんやつて?」

河合さんがチョックインの手続きを終える頃、昴さんの声が近づいてきた。

「あ、はい。お部屋にご案内してくれつてマスターが……」

昴さんに答えつつ振り返る。昴さんはお客様方に会釈して言った。

「荷物はオレが運びますさかいそこに置いといってくれてええんで、先に、この子に部屋まで案内してもらひてください」

「そんじや頼もうかな。でも、全部は大変だろ。オレと正紀は自分で運ぶからいいや。こいつらの分だけ頼むわ」

浅倉さんがそう言いながら、永野さんと武田さんの方を示した。

「そうですか？ほな、女性の分だけですね？」

昂さんが永野さんと武田さんの側に行く。

「これでいいかな？」

田の前で声がした。河合さんが、ボールペンと書類を私の方にすつと差し出してくれている。その笑顔がなんか素敵で、私は河合さんが書類を書き終えたんだって気付くのに、数秒かかってしまった。いけない。私、また、ぼおっとしてた。

「あ、ありがとうございます」

私はそれを受け取り、カウンターの影にあるキーボックスから部屋の鍵を二つ取り出す。

顔を上げると、浅倉さんと河合さん、それと昂さんが、荷物からボードやブーツをより分けてホールの隅の方に固めて置いていた。

「じゃあ、お部屋はこちらですの」

私がそう声をかけると、男性陣は荷物を持って、女性陣はそのまま、こちらを向く。私はそれを確認してから客室に向かつて歩き始めた。そのすぐ後ろにお客様四名、 shinagari に、荷物を一つだけ持った昂さんが続く。

廊下は広くないから一人が横に並ぶといっぱいだ。先頭を歩く私の後ろから、河合さんと武田さん、浅倉さんと永野さんがそれぞれ隣同士に並んで話している声が聞こえてくる。

「ありがと、河合君。結構ずっと運転してもらっちゃって、ごめんね」

「いいえ、どういたしまして。でも、その分僕は、出発前にちゃんと寝かせてもらつたからね。みんなみたく残業しなかつたから」

「つたくさ、お前もうちょっと行儀よく眠れねえの？」

「大きなお世話よ」

「昨日早く帰れたんだ。そつかあ。じゃあ、未だ体力ある？」

「もちろん。今日もこの後、着替えたらすぐにでも滑りに行こうって思ってるよ」

「お前、寝てる間に」「そ動くもんだから、気になつて眠れなか

つたじやねーか。オレ昨日の夜、残業ですぐえ遅かったつてのに「そんなの知らないわよ」

「賛成 私に教えてくれるって言ひ約束、覚えてる?」

「もちろん」

「つたく、この後滑りに行くつづーのによー……」

「そう言えば、浅倉つてボードやるの?」

そんな仲の良さげな会話を聞いていたら、いつの間にか私まで笑顔になつていた。すゞぐ、賑やかだ。

皆さんの部屋の前に着いた。お隣同士のツインルーム。まったく同じ間取りのお部屋が二つ。

私が部屋の扉を開けると、永野さんと武田さんが歓声を上げながら入つて行つた。少し遅れて、河合さんと浅倉さん。

昴さんが、部屋の入り口近くに、持つて来ていた荷物を置いた。「じゃあ、オレ、もう一つの荷物を持つて来ますんで」

昴さんはそう言い残して、小走りで廊下を駆けて行つた。

私はとりあえず今開けた方の客室に入らせていただいて、簡単に

部屋の設備の使い方とお風呂やお食事のことを説明する。

「もう一部屋は、お隣のお部屋を取つておりますので」

そう言つて私が部屋を出たら、後から河合さんと浅倉さんがついて來た。

あれ?

少し不思議に思いながらもう一つの部屋を開けると、やっぱり河合さんと浅倉さんが入つて行く。

女性のお部屋と男性のお部屋になるのかな? ダブルカップルなのかなつて思つてたけど、違つたのかな。

「あの、鍵を……」

私が部屋の鍵を渡そとしたら、二人が同時に振り返つた。

大人の男の人二人に注目されて、私の身体が急に緊張し始める。

「ああ、忘れてた」

「うめんね。ありがとう」「う

手前にいた河合さんが苦笑しながら言い、私に手を差し出してくれた。私は中途半端に前に差し出していたルーム・キーを、その大きな手の上に置いた。

間近で見る河合さんは、想像していたよりもすゞく逞しくて、なにそれに不釣り合いなくらいに、優しく微笑んでくれている。そのとき、階段の方から足音が聞こえて来た。我に返る。

私、また、見惚れてた……かも。

なんか、私、変だ。

なんだか、すごくいけないことをしてしまったような気がして来て、私は恥ずかしくなった。

うう、なんか頬が熱い、かも。気のせいでありますように。

焦りを誤魔化したくて、足音の聞こえた方を向いた。階段の奥から、昴さんがやって来るのが見えた。

「雪奈、施設案内終わつた？」

「え？ あ、はい。」

「えっと、お疲れ様です」

「疲れてへんよ。」んなんどつことないわ」

昴さんはそのまま私の目の前 つまり、河合さんと浅倉さんの部屋の前までやつて來た。その表情が、僅かに曇る。

「雪奈、どしたん？ 顔赤いで？」

ウソツ？！

両手を頬に当てる。やっぱり、熱い？ ん、わかつけやつ？

「風邪ひいたんか？」

昴さんが小声で私に聞いてくれる。私は小さく首を横に振つた。

「ほんならええけど……気いつけや？」

昴さんは私にちょっと笑い掛けてくれた。そして、持つて來た荷物をまた部屋の入口に置く。

「荷物、ここに置いておきますかい？」

「ありがとう」

河合さんがお礼を言った。

顔を上げて河合さんたちの方を向いた昴さんが、不思議そうな表情になる。

「あれ？ 男部屋と女部屋なんですか？ オレ、カッフルで部屋割りするんやと思つとつた」

「は？」

「ふつ……あはははは」

「ち、ちゅつ……！」

私は思わず昂さんの腕を掴んだ。

そーいつことば、思つたとしても、口に出しかねダメですよーー。  
昂さんは別段悪びれている様子もない。それどころか、私に「な  
あ、雪奈もそう思わへんかった?」なんて小声で聞いてくるから、  
もお、私は焦つてしまつた。

ますます、頬が熱くなる。

私は恐る恐る一人の方を見た。でも、私の心配を余所に、河合さ  
んは愉快そうに笑つてゐるし、浅倉さんは畳然とした状態で固まつ  
てゐる。

「だつてや」

よつやく息が整つて、普通に話せるよつになつた河合さんが、浅  
倉さんにそう言つと、浅倉さんは不機嫌そうに河合さんを睨んだ。

「なんでオレに話振るんだよ、正紀」

「いや、なんとなく?」河合さんは意味ありげに言つて、私たちの  
方を見た。「残念ながら、僕たちはただの会社の同僚。僕たち四人  
の間では、カップルはいないよ。今のところは。」だよね、浅倉

?

「いちいちオレに確認すんなつての」

浅倉さんは、なんか不貞腐れてるのか照れでいるのかわからない  
表情でそっぽを向いてしまつた。

きつと、何か事情があるんだろうなあ。

「なんや、そうやつたんですか」

昂さんはそつと少し嘆息した。そしてすぐに、表情が明るく  
切り替わる。

「どないします? すぐ滑りに行かはるんですか?」

「正紀、どーする?」

浅倉さんがまた河合さんの方を向いて話しかけた。

「そうだね、武田さんや永野さんにも聞いてみないとね。ここから  
一番近いゲレンデってどう行けばいいのかな?」

「それやつたら、ペンション出て、東に五分くらい歩いたトコです。

「ースもぎょうさんありますかい」

「マジで？ 近ツ！」

と言つたのは浅倉さん。その声が、すゞく嬉しそうだった。きっと

と浅倉さんも昴さんと同じで雪遊びが大好きなんだろうな。

「ほんなら、道具はあのまま下に置いときますんで。夕食は六時半でええですか？」

「うん、ありがとう」

「スキー場はナイター設備もあるんで、食べ終わってからでもなんぼでも滑れます。使い終わった道具はドライルームに入れといしてください。あ、盗まれんようにだけ気い付けてくださいね」

昴さんはそう言つと、私にだけわかるように、軽く私の背中を叩いた。

「あ、そうだ。案内の最後の言葉、言わなきや。

「えつと、それでは、お寛ぎください」

私は未だ少し熱く感じる頬を隠すように失礼しますと礼をして、部屋の扉を閉めた。

「お前、さつきのゼットーワザとだろ？」

完全に扉が閉まる直前、部屋の中から浅倉さんの声が聞こえて来て、私はクスリと笑みを零した。そして昴さんと一緒に階段の方へと向かつた。

廊下の突き当たりに階段がある。階段の幅があまり広くないから、一人ずつ歩いた方が安全だ。昴さんが先に階段を降り始めた。私もその後を追うようにして歩きながら言つた。

「なんか、素敵なお人達ですね」

「せやなあ。……社会人かな？ 若そやけど。ゲレンデで会うかもしねへんなあ。ま、どっちにせよ、あの一人よりオレの方がええ男やろ？」

「え？ あ、えつと……」

突然そんなこと聞かれて……。なんて答えればいいのかな？

さつき会つたばかりのひとたちなのに、そんなこと考えて見てないよ。確かに、河合さんことを素敵だなって思つたけど。

だいたい、昴さんも、河合さんも、浅倉さんも、全然違うタイプの人見えるんだけどなあ？ それって、比較できないよね？

答えに困る私の目の前で、昴さんが大袈裟に肩を落とした。

「ホンマにもー、雪奈は……。一ーゆー時は、ウソでも『そうです』って言うとくもんや」

そういうものなんですか？

でもそれって、なんか少し違いません？

昴さんが、踊り場で立ち止まって振り返つた。いつもの明るい笑顔で私を見上げる。

「そー や、雪奈。今朝の仕事、もお終わつた？」

「あ、あと、玄関掃除だけ……」

「ホンマ？ それやつたら、それ終わつたら今日も一緒にボーッド行かへん？」

行きたいです！ と言いかけて、躊躇した。

すじく、行きたい。昨日すじく楽しかつたし。だけどきっと、私

に付き合つてたら、昴さんは今日も楽しめないよね。

「えつと……今日は、遠慮しようかなって……」

「え？ なんで？ 昨日、面白つなかつた？」

「いいえ！ すじく面白かつたです！」

身体中が痛いけど、もつともつと上手に滑れるようになりたいって思うし。

「ほんなら、なんで？ もしかして、脚傷めたんか？」

昴さんが階段を上つて来て、私のすぐ目の前 私が立つ段の一  
段下 に立つた。頭の位置がほとんど同じ高さになる。  
ち、近いですつてば……。

硬直する私とは逆に、昴さんすじく心配そうに私の顔を覗き込んで来た。

「いえ、あの、大丈夫です、けど」

「けど？」

「今日は、一人で滑るつかな……って……」

窺うように言った私を見て、昴さんは口を一文字に閉じると少し目を細くした。その目が、完全に据わっている。

「……あかん」

「はい？」

「それは許されへん

「えつ、あの……」

「却下や。雪奈には、まだまだぎょうさん覚えでもらわなあかんことがあんねん。せやから、一人で滑るんは許されへん」

「でも……」

「『でも』も『だつて』もない。さつと掃除終わらしー。」

「は、はいっ」

思わず直立して返事した。だって、それくらい迫力があったんだもの、昴さんの言い方。

途端に昴さんはふつと笑い、私の頭に手を置いた。また、ぽんぽんと叩く。

「ええ返事や」

そう言い残して、昴さんは階段を降りて行った。

玄関掃除の続きをしにホール行くと、マスターが簞を片付けようとしてるところだった。

「あっ、すみません。未だ終わってないんですね」

私が駆け寄ると、マスターはにっこり笑った。

「いいよ、俺がやつておいたから」

「うーん、めんなさい……」

私は頭を下げて謝った。

玄関掃除、私の仕事なのに。マスターにやつてもうひとつになっちゃうなんて……。

顔を上げると、マスターはちょっと困った顔で微笑んでいた。

「いや、謝られるときが困るんだけどな。お客様を案内してつて頼んだの、俺だし。

それよりも、他の仕事は終わった？」

「はい」

「今日もボード行くんだろう?」

私は頷く。マスターはまた苦笑し、掃除用具入れを開けて簞をその中に入れた。

「昇が待ってるだろ? だから、早く行ってやって。アイツがペンションの中に入ると、うるさくて叶わない」

口は少し悪いけど、マスターの言い方には不思議と昇さんへの思いやりが込められてるみたいに感じた。やっぱり、仲良しなんだな、この二人。

「ありがとうございます」

私はそう言いながら礼をして、部屋に向かった。

\* \* \*

「雪奈、上手あなつたなあ」

真っ白い雪の上。裏コノハで滑り降りた私に、昴さんが言った。

「昴さんが教えてくれたからですよ」

私がゴーグルを上げて答えると、昴さんはニヤリと笑つて鼻を擦つた。

「せやろ? 先生がちいやうと、上達も早いねん」

マスターが玄関掃除をしていてくれたおかげで、あれからすぐにスキー場へ繰り出すことができた。

昨日、重いなあって思つたボードも、歩きにくくなつて思つてたブーツも、今日は全然そんな風に感じないから不思議。

それつてきっと、ボードをするのが面白いからだよね?

私と昴さんは、準備運動をして、また一日券を買って、すぐにリフトに乗つた。今は、そこから下つている途中の一本目。

滑りながら気がついたんだけど。私、昨日よりも明らかに長い距離を、苦痛なく、むしろ楽しい気持ちで滑れるようになつてる……気がする。そんな気がするだけかもしれないけど。

それに、相変わらず、コノハ滑りつて言つ滑り方しかできないけど。

でも、表コノハも裏コノハも普通に滑れるよつになつたし、昨日初めて滑つたときにはあんなに怖いと思つた中級者コースを、怖いつて全然思わなくなつた。それつて、ちょっとは上手くなつたってコトでいい、よね?

うん、本格的にハマりそうですが、ボード。

すごく、楽しい。

私自身、こんな風に何かにハマるつてことが今まであんまりなか

つたから、なんだか余計に新鮮。

今なら、昂さんがボードにのめり込んだ気持ちがちょっとわかる、かな。

「ほな、続き行こか。今日一本目で未だ身体が温まつてへんはずやさかい、無理せえへんようにな」

昂さんが私に言つ。私は頷いて、ボードを斜めに構えた。コノハ滑りの角度も、昨日よりも傾斜をつけられるようになつてきてる。

この辺りなら人も少ないし、もうちょっとスピード出しても大丈夫かな？

そう思つて、私は今までよりもけよつとだけ角度をつけて、ボードを傾けた。今度は、表のコノハで。

顔に当たる風が変わつた。今までには頬を撫でるみたいな風だったのが、ちょっとぶつかつて来るみたいな感じ。ゴーグルをかけてないと、きっと目を開けてられない。でも。うわ……気持ちいい。

表コノハで斜面を下りながら真正面を見ると、目の前に広大なパノラマが展開する。それを眺めながら、心地いい風を身体全体で受け止めていると、なんだかそのまま浮いていきそうな、この澄んだ空氣に身体が溶けていきそうな、そんな気さえする。

つい一週間前まで、うつん、一昨日まで、こんな世界知らなかつたのに。夢みたい。

適度に進んで折り返しのターンをする。

少しずつ、角度が変わっていく景色を見ながら、私は知らず微笑んでいた。

そのまま何度も何度もターンして、ふと気付く。

そう言えば、私、しばらく止まってない。昂さんが追いついて来ないけど、もしかしてはぐれちゃったのかな？ いつたん止まって、昂さんを待つた方がいいかもしない。

私はボードの角度を甘くしてスピードを落とした。

「うわっ！？」

え？！

背後で声がした。振り向く。すぐ目の前の人人がいる。  
いけないつ、ぶつかっちゃう　！！

私の身体が強張った。ボードが止まる。そのすぐ脇をギリギリの  
コースで、カーキ色の影が風のようにすり抜けていく。

カーキ色のウェアを着たその人は、私の脇を通り抜けると左手を  
雪に着いてブレーキをかけた。真っ白い雪煙が舞い上がる。  
び…びっくりしたあ……。

脚から力が抜けていき、私はその場に膝を付いた。

「ごめん、大丈夫？」

カーキ色のウェアの人は、そう言いながらスノーボードを金具を  
片方外す。そして片足で器用に歩いて、私の方へ近づいて来た。声  
が低い。どうやら、男の人みたい。

「はい、なんとか……。あ、あの、すみません、でした……」

今のは多分、周りに注意してなかつた私が悪いよね。急にブレー  
キ掛けたりして。

「いや、今のは僕の方が悪いんだよ。滑つてるときは後ろまで見え  
ないからね。驚かせてごめんね」

そう言いながら、カーキ色のウェアの男の人は私の目の前で止ま  
った。

そこまで近づいて気が付いた。この声、それに背格好。この人、  
もしかして

「ちょっと、河合君っ！？」

甲高い声とともに、小柄な女性ボーダーが私の隣辺りで止まった。  
今、『河合』って呼ばれてた。つてことは、この人、やっぱり……。

「今、ホント危なかつたわよ？」  
「うん、反省してる」

カーキ色のウェアの人人が、女性ボーダーさんに向かって苦笑しつつ「ゴーグルを取った。やっぱり、『河合さん』だ。つてことは、この女性ボーダーさんは、武田さん？

「こんな可愛らしい子　つてあれ？　あなた、ペンションの……？」

武田さんも私に気づいたらしく、ゴーグルを取つて膝をつき、身を乗り出すようにして私を覗き込んでくる。そして、両手を伸ばして私のゴーグルを額に上げた。

え、えっと……。あの……。

「やっぱり！　ね、そうよね？」

重ねて聞かれた私は、小さく「はい」と返事をしつつ頷いた。

「ちょっと武田さん、そんなに覗きここんだら雪奈さんに失礼だよ」

河合さんが私の名前を口にした。

武田さんが、それもそうねと乗り出していく上半身を起こす。

あれ？　河合さん、なんで私の名前知ってるの？　私、名乗つたつけ？

「ああ、勝手に名前で呼んじゃつてごめんな。昴君つて言つたつけるの男の子がそう呼んでいたから」

私が驚いたのがわかつたらしく、河合さんは私の名前を知つている理由を説明してくれた。

「今は休憩中なの？」

武田さんが聞いてくる。

「ええ」

「昴君は？」

「多分、もうすぐ来ると思います」

そう答えたとき、私の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ゆきなあー！」

「ちよつ、昴さん、声大きいです！ みんなに聞こえるじゃないですかっ！？」は、恥ずかしい……。

私は頬が熱くなるのを感じた。河合さんと武田さんが、声を殺しつつも愉快そうに笑っている。

もおー。昴さんのバカっ！

昴さんは河合さんの後ろあたりで止まるとい、ゴーグルを上げた。

「雪奈？」

私は頬を少し膨らませながら、昴さんを上目遣いで睨んだ。でも昴さんは私の側にいる一人を見ている。

その昴さんの表情が、すぐに笑顔になつた。昴さんもすぐに、私と一緒に居るのがさつきのお密さんの『河合さん』と『武田さん』だつてことに気がついたみたい。

「ああ、さつきの……。もうゲレンデに来はつたんですか？」

「未だ一本目だけじね」

河合さんが昴さんの方を振り返つて言つた。

「運転で疲れてるんとちやいますのん？」

「ありがとうございます。大丈夫ですよ。出発前にちゃんと寝ておいたから」

「そりなんや。せやけど、氣つけな身体壊しますよ？」

「うん、今日は無理しないようにするよ。それにしても、ペンシヨンからゲレンデまで本当に近いんだね」

昴さんと河合さんが話している。

でも、なんだろう。なんか、昴さんの雰囲気が、変……な気がする。考えすぎかな？

そう言えば、河合さんと武田さんしかいないけど、浅倉さんと永野さんはどうしてんだろう？

私は一人の会話を眺めながら、ほんやりとそんなことを考えていた。「そうやねん。せやから、雪で遊ぶんにはホンマにめっちゃ便利なんですね」昴さんが言い、その後小首を傾げた。「そう言えば、あとのお二人はどこにいるんですか？」

あ、昴さんも私と同じこと思つてたんだ。だから、変な感じがしたのかな……。でも、違う気がする。なんかしつくり来ない。つて私、何考えてるんだろう。まだ昴さんと知り合つて数日しか経つてないのに。昴さんのこと、何でも知つてるつてわけじゃないんだから。そんな偉そうなこと思つちゃいけないよね。

「あの一人なら、未だ下にいるんじゃない？」

隣から聞こえてきた武田さんの声に私は我に返つた。武田さんが続けて言つ。

「香蓮、今日が初ボーダだつて言つてたし」

あ、そりなんだ。永野さんは、今日初めてボーダするんだ。昨日の私みたい。

「そうだね。まあ、永野さんならすぐ上達するだろ？ けどね」

「ああ、言えてる。今日中にスラロームくらこできるようになるか

も」

え？ スラロームって、コノハとターンの次に覚えるつて昴さんが言つてたやつだよね？

それつて、一日でできるよになつちやうものなの？

頭の上に疑問符を浮かべる私の隣で、武田さんが小さく笑合いを入れて立ち上がった。膝を付いたまま私が見上げると、武田さんは

につっこりと私に笑いかけてくれて、言った。

「ねえねえ、せつかくだし、一緒に滑らない？ 香蓮や浅倉君も、

きっとその辺で合流できるだろ？」

「確かに、みんなで滑つた方が楽しそうだね」

河合さんも言い、ふんわりとした笑顔になる。本当に優しそうに笑うなあ、この人。

私が見ていると、河合さんはその視線に気付いたのか私の方を向いた。条件反射みたいに、私は慌てて目を逸らして何でもない振りをする。

「ねえ、どお？」

武田さんがそんな私に重ねて尋ねてきた。

私、まだ斜面を下ることしかできないんだけど、そんな実力で他の人と滑つたりしていいのかな？

答えに貧窮した私は、助けを求めるように昴さんの方を見た。昴さんはそんな私を見て苦笑していたけど、私と目が合つと代わりに言つてくれた。

「そやな。大勢の方がきつとおもりいわ。  
つて言つても、オレたち夕方からまた仕事があるさかい、ちょっと早めに上がらせてもらわなあかんねんけど……」

「あ、そっかあ。じゃあ、それまでは一緒に滑る。ね？」

「あ、はい。あの、よろしくお願ひします」

私がそう言つと、武田さんは嬉しそうに笑つた。

「雪奈さん」呼ばれた方を向くと、河合さんが私の方に手を差し伸べていた。「立てる？」

えつと……。

私はこくんと頷いた。それを見たはずなのに、河合さんは笑顔で手を差し出したまだ。なんだか、王子様がお姫様にするみたいな仕草。

掴まれつて言つてるの、かな？

私が河合さんの手の上にそつと自分の右手を乗せると、河合さん

は私の手を優しく握った。その後、吃驚するくらい強い力で、ぐいと引き上げられる。弾みで、私の膝が伸びた。そのまま、私の身体が立ち上がる。

「雪の上に長く座つてると、身体が冷えるから。女の子は身体冷やしちゃだめだよ。気を付けてね」

河合さんはそう言つと私の手を放した。

「あ、ありがとうございます……」

「それじゃ、私行くねー！」

武田さんが片手でゴーグルを下ろし、もう一方の手を振りながら滑り降りて行く。その後を追いかけるように、ゴーグルを着けた河合さんが滑り始めた。

滑らかな身体の動き、無駄のないフォーム。ターンの度に白い綿の帶のような雪の尾が後方に靡く。

河合さんの滑りを例えるなら、そう、風みたい。爽やかで暖かい、

五月の風。

「きれい……」

私は呟いた。

あんな風に、滑れるようになりたい。まだまだ、何年も先の話にななつじやうだらうけど。

「雪奈？」

昴さんに呼ばれて私は戻った。

「は、はいっ？！」

「何か言つた？ なんせ、わざわざつと、ほおつとじるみたいやし……」

いつの間にか、昴さんはゴーグルを下ろしてくる。

「あ、えっと、たいしたことじやないん」

「そりなん？」

「あの、河合さんの滑りが綺麗だなって思つて」

「……せやなあ

昴さんは脇へよつて立つて、小さくなつてこべ河合さんの後ろ姿

を目で追つた。何か考えているみたいな表情。どうしたんだりう？

滑りたい、のかな？

「昴さん、行かないんですか？」

「オレ？ オレは最後。雪奈の後からすぐ行くさかい。雪奈、先行つてんか」

「あ、はい」

私は慌ててゴーグルを下げてボードを構えると、スタートした。

できるだけ急いで、ゲレンデを下る。それにしても、やっぱり、スラロームで滑ってる人にコノハで追いつこうとすると、本当に大変。私も、スラロームができるようになりたいな。後で昴さんに教えてつてお願いしてみようかな。

そのまま滑つて行くと、あと一百メートルくらいでゲレンデの一一番下に着くつてくらいの場所に、武田さんと河合さんが並んで立っているのが見えた。

スピードを落としつつ近づき、最後に膝をぐつと曲げて、一人の少し後ろで止まった。

「あれ？ いないみたい……」

「そうだねえ。ここの辺にいると思つたんだけどなあ

一人の声が聞こえて来る。

いるはずの人がいないみたい。もちろん、浅倉さんと永野さんのことだ。

「あ、来た来た」武田さんが私に気が付いて言つた。「お疲れー

「あれ？ あの一人、いはりませんのん？」

すぐ後ろから声が聞こえてきて、私の身体がびくつて動いた。

振り返ると、私の背中の方に昴さんが来て立つていて。い、いつの間に？！

「雪奈、驚き過ぎや

昴さんは呆れ顔で言い、「ま、そこがええんやけどな」と付け足すとまた私の頭に手をぽんぽんと置いた。

私が昴さんを見上げて抗議の口を開きかけたとき、後ろからくすくすと笑う声が聞こえてくる。

「もー、当たらねちやうわ。仲がいいのね」

武田さんの声に正面の方へと首を戻す。

「じ、え？ 当てられたやつって？ 何、どうこう」とへ。

「ねえ、河合君？ そう思わない？」

「そうだね。微笑ましい」

微笑ましいって、私と昴さんのことへ あ、もしかして、勘違いされてる？

ようやく一人が何を言わんとするのがわかつて、焦る。

「え？ あ、ちがつ……」

ちゃんと否定しなきやつて思つのに、うまく言葉にならない。そんなわけないじゃですか。昴さんみたいに明るくて暖かくて太陽みたいな人が、私みたいな子だとなんて、ありえないですって。

「……ちやこますよ」業を煮やしたのか、昴さんが口を挟んだ。「そんなんじゃあつませんて。雪奈はオレにとつて妹みたいなもんやさかい」

え？ い、妹？ 昴さんつてば、私のこと、そんな風に見てるの？ そんな考え方のよがる私の頭を、昴さんがまたぽんぽんと撫でてくれる。

「やうなの？ んー」

武田さんは未だ何か言いたげだ。河合さんは相変わらずにじにじと微笑んでいる。武田さんは、残念そうに私たちを見、次に河合さんを見、少し肩を竦めて苦笑しつつ付け加えた。

「確かに、雪奈ちゃんつて妹キャラっぽい……」

武田さんまでつー？

私はちょっとびり傷ついた、気がした。

「ま、それはそうと」昴さんがこの話題はおしまい、とでも言つようには声を出す。「浅倉さんと永野さん、いはりませんねえ」

「そりやう、そりなのよ。おかしいなあ？」

「怪我でもしあつたんやろか？」

「永野さんの運動神経なら、それはないと思つけど

眉根を寄せる武田さんと、微笑みを絶やさない河合さん。そして、そんな一人にもうすっかり溶け込んでしまっている昴さんを、私は感心しつつ眺めた。

「すごいなあ、昴さんは。誰とでもすぐに打ち解けて話せちゃうんだもの。羨ましい。私みたいに、上手くしゃべれないなんて悩み、ないんだろうなあ。

だいたい、昴さんって何か悩みあるのかなあ？ 大体のことは笑い飛ばしちゃいそうだよね。くよくよ考えて、結局行動できない私とは、大違いだ。

そんな私の考えを他所に、みんなは斜面のあちこちを眺める。私もゲレンデの中に一人の影を探した。雪が太陽の光を反射してちょっと眩しい。ゴーグルかけてなかつたら、目が痛くなりそう。

ゲレンデにはいろんな人がいて、中には男女のカップルらしき人たちもいるけど、浅倉さんと永野さんらしき人影は、ここから下のどこにも見当たらない。

「ここでちょっと待つときましょか？ 戻つて来はるかもしれへんさかい」

昴さんが言いつと、河合さんが首を横に振った。

「いや、滑りひ。ここにじたら周りに迷惑になるしね。僕たちがもう一周してくる内に、きっと会えるよ」

「そうね」

武田さんが同意して立ち上がる。そして、自分の後方の、斜面上の方を見上げた。その少し乾いた口が小さく開いたまま固まる。

「あれ？ ねえねえ、河合君。あれ、香蓮じゃない？」

武田さんが誰かを指差しながら、河合さんの方を振り返った。

「え、どこ？」

「ほら、あれ。あそこ。白いウェアにグレーのパンツの人」

「え？ ああ、あれ？ あの、スラローム……してる人？」

河合さんが身を屈めて、武田さんの指先を追う。私と昴さんも、

武田さんの指示する方向を見た。

そこには、颯爽と斜面を滑り降りてくる一人のボーダーさんがいた。

武田さんが言つたとおりの、白いジャケットに明るいグレーのパンツ。ウェアの色からして、多分、女性だと思う。なんでのかわからぬけど、一際、目を引く。

とにかく、腰から上がほとんど動かない。斜面に対してほぼ垂直を保つている。なのに腰から下大きく左右に動いていて、まるで腰のラインで身体が二つに分かれているみたいだ。

機械みたいに正確なリズム。軽快なターン。雪飛沫もほとんどあがつていない。

とにかく、すくなく、カッコイイ。

「あのメチャメチャかっこええ人ですか？」

「うん」

武田さんが、もう確信を持つてるみたいに頷いた。河合さんは呆れたように小さくため息をついた。

「うーん、確かに、永野さん……だねえ」

私たちがそんなことを話している間に、その女性ボーダーさんは見る見る内に私たちの傍まで来て、目の前で最後に雪煙を舞わせて止まつた。

女性ボーダーさんがゴーグルをおでこに上げる。予想通り、やっぱりそれは永野さんで。

「あれ？　どうしたの二人とも？」

永野さんが武田さんと河合さんに向かつて言つた。

「やつぱり香蓮だつた！」

武田さんが嬉しそうに言つた。

その直後、別のボーダーさんが雪飛沫を上げながら永野さんのすぐ後ろに止まる。その男性ボーダーさんは、永野さんと同じようにゴーグルを上げた。もちろん、浅倉さんだ。なんだかその眉根がち

よつと寄つてゐるけど。

浅倉さんは永野さんを見据えると開口一番、言つた。

「お前、ほんつとかわいくねえっ！」

「つむさいなあ。たまたま滑れただけじゃない」

浅倉さんの言葉をまつたく氣にしていない様子で、永野さんは両手を軽く振つた。浅倉さんが面白くなさそうにため息をつく。

「つたぐ、『たまたま』のレベルじゃねえつての。おい、永野。お前、本当に今日が初ボーダーか？」

「ただけど」

ええっ？ あの滑りで、初めてなの！？

「ホンマに！？」

私が驚くのと同時に同時にそつとんだのは歸さんだった。

突然聞こえてきた関西弁に驚いたのか、その場にいた全員の視線が、自然と昴さんに集まる。でも、昴さんは全然そんなこと気にしないみたいだ。

「嘘やん！ ホンマに今日初めてなん？」

そう続けた昴さんを、永野さんが訝しげに覗き込む。その後、その田と口が、真ん丸に開かれた。手をぽんと打ち、次に昴さんを指差す。

「ああ！ あなた、ペンションにいた元気な子？」

一瞬の間。

そして昴さんがふつと噴き出し爆笑し始めた。隣にいた武田さんも一緒になつて笑いだす。

「ちよつ、香蓮、元気な子つて……」

「あははっ、あはっ、小学生やん！ あははは」

昴さんのその言葉に、浅倉さんも噴き出した。河合さんは控え目に笑う。私もみんなにつられて笑顔になつた。

そんな中、永野さんだけが「私、変なこと言つた？」と一人困惑した表情で首を傾げていた。

「それにしても、ホンマにお上手ですねえ。初めてやとはとても思えへん。そんじょそちらの経験者よりもずっととかつこええわ」

ひとしきり笑つた後、昴さんが言ひ。浅倉さんも同意するよつて腕を組みながら頷いた。

「教えるつて言われても、オレが教えられることなんて全然ねえよ。多分、その辺の上手い奴らの技見てりや、永野なら勝手に覚えるだろ。

ホントお前、女にしておくのもつたいねえよな

「わかるー。テニスしてるときもいつも思つけど、香蓮つて本当にカッコイイよね。もし香蓮が男だったら、私、今の彼と別れて香蓮にアタックしてたと思つもん」

武田さんが言つと、河合さんが苦笑した。

「それは穩やかじやないね」

「確かに」

永野さんも笑つた。そして、膝を曲げ、えいつと軸足を上げて、下ろしている脚を軸にその場で百八十度回転する。

何でもない風にやつてみせたけど、私には未だできない技だ。多分、それなりに難しい技だらうつていうのは私でもわかる。みんなも驚いてるも。だけど永野さんはそんなことには全く気づかなかつたみたいで、歯を見せて笑いながら言つた。

「昔スケードボードでよく遊んでたんだけど、よく似てるね

「ああ、それでか」

浅倉さんが合点がいった、とばかりに頷く。そして腕を解くと右腕で永野さんの足下を指した。さつき回転するときに、軸足にした方の脚だ。

「お前たまに後ろ足に体重かけるだろ？ スノーボードは常に前足に体重かける。後ろ足は基本的に舵取りだけ。技使うときは別だけどな。後ろ足に体重かけると、ボードが反れてスピードが出ちまうんだ。ま、お前ならそれでも制御できるんだろうけど」

永野さんが途端に真剣な表情になる。自分の左右の足下を見ながら、片足を上げたり下げたりし、次に左右それぞれの脚に体重を移動させながらその感触を確認した。そして何かに納得したように頷き、笑顔をこぼす。

「ああ、なるほどねー。そつかあ。そこにはスケードボードじゃなくて、スキーと同じなわけね」

「そうなのか？ オレはスキーやつたことないからわからんねえけど」「うん。スキーもね、前に体重かけるんだ。ありがと、やってみる。

よし、じゃあ先にリフト行くよ?」「

永野さんは楽しくてたまらないみたいだ。ボードを傾けると私たちの間を縫うように抜け、あつと言ひ間に斜面を滑り降りていく。

あれ?でも、あれじゃあ、ボードの向きが反対じゃないかな。

永野さんはレギュラーのはずなのに、グーフィーみたいに右足が前になってる。

私がそう思つたとき、永野さんの体が後ろ足側に沈み、次の瞬間に伸び上がりつつ横に半回転した。そのままレギュラーのポジションになると、一気にリフト乗り場の方へ向かつて降りて行く。

私はその永野さんの滑りに目を奪われた。

「うつわ。すごい……」

「ねえ、今の見た?」

昴さんと武田さんが同時に声を漏らす。

「うん、すごいね」

河合さんのため息混じりの咳きも聞こえてくる。

「つたぐ。アイツ、いきなりワン・エイティかよ……」

浅倉さんはそう言つと、自分も永野さんの後を追つて滑り始める。うわ、浅倉さんも上手だ。なんか、滑り方が昴さんに似てる、かも。綺麗なフォームつて言つよりも力強い感じがする。そんな浅倉さんの後から、武田さんも滑り始める。河合さんも下る準備を始める。ボードの角度を変えつつ、優しく微笑みながら私の方を見た。「ゆっくりでいいからね」

そして、河合さんも滑り始めた。

あ、そうか。この中でスラロームできないの、私だけなんだ……。

「ほな、雪奈、オレらも行こか」

昴さんが私の頭にぽんと手を置く。私はそんな昴さんを見上げて頷いた。ボードを斜面に沿わせるよじにして、表口ノハの形で斜めに角度を変える。

リフトまではあと一百メートルほど。もう傾斜も全然急じゃない。

スラローム、ここでなら、できるかもしない。

私は前にある左足に体重をさらりと乗せる。重心を落とす。右に曲がりたい、そう思いながら、行きたい方向を見据えつつ、つま先側に体重を移動させる。

あ。

体が、雪の上に大きく弧を描くように回った。

ひょっとして、私、今、ターンできた？

うん、できる。できるよ。だって、今、裏コノハのポジションになってるもの。

じゃあ、もう一回。今度は右から左、裏コノハから表コノハに……。

もう一度前足に体重をかける。行きたい方向を見ようとしたとき、ボードを雪に取られた。バランスが崩れる。

あ……っ、転ぶっ！

とつさに腕を前に出す。その途端、全身をどんっという衝撃が走り、顔に冷たいものが当たる。そのまま私の身体は雪の上をずるずると滑り、止まった。

うう……痛い……。久しぶりに大胆に転んじゃったなあ。

倒れている私のすぐ横に誰かが来た。いけない、起きなきや。こんなところで寝てたらみんなが迷惑しちゃう。

「雪奈、大丈夫か？」

上体を起こすと、そこにいたのは昴さんだった。私の隣で膝をついてしゃがみ込むと、私の身体に付いた雪を払い落してくれる。

「あ、ありがとうござります……」

私も自分で身体を叩きながらお礼を言つた。

「頭打つてへんか？」

「ええ、大丈夫です」

「ほなよかつた」昴さんは一ヶと笑うと立ち上がった。「すげいやん、雪奈。まさかターンするとは思わへんかった」

私が昴さんの差し出してくれた手を取ると、身体が引き上げられた。

「でも、失敗しちゃいました」

下半身に付いていた雪を払いながら私が言つと、頭の上にまた昴さんの手が置かれる。

「ボード一日目でこれだけできるようになつたら十分や」

「でも、永野さんは今日初めてボードするつて……」

私が昴さんを上目遣いで見上げながら言つと、昴さんはちょっと笑つた。

「あの人は特別や。雪奈があんなんなつたら、オレ困つてまつ」

「ちよつと！ それって、どういう意味ですか？」

「ま、雪奈も今日中にはスラロームできるようになるんとちやうかな。次リフト乗つたら教えたるさかい、はよ行こ。みんな待つてくれたはん」

昴さんの指示す方に視線を移すと、さつきの四人がリフト乗り場の入り口でこっちを見ているのがわかつた。

昴さんが私の背中を押す。私はリフト乗り場に向かつて滑り始めた。

二人掛けのリフトは、いつも通り昂さんと並んで座る。だけどいつもと違つこともある。私たちの前には、河合さんと浅倉さんの座るリフトと、永野さんと武田さんの座るリフトがいる。本当に仲がいいみたいで、リフトの上でもそれぞれずっとお話しているのが見えた。

私も昂さんとさつきの反省会をする。やつぱり、裏コノハから表コノハへのターンの方が難しいらしい。

「ま、焦らんでも、今日か明日にはできるようになるやろ」

昂さんはそう言つと自分の足元のさら下を見下ろした。

私もセーフティバー越しにすっかり見慣れた雪景色を眺める。そのとき、ふと、またハーフパイプとジャンプ台に近づいてきたのに気がついた。そつと隣の昂さんを窺うと、予想通り、やつぱりそこをじっと眺めていた。

きつと、やりたいんだろうな。あれ。すつじく、喰い入るみたいに見つめてるもん。

昨日と今日、我慢して私に付き合つてくれてるんだもんね。

そのときふと、ハーフパイプの隣にコースがあるのに気づいた。あ、あそこ、私たちが今日ずっと滑つてた中級者コースだ。すぐ隣だつたんだ。間に木々があるとはいえ、全然気付かなかつた。中級者コースと林道で繋がつてゐみたい。

下から、歓声が上がつた。

見ると、ハーフパイプの中を飛んだり空中で回転したりしながら滑つてる人がいた。その人が宙を舞うたびに、歓声が起こつてゐるだ。

「あいつ、めちゃめちゃ上手いなあ

昴さんが呟いたのが聞こえて来た。

私は、なんだかとつても申し訳なくなつて、昴さんから視線を外した。

やがて、リフトの頂上が見えてくる。未だ、一人でリフトを降りるのはちよつぴり自信がないけど、でも随分怖くなくなつた……と思う。

そんなことを考えていたら、昴さんがセーフティーバーを上げながら私に尋ねてきた。

「雪奈、そろそろ一人で降りられそうか？」

ちよつど、それを考えてたところだったんだけどな。

「えつと……多分」

自信はないけど私はそう言ってしまった。

私は、リフトの上で、左足が前に出やすいように身体が少し斜めになるように座り直した。そんな私を見て、昴さんがにっこりと笑う。

「よつしゅ。じゅあ、降りんでー」

ボードの裏を雪につける。そのままリフトに押されるよつに前に進む。

大丈夫。できるー……はず。きっと。

私は右足をボードの後ろに乗せて、立ち上がつた。そのまま真っ直ぐに前に進む。リフトを降りた直後は短い下り坂になつているから、それだけで前に進んだ。

そのまま目の前にそびえる雪の壁に突つ込む前に右足を降ろして止まる。

できた。私、一人でリフト降りられた！

私は嬉しくなつて昴さんを探す。昴さんは私のいる場所よりも少し後ろで、苦笑していた。

「できたやん、雪奈」

「はいっ！」

私は大きく頷き、昴さんと一緒にスケーティングしながら先に頂上へ着いていた他の四人の下へと向かった。

「お、来た来た」浅倉さんは私たちの方に手を振ると、隣でケータイを覗している河合さんは方を向く。「おい、正紀、写真撮ってる場合じゃねえよ」

「ああ、ごめん。すばしく綺麗な景色だったから」

そう言つて、河合さんは携帯電話を胸ポケットにしまった。

私たちはコースの隅に寄つて、足をボードに固定するために雪の上に座り込んだ。がちやがちやと金属音が鳴る。

「よつと」

真っ先に立ち上がったのは浅倉さんだつた。そのまま上に伸びたり上半身を左右に回転させたりしている。身体を温めているみたい。それに続いて、昴さんも立ち上がる。私も、早く履かなきや。

「ゆつくりでいいよ」

優しい声が聞こえてきた。間違いない、河合さんだ。  
そう言つてくれるのはとっても嬉しいけど、でもやっぱりみんなに待つてもらっちゃつてるつて思つと気が引ける。

「あ、ありがとうございます……」

私はお礼だけ言つて、ビンディングができるだけ急いで締める。ようやくできた。うん、ばっかり。

立ち上がりつてお尻に付いた雪を払い落としついたら、武田さんの声が聞こえてきた。

「ねえねえ、昴君」

「ん？ なんですか？」

顔を上げた私の目に映つたのは、昴さんに話しかけている武田さんの姿だつた。

「昴君つて、エアーできるの？」

「エアーツバボードのですか？ まあ一応は、少しあつたらできますけど……」

「ホント？ どんな技できるの？」

「どんなん……？ すんません、オレ、技の名前あんま知らんのです

わ。オーソドックスなんしかでけへんし。スピンドルとかジャンプとかつて言うんかなあ？ このゲレンデ、ハーフパイプとかジャンプ台とかもあるさかいに、そこでそないな技やりますよ

「そりやすげえな。そんだけできりゃ十分じゃん」

昴さんの言葉を聞いて、口を挟んだのは浅倉さん。すつごく興味津々っていう表情をしている。

「なんでそないなこと聞くかはるんです？」

「うん。いつかね、インティグラブをね、やつてみたいなつて思つてて」

そう言つた武田さん、昴さんは少し驚いたようになりを見開いた。「マジで？ 武田さんが？ 永野が言つならわかるけど……」

「武田さんて、意外とアクティブなんですねえ。女性つて見かけによらんもんやなあ」

昴さんはそう言つて、肘を張るよつこじて頭の後ろに両手を置いた。

それにしても、『ヒィアー』って何だろ？ それに『インティグラブ』って？

多分、つて言つかもちろんスノーボードに関するお話なんだろ？ けど、せつぱりわからないなあ。

「ねえ、何そのエアーって？」

永野さんが、わいわいと楽しそうに会話する三人の中に入つていぐ。私の代わりに聞いてくれたみたいで、なんか変な感じだ。

「オリンピックのハーフパイプとかで空中ですげえ技するだろ？ それのこと」

浅倉さんが永野さんにそつ説明する。

「ああ、あれ？ ウソ、昴君、できるの？ 私もやりたい！」

永野さんが田をきらきらせつてそつ言つてているのを聞いて、浅倉さんがため息混じりの苦笑を漏らした。でも、当の永野さんはそれには気づいていないみたいだ。

「ねえ昂君、ちょっとだけ教えてもらつてもいい？ 本当は河合君に教えてもらつつもりだったんだけど、河合君、夜通し運転してて、今日は無理そุดだから」「

武田さんが、胸の前で両手を合わせて昂さんにお願いする。ちょっとした仕草なのに、すこしく可愛らしい。つて年上の女の人に失礼かもしけないんだけど。

そして私は、それを自然にできる武田さんのことを、ちょっと羨ましいなって思った。

「ああ、確かにそんな状態でエアー教えるんは難しいやろなあ」昂さんはそう言いながら首をちょっと動かす。

あ、私のこと見てるんだ。

昂さんが武田さんを教えるつていうことは、私が一人になっちゃうつてことだから。それを気にしてくれてるんだ。

「あ、教えてくれるならオレも参加ー」

「私もー！」

次々と上がった浅倉さんと永野さんの声に、昴さんがそちらの方を向く。右腕を上げて、頭を搔いた。

「あー……そないに言われても、オレ教えられるほど上手ないねんけど……」

昴さんが言葉を濁しつつまた私の方をちらりと見た。  
やっぱり。

もしかしたら、くらいの勘が確信に変わる。

私がいるせいで、昴さん、『エアー』できないんだ……。

さつきリフトの上でハーフパイプを見ていたときの昴さんが思い出される。あのときの昴さんは、じっと、真剣に、滑ってる人を見つめてた。瞬きすらしないで。

教える、教えないは別にして、きっと昴さんはその『エアー』つていうの、やりたいんだ。だけど、自分から私を誘った手前、きっとそれができないんだ。

かと言つて、私に『エアー』ができるはずないし。

未だ一人で滑るのは自信があるわけじゃないけど、だけど、きっと私、昴さんがいなくても大丈夫。滑れる。未だ完璧じゃないけどターンも少しできるようになつたし。

うん、決めた。昴さんは別に滑ろう。

私が決心して、昴さんに声をかけようと口を開く。

「あ、あのつ。昴さん、私のことは気にしないでくださいね？ 私は一人で大丈夫ですから……」

私が胸の前で小さく手を振りながら言うと、昴さんの表情が険し

くなる。

「それはあかん。雪奈は未だ一人で滑るんには危ないさかい  
噛み付くよ」ひたすら言つた昂さんに私は肩を竦める。

「でも……」「

それじゃあ、昂さん、本当にボード楽しめないじゃないですか。  
すごく好きで、そのためにマスターのペンションでタダ働きまでし  
てるつて言つてたじゃないですか。

反論しようとしたそのとき、河合さんの、澄んだ声に先を越され  
てしまつた。

「じゃあ代わりに、僕が雪奈さんと一緒に滑らせてもうつて」と  
で、いいかな?」「

え……？　か、河合さんつ？

私が驚いて河合さんの方を向く。河合さんは私と昂さんの方に優  
しげな微笑みを返してくれていた。

「どのみち僕は、今日はエアーとか激しい技をやるのは難しいから  
ね。下手にやつて捻挫してもいけないし。昂君も、それだったら、  
文句ないだろ?」

重ねて言つ河合さんを、昂さんはまっすぐに見つめた。立つてい  
る位置関係のせいでの、昂さんの表情が私からは見えなくなる。

ん？　なんだろう？　昂さん、何で黙るの？

「ほな、そうしましょか」

昂さんが言つ。

多分、黙つてたのは一瞬だったんだろうけど、私にはたつぱり一  
分ほどはあつたように感じられた。

「じゃあ、教えてくれるの決定つて事で、いい？」

武田さんがぽんと両手を合わせながら言つ。

「ええですよ」

昂さんが頷きながら言い、私も笑顔で頷いた。

「やつた」

武田さんや永野さんの嬉しそうな表情を見て今まで嬉しくなる。

よかつた。思いつきつてわけには行かないだらうけど、これで昴さんもエラーができる。きっと私といるよりも楽しめるはずだよね。

「じゃれ合いつとこ、」言葉がぴたりな武田さんと永野さんを眺めていたら、昴さんがケータイを片手に寄つて來た。

「ほな、雪奈、ケータイの番号教えてんか。ペンションに歸るときに電話するさかい」

「あつ、ハイ！」

私は手袋を取ると胸ポケットのファスナーを開けて、ケータイを出す。

「そりが。そり言えば私、まだ昴さんとケータイ番号もメアドも交換してなかつたつ。もう何日も一緒にいるのに。」

それとも、何日も一緒にいるから、かなあ？ ケータイ交換しておいた方がよさそうだなんて、思いつきもしなかつた。

「あ、キャリア一緒やな。ほな赤外線で交換しよ」

私のケータイを見て、昴さんが「うわ」と見ただけでよくわかるなあ。

私はそんなことを思いながら、ケータイを操作して赤外線データ受信のモードにする。

昴さんとお互いに自分のデータをやり取りしていたら、河合さんや他の人たちも寄つて來た。

「あ、じゃあ僕も一人のケータイ番号とメアド聞いておひつかな。一応、お互に連絡取れるようにしておきたいし」

そう言いながら、河合さんが取り出したケータイは、昴さんのと色違ひのケータイだつた。昴さんが赤で、河合さんが黒。なんだか二人のイメージ通りだ。

「あ、一緒やん」

「本當だ。なんか縁があるね」

「こいつと笑う河合さん。だけど、昴さんはちょっと複雑な表情だ。

そのままわいわいと、皆でケータイ番号を交換し合ひ。

全員の交換が終わると、河合さんはボードを履いたまま私のところにスシと器用に寄つて來た。そしてその手を私の両方にぽんと置き、昂さんには声をかける。

「じゃあ、昂君。『妹』さん、お預かりするね」

昂さんは一瞬田を見開き、口を開く。そのまま何かを言いかけて、思い留まつたようにいつたん口を噤んだ。そして改めて口を開く。「ホンマに大事にしたつてくださいね、河合さん」

「もちろん、そうするよ」

昂さんと河合さんとのその会話に、ちよつとだけがつかりした。なんか完全に『妹』っていう立場が確定しちゃつた気がする。

なんか、変な感じ、かも。

昂さんは私と河合さんを流し田で見つづ、武田さん、永野さん、浅倉さんの方を向き直つた。

「ほな、行きましょか。せやなあ、ちょお、オーリーからやりたいさかいに、なだらかなトコまでとりあえず移動しますわ」

両手を広げて振りながら、ほら行つた行つたと昂さんが三人の生徒（？）を追い立てる。

昂さんたちの姿が、斜面の下の方へと滑り、やがて見えなくなつた。

「それじゃ、僕たちも行こいつか？」

河合さんの声がした方を向いた私は、思わず声が出そつくなるのを必死で堪える羽目になつた。

だつて、目の前に河合さんの顔があつたんだものー！

でも、考えてみれば当然だ。河合さんは私の肩に手を置いたままなんだから。その状態で私を覗き込むみたいにして話しかけてきたんだから、そりゃあ、近い場所に顔があつて当然なんだけど。

でも、でもね？

なんだかとっても、熙さんよりも心臓に悪い気がします。

私が想像していた以上に、河合さんはすゞしく優しくて、紳士的だつた。私は経験がないから、男の人のことってよくわからないけど、こんな人がモテないわけない、と思う。

お話も上手だし、いつも笑顔だし、常に私のことを気にしてくれてるし。ボードの滑り方も教えてくれるし、私が転んだらすぐに寄ってきて助けてくれる。

あ、でもそれはそれは昴さんも一緒に。

だけど、昴さんと河合さんは全然違う。

うーん、何て言えばいいのかなあ？ 繼つてる空気が違うって言えぱいいのかなあ？

河合さんは、とっても雰囲気が柔らかい。隣にいると、ふんわりした暖かいもので包まれているような、そんな気になる。でも、昴さんは違う。昴さんは太陽みたいな人。元気で明るくて、なんだか底知れないパワーがある。

そう、本当に太陽だ。それに対して、私は月だ。太陽の光を受けてようやく輝くことができる、夜空に浮かぶ月。昴さんのおかげで、私は今までとは少し違う自分に出会えた気がするから……。

何本か滑った後、私たちはそれまで乗っていたリフトとは違うリフトに乗つてみることにした。

それまでのコースよりも長い距離を滑ることになるみたい。

「もしかして、上級コースじゃないですか？」

私が確認すると、河合さんは微笑んだ。

「大丈夫、違うよ。ゲレンデマップには、中級者コースって書いてあつたから」

あのう、私、ボードを始めてまだ一回なんですねけど……。

つて言いたかったのに、私に向けられる河合さんの笑顔がなんか落ち着かなくて、結局言えなかつた。

ああ、流されやすいなあ、私。こんなことじやあ、何も変われないよ。

でも、弱音を吐かないつて決めたし、初めてのことでも挑戦するつて決めたから。

私は河合さんとペアリフトに並んで座つた。  
足が地面から離れて、身体が浮き上がる。

いつもの通り、私は左脚に力を入れて、ぶら下がっていたボードを右脚に引っ掛ける。昨日、昂さんに教えてもらつたことだ。  
もう、癖になつてるみたい。

リフトのケーブルに沿つて上を見上げる。終わりが見えないや。当たり前かあ。「ースが長いと、リフトも長いよね、普通。

隣に座る河合さんが「じそ」じそと動いてこる」と口元付いて、私はそちらを見た。

「手、出してくれる?」

河合さんが微笑みながら言つた。

ワケもわからぬまま私が手を出すと、河合さんは私の手を取つて包み込むようにする。そして掌に何かを握らせてきた。  
うう、手袋越しでよかつた……。

そんなことを思ひながら、私は河合さんの手が離れた自分の手を開く。そこには飴玉が一つのつかつていた。

包み紙の両端が捻るよつにして包まれているタイプの飴玉だ。

「あ、ありがとうございます……」

私が言つと、河合さんは微笑んだ。

「美味しいよ。結構お気に入りなんだ、これ」

そう言つた河合さんの頬が片方膨らんでいる。きっと河合さんも

食べてるんだ。

私はありがたくいただくことにして、包み紙の両端を引っ張った。くるくるっと飴玉が回転して包み紙が解ける。落とさないよつて気をつけながら、それを頬張った。

うん、美味しい。いちごミルクの味だ。

河合さんが甘いもの大丈夫って、ちょっと意外、かも。

河合さんに改めてお礼を言おうと思ったら、河合さんはケータイを手にしていた。手袋を外して、熱心に何か操作している。

私が見ているのに気付くと、照れたような笑顔を見せた。

「あ、ごめんね」

そう言つて、ケータイを閉じると、胸のポケットにしまへ。手袋をはめ直している河合さんに私は尋ねた。

「メールですか？」

「うん。紗織にね」

サオリ？

私は河合さんの口から出てきた名前を反芻する。

サオリ……？ 武田さんの名前は『真由子』だし、永野さんの名前は『香蓮』だったはずだから……。

「彼女さん、ですか？」

私はズバリ聞いてみた。

河合さんがにっこりと微笑む。

「うん、そなんだ」照れもせず、隠そうともせず、河合さんは答えた。「ここ」の景色、すごく綺麗だから見せてあげたくてね。さつき上で撮った写真を送ったんだ」

その笑顔があまりにも幸せそうで、見ている私までなんだか暖かい気持ちになる。

「仲がいいんですね」

「うん、そうだね」

そう、さりとて言えてしまつ河合さんを、私は、やっぱり素敵だ

なつて思つた。

そう思つた途端、なんだか心の奥に歯がゆいものを感じる。なんだろう、この感じ。

ショックとかじやなくて、嫉妬でもなくて。さつき昴さんに『妹』って言われたときの方がショックだった気がするし。

ええつと……、これは、純粹な、羨望……？

私にも、そんな風に言える人ができるといなつていう。そして、その人にもそんな風に言つてもらえるようになりたいなつていう。そんな感じ。

「ところで、雪奈さん」

河合さんの声に、身体がびくりと震えた。

ヤダ、私。随分、物思いに耽っちゃつてたみたい……。変な顔してないといいんだけど。

少し不安に思いつつも、とりあえず返事をする。

「はい？」

「昴君とは、本当になんでもないの？」

予想もしていなかつた質問に、私は息が止まつた。その拍子に、口の中にあつた飴玉が喉に詰まる。

「！ ケホッ！ ハホッ！」

横隔膜が激しく反応し、私は咽た。

飴玉はなんとか口の中に戻ってきたものの、咳がなかなか止まらない。

「大丈夫？」

河合さんが背中を摩つてくれる。

大きな手で優しく何度も摩られているうちに、よつやく落ち着いてきた。

「『めんね、まさかそんなに驚かれるとは思わなくつて』

「驚きますよ……」

「そう?」

「昴さんは、本当になんでもないんです。何日か前に、あのペンションのアルバイトで、初めて知り合ったんです。私がいろいろと頼りないから、何かと気にかけてくださってるんです」

私はそう答えて、小さくため息をついた。

自分で言つて、自分で勝手に自己嫌悪。  
本当に、その通りなんだもの。私、昴さんに氣を使つてもらつてばかりだ。

「じゃあ、本当になんでもないんだ」

河合さんが言つた。

「ええ」

私は頷いて、前を向いた。

だから、気付かなかつた。

河合さんが、意味ありげな微笑みで私の方を眺めてくること。

あれからもうしばらく河合さんと滑った後、昴さんから電話がつた。

河合さんと滑つてこるとなんだかほつこつしちゃつて、時間が経つの忘れてたから、電話が来たときは吃驚した。え、もつやんな時間？ つじ。

ゲレンデトロッジといいで昴さんや他の方々と待ち合わせて、私と昴さんだけ、ペンションへと戻つた。

「なんや、『機嫌やな』

ボードを担いで一人でペンションに向かつて歩いていく途中、昴さんが私に言った。

「やうですか？」

「ああ。なんか、イキナリ歌いだしそうな感じやで」

「ああ、それはきっと、スラロームがちょっと滑れるようになつたからです」

「え、ホンマ？」

「ええ。河合さんが教えてくれた。なだらかなところなら、なんとか」

「ふうん……。あなんか。がんばったやん、雪奈」

昴さんは優しく微笑みながら、また私の頭をぽんぽんと撫でてくれた。

ペンションに着いたらすぐにマスター・浩美さんのお仕事を手伝う。ある意味、一日の中で一番大切な仕事、食事の仕度だ。

一応時間には余裕を持って戻ってきたつもりだったけど、お客様の人数が増えたせいか、すごく忙しかった。

作り終えた頃には、お客様が食堂に食べにいらっしゃる。休むまもなく今度は給仕。

そして、皆様のお食事が終わってから、よつやく私たちもお食事。その後、食器を洗って、厨房をお掃除して、よつやくペンションでの一日のお仕事が終わる。

と叫うわけだ、今はもうこういったお仕事も終わった、夜の自由時間。

今夜は、昴さんと一緒に近所の『森田さん』のお家にお邪魔して星空鑑賞会をすることになっている。近所だから歩いていくかなって思つてたけど、車で行くらしい。昴さんが運転してくれるつて。

昴さんと部屋に戻りがてら、集合時間を確かめる。十分後にHINTランス集合つてことで落ち着いた。

「ああ、やうや。Hアコンが効き始める前に着くさかいに、暖かい格好しあせや」

自室に入ろうとしたとき、顔だけをドアから出した状態で昴さんが言つた。

私は自分の部屋に入つて鏡の前に立つ。コートに腕を通すと、ボタンをきつちりと締めた。マフラーを髪の毛ないと首に巻きつけ、解けないよう前に前で結び、最後に手袋をはめる。

よし、ぱっちり。これで寒くない、はず。

わざわざマフラーを巻いてるとき、隣の部屋のドアが動く音がしてた。昴さんは先に行っちゃつてゐはづだ。車を玄関に回しておくつて言つてたから。

約束の時間まではあと五分ほどある。

だけど私はなんだか落ち着かなくて、自分の部屋を出た。

やつぱり、早すぎ、だよね。

エントランスには着いたけど、誰もいない。それに、館内は暖房が効いてはいるけど、それでもエントランスはちょっとぴり寒い。うう、どうしよう。

視線を走らせた先に、ラウンジの扉がある。  
そうだ、昴さんが来るまでここで待つてよ。私はラウンジに入ると、心地のいいソファに座った。  
そういえば、初めてこのペンションに来た日、同じでマスターと面接(?)したなあ。

まだあれから数日しか経つてないのに、随分前なことのよつた気がする。それだけ、ここに馴染んだってことかなあ。

そんなことを考えていたら、賑やかな声や笑い声と共にラウンジのドアが開いた。

「だから、あそこはもうちょっとね」「えー。いいじゃない、別に。できたんだし」「香蓮すごい上手だつたよね」「そつなんだ。それは僕も見たかったな」「ホント、お前、女にしどくのもつたいねえよな」「うるさいなー」

聞き知った声。見知った顔。

もちろんそれは、河合さんたち四人で。

私が気付くのと同時に、河合さんも私に気が付いた。

「あれ? 雪奈さん?」

「あ、こんばんは……」

私はソファに座つたまま会釈した。

武田さんがくすくすと笑う。

「そんな改まらなくつても。さつきまで一緒にいたじゃない」

四人がラウンジに入つてくる。

浅倉さんの手に、小さな箱が見えた。一瞬タバコかなつて思ったけど、多分違う。館内は禁煙だもの。

「このラウンジ、使わせてもらつてもいいのかな？」

河合さんが私に聞いてきた。

数日前までいたお客様にも同じことを聞かれたっけ。確かそのとき、マスターはいいよつて言つてたはず。

今他に誰もいないし、ここなら客室とも少し離れてるから他のお客様の迷惑にもならないし。

「ええ、大丈夫です。」

「よかつた。みんなでトランプやるうと思つて。あつとつむやくしちやうだらうから、僕たちの部屋だと隣の部屋の人にも迷惑をかけちやいそうでね。」

なんとなく『つむやくしちやう』の想像がついて、私は苦笑した。それにしても。

屋内にいるのに厚着の私。ただでさえひょつと変なのと、普通の服を着てる皆さんに囲まれるから余計に変です……。

「どこか行くの？」

私の服装を見て、永野さんが言つ。

「ええ」

「一人で？」

「んなわけねえだろ」

永野さんの言葉に浅倉さんが突つ込んだ。

「あ、昴さんを待つているんです。車を取つてくれることになつてて」

私が答えると、武田さんがにんまりと笑う。

「もしかして、デート？」

「ちつ、違います！」

私は慌てて否定する。

もお、河合さんも武田さんも、なんでそういうこと言つてのかなあ

？ 違うのに。本当に、そんなわけないのに。

私はちょっと拗ねた気分で、昴さんと何処に出かけるか告げた。

「マスターのお知り合いの方が、星空鑑賞会を開くからおいでのつて  
言つてくださつて、それで……」

途端に武田さんが目を輝かせた。

「うわあ、なんか素敵！　いいな、私も行きたい！」

「だめだよ、武田さん。先方様に迷惑かけちゃうから」

「……だよね」

河合さんに優しくしたしなめられて、えへへと武田さんが苦笑いする。

やっぱり、武田さんってなんか可愛いなあ。

いつもにこにこしてて、だけど表情はくるくる変わって。男の人  
が放つておかない気がする。

私も、あんな風になれたら、そうしたら

そのとき、勢いよくラウンジのドアが開いた。

「いやー、まさかフロントガラス凍るとは思わへんかった。油断しちゃったわー」

「まったく、だから影に置いておけつて朝言つたじやないか」「入ってきたのは、もちろん昴さん。それと、その後ろにはマスターまでいる。

「雪奈、おまたせー！ って、あれ？」

昴さんがラウンジの中に私を見つけて声をかけてくれる。

「昴さん」

私は思わずソファから立ち上がつた。

昴さんは私と、その周りにいる河合さんたちを見てキョトンとして、次に目を細めて笑つた。

「なんや、えらい賑やかやなあ」

そんなことを言しながら、昴さんとマスターが私たちの方まで歩いてくる。

「いいなー、星観に行くんですって？」

武田さんが昴さんに言つと、昴さんが答える。

「ええ、そうです。大介兄チャンと仲良くなれる近所さんが、ご好意で毎年見せてくれるんですねわ」

「毎年？」

武田さんの質問に昴さんは頷き、マスターに「な？」と視線を投げかけた。マスターもにこにこしながら頷く。そして口を開いた。

「そうだ。みなさんも行かれますか？」

武田さんの目が輝いた。

「えっ、いいんですか？」

「森田さんなら大丈夫。大歓迎だよ。あの人、人をもてなすのが大好きな人だから」

マスターはそう言つて笑つた。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

河合さんが言い、軽くお辞儀する。他の三人もそれに習つて頭を下げた。

「いやいや、それは森田さんにやつて。俺は森田さんに『お願ひします』って電話するだけだから」

なんだかマスターの方が恐縮しちゃつてる。

でも、今日のゲレンデに引き続いて、この素敵な人たちと一緒に過ごせるつて思うと、私は嬉しくなつた。

「ほな、車ん中、寒いさかい、ジャケットかコート持つてきてください」

昴さんが言い、河合さんたちは急いで自分たちの部屋に戻つて行つた。

その間に、マスターが森田さんに電話する。マスターが電話しながら笑つてる。マスターの言うとおり、森田さんは人が増えても全然気にしないみたい。

やつぱり、いい人の周りにはいい人が集まるんだろうな。  
私と昴さんは先に車に向かうことにした。

「行つてらつしゃい、楽しんでおいで」

受話器の口を手で押さえながらそう言つて見送つてくれたマスターに手を振つて、私たちは外に出た。

雪は降つてないけど、やつぱり外はすぐ寒い。つて言つか、冷たい。

息を吐いたら、その白さが綺麗に見えた。

その霧のような靄が、なんか、きらきら輝く。

ん？ 輝く？ なんでだろう？

私は、立ち止まってその光源の方を見た。

「うわあ……」

ペンションのHントラーンスのすぐ脇。

そこにあったのは、白銀の、クリスマスツリーだった。

もともとペンションの敷地にある木だ。葉っぱはないけど、枝や幹に雪が積もって、真っ白になっている。その木に、温かみのある黄色の小さなライトが蒼きつけられていて、天辺から地面までは円錐を形作るみたいに垂れ下がっていた。

とっても幻想的なクリスマスツリーだ。

いつも、この木の隣を通りてるのに、全然気付かなかつた……。

「きれい……」

そう呟いた私の声が聞こえたのか、前を歩いていた昴さんが振り返つたのが、目の隅っこで見えた。

「ん？ ああ、これが？」

しゃくしゃくという雪を踏み締める音で、昴さんが私の方に近づいてきているのがわかる。そのまま、すぐ隣に立つた。

私は昴さんを見た。昴さんの方が背が高いから、当然見上げなきゃいけないんだけど。

その昴さんの顔が、ライトに照らされていた。

「お庭に、こんな素敵なかリスマスツリーがあつたんですね」

「今朝、大介兄チャンと作つたんやで。綺麗やろ」

「ええ、とっても」

私は頷いて、またツリーに視線を戻した。

そう言えば、朝ごはん食べた後、なんか外で作業するつて言つてたような気がする。

これ、作つてたんだ。

「いつもやつたら、オレがこっち来てすぐ作るんやけど、今年はいろこんとあつたさかいになあ。作んの遅うなつてん」

クリスマスツリーを飾るライトが、ランダムに点滅を繰り返す。そのまましばらぐ、私と昴さんは、一人並んでツリーを見つめていた。

やがて、ペンションの出入り口の扉が開いて賑やかな声が聞こえてくる。

「ああ、やっとみんな来はった」

昴さんが言い、ペンションの方を見る。河合さんたち四人が、身を寄せ合いつつもわいわい言いながら、私と昴さんのいる方へと歩いてきた。

「「めんね。我が依言った上にお待たせしちゃって」

河合さんが私たちに向かつて言う。

「ええですよ。気にせんといでください」

昴さんが答えるのが、背中越しに聞こえてくる。

武田さんが、私たちの身体の向きに気付いて、ツリーを見上げた。

「ああ、ツリー見てたのかあ」

「このツリー綺麗だよね。今日グレンゲから帰つて来たときに、私たちも見てたんだ」

永野さんも言う。

みなさん知つてたんだ。気付かなかつたの、私だけか。

「私、こんなところにツリーがあるなんて全然気付きませんでした」

私が言うと、昴さんが苦笑する。

「雪奈はツリーが光うてる時間に外に出えへんのやし、それもしゃーないと思うねんけど」

確かにペンションの扉とかそこに続く道からは数メートル離れるから、それはそうかもしけないんだけど。それでも、普通は気付くよねえ？

……私、典子ちゃんたちが言つよつて、自分で思つてている以上に天然ボケさんなのかしら？

そんなことを考えていたから、きっと、納得いかないって顔をしていたんだと思う。昴さんが、あやすみたいに私の頭の上に手を置

いた。

「ほな、そろそろ行きましょか。森田さん、さつと、待つてくれ

たはるし」

あ、そうだ。一応、約束の時間があるんだつたつけ。

私たちは昴さんが門の辺りに回しておいてくれた車に向かって歩  
き出した。

私たちが乗り込んだのは白いワゴン。私がここに初めて来たときに昴さんと乗った、あの車だ。

この車は、普段、電車でいらっしゃるお客様を駅まで送迎したり、食材の買出しに行くのに使われている。もともととても大きな車だから、昴さんと私、それと河合せん、浅倉さん、永野さん、武田さんが乗つても、まだまだ広さとしては余裕だつた。

もちろん、昴さんが運転席。私は助手席だ。後ろのシートを覗くと、例によつて女性が真ん中の列、後ろの列には男性一人が座つてゐる。

「みなさん、シートベルト締めはつた？ ほんなら、車出しまつせー」

昴さんはバックミラーで後ろの席を確認すると、ギアをドライブに入れた。

\* \* \*

森田さんのお家は、車で十分とかからないところにあつた。

つて言つても、雪の上を危なくないようゆっくりと進んでの十分だから、雪のない時期なら数分で着いちゃうと思う。そんな距離。昴さんはもう何度も来ているみたいで、森田さんが空けておいてくれた家のガレージに切り替えし一回だけで駐車を終えた。

みんなで車を降りて、ガレージから家の入り口まで移動する。インターフォンを鳴らしてしばらく待つて、一はーいと反応

が返ってきた。

「中野ですー。遅くなつても一で、えらいすんません」  
あ、そういうえば、昴さんって『ナカノ』って苗字だつたつけ。もうすっかり、名前で呼ぶのに慣れ切っちゃつてゐなあ。

そんなことを考へている内に、森田さんの家の玄関扉が開く。中から出でたのは、中年の、優しそうなおじ様だった。多分、マスターの一回りくらい上だと思つ。

「おお、昴君。待つてたよ」

昴さんを見てそう言つた後、森田さんは私たちの方を向いた。  
「君たちのことも中野さんから聞いてるよ。あまり広くない家だけ  
ど、どうぞ。外は寒いから、早く中に入つて入つて」  
森田さんに追い立てられるようにして、私たちはとりあえず家の  
中に上がらせていただいた。

通されたりビングで、私たちは改めて森田さんに「挨拶する。

奥からは奥様も出てくれた。これまたおつとりした雰囲気の  
奥様だ。

「あの、誘つていただきて、ありがとうございました」  
「突然、ご無理言つて僕たちまでついて来てしまつて、すみません」  
「いや、いいんだよ。ただの趣味でやつてることだからね。それに、  
息子からは全然相手にされないんだ。昴君や、他の興味があるつて  
言つてくれる子たちが来てくれて、本当に嬉しいよ」

森田さんは、ちょっと出でているお腹を楽しそうに揺すつた。

森田さんのお家のリビングは、多分二十畳くらい。白い壁にフローリング、その上にムートンの絨毯が敷いてあつてとっても暖かい。壁際にはテレビとオーディオセット。それに、写真がたくさん飾られていた。

「ちょっと待つててね。今、暖かい飲み物出すから。コーヒーがいいからしら? それとも紅茶? ココアも緑茶もあるわよ」

奥様は明るい声でそう言つてキッチンの方へと歩いて行く。

「あ、気にせんといってくれてええよ、おばちゃん。お構いなくー」

昴さんが声をかける。

そのとき、だだだだだつと言つ音が近づいてきた。明らかに階段を駆け下りてくる音。その音の主は、最後にどんつ！ と一際大きな音を鳴らすと、リビングのドアをバタンと開けた。

「昴！」

大きな声と共にリビングに突進して来たのは、私や昴さんよりもちょっとだけ若そうな男の子……。

多分、背は昴さんと同じくらいか、少しだけ低い。ちょっと長めの茶色い髪と、冬なのに日焼けしたままの肌の、すこく活発そうなイマドキの男の子だ。

「おう、晴人やん。久しぶりやなあ

昴さんが破顔した。

晴人と呼ばれた男の子が昴さんに近づく。そして、二人で笑い合いながら、腕と腕をぶつけてじやれ合つた。

「夏以来だろ？」

「ほな、半年振りかあ」

そんな二人を見ながら、私はなんとなく、後ずさりしちやう。怖い、わけじゃないんだけど。まだまだ、初対面の男の人には、すぐに慣れられないんだなあ、私。

そういえば、河合さんにはすぐ慣れたのに、ね。今日、いっぱいおしゃべりもしたし。

不思議だ。

浅倉さんは、一対一での会話なんて絶対にできないのに。

そんな風に遠巻きに一人を見ていたら、晴人と目が合つた。

晴人の目が、真ん丸になつた。

そして目は私を捉えたまま、昴さんの胸倉を掴んでガクガク揺らす。

「なあ、おい、昴。あの子、誰？」

「ち、ちょお、晴人。やめえや」

その声が届いたのか、晴人さんが手を離して昴さんを解放する。

それでもずっと私の方を見たままだ。

え？ え、え？ 私、なんか変？

ようやく自由になつた昴さんは、ほつとしたようにため息をつくと、晴人さんの凝視する方 つまり、私と、その後ろの河合さんたちを見た。

「ああ、手前の子がペンションにバイト来てくれる子で、後ろの四人はペンションのお客さん。森田さんがええよつて言つてくれたさかい、つれて来てん」

晴人さんは昴さんが言い終わる前に歩き始めた。

私を見たままで。  
まっすぐに。

私の方へ。

え？ 何？ 私……何かした？ しない、よね？

後ろへ後ずさりたくても、後ろには河合さんたちがいるし……。  
困つてうろたえている間に、晴人さんは私の真正面まで來た。  
そして、晴人さんは、うろたえる私の両手を取つて、私を真つ直ぐに見つめて、言った。

「やつべえ。お姉さん、すっげー可愛い。超俺好み。ストライクゾーン、ど真ん中！ ねえねえ、俺と友達になつてくれる？ 名前聞いてもいい？ 今、彼氏いる？ 俺と付き合わない？ ケータイ教えて？」

え……と……。

はい？

え？ え？ え？

状況が、よく、飲みこめないんです、けど。

「こら！」

すぱあん！

「いでつ！」

『こら』は森田さんの台詞、『すぱあん』は森田さんが晴人さんの頭を軽く叩いた音。『いでつ』はもちろん晴人さん。

晴人は私の手を離し、叩かれたところを摩つてている。

「まつたくお前は……」

森田さんはため息をつくと、晴人の腕を掴んだ。

「すみませんね、こいつ、本当にバカで」  
森田さんが、晴人さんの腕を引っ張つて私から引き剥がす。そしてそのまま晴人さんをヘッドロックしながら私に向かって言った。  
晴人さんは苦しいらしく、手をばたばたとさせ始める。

「あ、いえ……」

私は慌てて手を胸の前で小さく振った。

そんな私の隣に、昴さんがため息をつきながら戻つてくる。

「雪奈、大丈夫か？」

小声で聞いてくれた昴さんに、私は苦笑しつつも頷いた。  
確かにびっくりした。けど、多分、平気。うん。

気持ちを落ち着かせてから森田さんに視線を戻す。その腕の中で、晴人さんが相変わらず手をばたつかせていた。

「ちよつ、親父つ、オトーサマツ、苦し…、マジ苦しいって！」

晴人さんの声に、森田さんは「おつと」と言いながら腕を放した。  
晴人さんが深呼吸する。

森田さんがこほんと咳払いした。

「えー。みつともない恥ずかしいヤツですが、うちの息子です」

「森田晴人。大学二年です」

森田さんが紹介すると、晴人さんはふざけた態度から一変して、ぴしつと礼をした。

その急変つぶりにもびっくりしたけど、年齢にはもつと驚いてしまつた。

晴人さんつて私と同じ年齢なんだ。もつと下かと思った。高校生とか、それくらい。なんか、ちょっと、いや、とっても、ヤンチャそうだし。

それにしても、なんだか森田さん親子つて、昴さんとマスターの関係に似てる、かも。いい親子だけど、同時にお友達でもある、みたいな素敵な関係。

私は微笑ましく思いながら、森田さん親子を眺めた。

昴さんが代表して、簡単に私たちを紹介する。昴さんが手で私たちを示すのに合わせて、私たちは会釈した。

「こちらは河合さんと浅倉さん。それと、永野さんと武田さん。四人はペンションのお客さんやねん」

最後に、昴さんはいつものように、私の頭をぽんぽんと抑えるようにながら言った。

「で、この子は雪奈。浩美さんがアレでペンションの人手が足りひんさかい、アルバイトとして来てもろてんねん」

につこりと笑いながら晴人さんの方を見る。

晴人さんはすっごく嬉しそうな笑顔を浮かべて、私たちの方を見返した。

その表情が、私には、なんだか恵美ちゃん家のワンコみたいに見えた。前に、お家に遊びに行つたときには、ワンコ。「お散歩行こつか」とて恵美ちゃんが言つたときの、あのとつても嬉しそうな「本当? ねえねえ、早く行こよお」とてじやれてくる、あの表情にそつくりだつたから。

それを思い出して、私は知らず微笑んだ。

「つまり、昴のカノジョってわけじゃないんだよな?」

「なんやねん、晴人、イキナリ……」

晴人の問いに、昴さんが訝しげに言つのが聞こえてきた。

「雪奈ちゃん」

昴さんの言葉を遮るように、晴人に名前を呼ばれて我に返る。気がつくと、私はまた晴人に腕を取られていた。

「え?」

「展望室、三階なんだ。先に行こづせ」

「えつ、あ、あの……」

私が返事をする前に、晴人は私の腕に引っ張る。それに引き摺られるように私の脚が動いた。

歩きながら、みんなのいる後ろを振り返る。

苦笑しながら私たちを見送る森田さんと河合さんたちに混じって、とつても、とつてもとつても珍しく、仮頂面をする昴さんがいた。

晴人に腕を掴まれたまま、とりあえず一階に上がりさせていただく。そこには、廊下といくつかの扉。さらに上に続く階段は、どこにもない。

どうやって上るんだろう？

そう思っていたら、晴人が廊下をすいすいと進み、一番隅っこにある扉を開けた。

狭い上に、真っ暗……。

晴人が扉の脇にある電気のスイッチを入れると、上に続く階段が見えるようになった。

あ、ここが、展望室への入り口なんだ。

私が納得するまもなく、そのまま、晴人は当たり前のようになんと私を引っ張りながら上っていく。

階段を上り切ったところで、晴人はよつやく私の腕を離した。そして、振り返りながら言つた。

「はい、着いた」

「うわあ……」

ため息のような声が漏れ、私はその部屋を見回す。

晴人に案内された『展望室』は、私が想像していたものとはまったく違っていた。

廊下も扉も何もなく、もうそこは、部屋の中だった。十畳くらいの部屋だ。

展望室とは言うものの、造り自体は屋根裏部屋って言つた方が近い。床は絨毯が隙間なく敷かれているし、空調もちゃんと設えられている。クッションやブランケットが部屋の隅に綺麗に並べられ、小さめの丸いカフェテーブルが部屋の中央に置かれていた。

ただ、普通の部屋とは違う点も多い。

まず、一番目に付くのは部屋の形。八角形だ。四角い部屋の角を削ぎ落としたような形をしている。

それに壁と天井。壁って言える部分は、床から五十センチ分くらいしかない。そこから上は、八角錐の天井だ。東西南北の方位をわざと外した部分だけが（斜めになつてゐるけど）普通の天井で、残りは全部ガラス張り。壁や天井のガラスじゃない部分は、ログハウスマティに板の目がそのままになつていた。

床暖房も完備されているみたいで、足の裏が暖かい。天井までの高さはあまりないけど、その分、保温がしつかりされる感じがする。私は部屋を見回しながら、その場で一周してみた。

「すごい、ですね」

「だろ？」

晴人さんはどこか自慢気だ。

森田さんは、息子さんからは相手にされてないって言つてたけど……それは黙つておいた方がいい、よね。

私が晴人さんの言動に苦笑していると、階段の方から賑やかな声が聞こえてきた。わざわざ確かめなくて、昴さんやみんながこの展望室に上ってきたんだとわかる。

そして私の予測どおり、森田さんを先頭に、昴さんや河合さん、武田さん、永野さん、浅倉さんが部屋に入ってきた。

「天井が低いから、さすがにこの人数だと窮屈だね」

そう言いながらも、森田さんは嬉しそうににこにこと笑いながら、私たちにブランケットやクッションを配る。

私たちはそれを受け取つて、それぞれ適当な場所に散つた。



私は晴人さんに渡されたブランケットを手に、一人部屋の壁際に座る。

床が暖かい。腰を降ろしてようやくそのことに気が付いた。絨毯を撫でながら、私が呟く。

「あつたかい……」

それが聞こえたみたいに、森田さんが「こここ」としながら昴さんにクッショוןを渡して言った。

「君たちが来る前に床暖房をつけておいたから。そろそろ効いてくる頃だと思うよ」

それを聞いて、みなが口々に森田さんにお礼を言いつ。本当に、いい人だな。

そんなことを思つていたら、階段から女性の声が聞こえてきた。「ちょっとといいかしら？ 飲み物を持ってきたのだけど」

森田さんの奥さんだ。階段を上ってきた奥さんは、大きなお盆にたくさんのマグを載せていく。とっても重そう。

「ありがとうございます」

それを見た武田さんが素早く立ち上がりて奥さんの方へと寄つていぐ。

私も立ち上がりてブランケットを足元に置いた。

「晴人、母さんを手伝え」

森田さんに言われた晴人さんが、「はーい」と返事しながら奥さんの下へと寄り、奥さんからお盆を受け取つた。身軽になつた奥さんがほつとしたように微笑む。

飲み物を持つた晴人さんのところへ向かう途中、クッショൺを抱えた昴さんとすれ違つた。

「雪奈、オレのんも頼むわー」

「あ、ハイ。何にします?」

「ココア」

「わかりました」

意外。昴さんって、甘いもの、大丈夫なんだ。  
私もココアにしようかな。

こんな素敵な部屋で、暖かくて美味しいココアを飲みながら、星空を観るなんて、なんだかすごく贅沢してる感じがする。

そんなことを考えながら両手でお盆を持つ晴人さんの前に立つと、晴人さんがにこにこと上機嫌で声をかけてきてくれた。

「雪奈ちゃん、どれにする?」

「あ、えっと、ココアにしようかな、つて……」

「じゃあ、雪奈ちゃんから見て右にあるマグだよ」

私はお盆の上からココアのマグを一つ受け取ると、次の人のためにとりあえず立っている場所をずらした。

昴さん、どこかな。

部屋の中を見回すと、人がいっぱいにもかかわらず、すぐに見つかった。さつき私がブランケットを置いた場所の、すぐ隣にいる。もうすっかりくつろいだ様子で、クッショוןを背に床に座っていた。

ほこほこと湯気の出るマグを両手に、その場所へと戻る。そして床に膝を着くと、片方のマグをすっかり昴さんに差し出した。

「ありがとぉ、雪奈」

「熱いですから、気をつけてくださいね?」

私がマグの取っ手を持つちゃつてるから、昴さんが手にするところは熱いはず。

「ん」

昴さんは右手を伸ばし、慎重な顔つきでマグを受け取った。

片手が空になつたところで、私は自分の分のココアを床の隅の方に置くと、昴さんの右隣に腰を下ろす。そして、ブランケットを膝

に被せ、またマグを手に取った。

「…… 言つてくれたら、オレが持つてたのに」「え？」

「 鳴さんが何か咳いた気がして、私は聞き返した。  
「 なんでもない。気にせんといで」

鳴さんが苦笑する。

なんだか腑に落ちない。

だけど、そんなもやつとした気分は、聞こえてきた別の声に搔き消された。

「 雪奈ちゃん、隣、いい？」

声のした方を見上げると、笑顔の晴人さんが立っていた。飲み物を配り終えたんだ。私の右隣を指差している。

「ええ」

私が答えると、晴人は一瞬だけ鳴さんの方に視線を走らせながら、例の嬉しさを前面に押し出した子犬のような表情で、私の隣に腰を下ろした。

「 さて、そろそろ電気消すよ?」

今度は森田さんの声が聞こえてくる。いつの間にか、森田さんは電気スイッチの脇に立つていて、部屋の中の様子を確認していた。私と鳴さんと晴人さん、河合さんに武田さんに、永野さんに浅倉さん、そして奥さん。みんながいめいの場所に落ち着いたことを確認してから、森田さんが部屋の照明を消す。

当たり前だけど、急に、真っ暗になった。  
さつさまで明るかつたから、田が慣れなくて。

何度か瞬きしているうちに、だんだんと馴染んでくる。

朧氣に、闇の中をうごめくみんなの姿が影のように見えてきた。

左肩をとんとんと叩かれ、耳元に鳴さんのさわやかな声が聞こえて

くる。

「雪奈、上、見てみ？」

上？

言われて見上げた私の口から、ため息が漏れた。

「うわあ……」

ガラスでできたとんがり屋根の向こうに、文字通りの、満天の星空が広がっていた。

数え切れないくらいに、すくなくとも星々がきらめいている。こんなにたくさんの星、見たことがない……。

本当に、見惚れる。

「きれい……」

「だろ？」

晴人さんが、また白慢げに言つた。

他の人たちも空の様子に気付いたみたいで、部屋の中が少しざわつき始める。

私が星空を見入つていると、昴さんが隣で少し動いた。

その拍子に私の肩に昴さんの身体がとんつと当たる。反射的に、昴さんの方に顔を向けた。

いつの間にか、この暗さにも随分慣れてきていたから、昴さんの表情がうつすらと見える。

「あ、すまん」

昴さんは私の方を見て謝ると、また身体を動かしてぶつからない程度の位置に落ち着いた。

私はまた、空を仰ぎ見る。すると、天井のガラスに、赤い光の点が映つた。

「みなさん、これ、見えます？」

森田さんの声に合わせるよつこ、赤い点がガラスに円を描くように動く。

レーザーポインターだ。大学の授業で、先生がときどき使つてゐる  
のと同じだ。

「ええ

「見えますー」

「はーい」

口々にみなが肯定の言葉を発する。

「じゃあ、今見えてる星の説明をするね。知つてると、また違う楽しみ方もあると思うから」

森田さんはやう言い、ポインタを動かし始めた。

森田さんの声に呼応して、ポインタが、私たちのよく知ってる星座を囲むように動いた。

次いで、森田さんの声が聞こえてくる。

「あれはすぐわかるよね。オリオン座。ベルトとそれを囲むように四つの星がある。右手に棍棒、左手に毛皮を持っているから、本当はもう少し大きいけどね。

それと、その左下がおおいぬ座。その左上のこれがこいぬ座。この一匹の犬は、オリオンの獵犬って言われているんだ。

オリオンの右肩のベテルギウスと、おおいぬ座のシリウス、それとこいぬ座のプロキオンを結ぶ三角形が冬の大三角だね」説明と共に、ポインタが的確に動く。

私はその動きを見ながら、星と星を繋ぐ線を頭の中で描いた。それと一緒に、昔読んだ星座の本を思い出していた。

こんな風に、星を見上げるのって久しぶりだ。最後に見たの、いつだったかなあ。

森田さんは本当に星が好きみたいで、星座にも星の名前にもそれらにまつわる話にも詳しかった。

「オリオン座のベテルギウスはね、近い将来に超新星爆発を起こすって言われるんだよ」

森田さんの言葉に、そこには「えっ？」という声が上がる。

「なんなんスか？」

浅倉さんが尋ねる。河合さんも興味深げに言う。

「そういえば、そんな話、聞いたことあるなあ」

「星 자체がここ十五年で十五パーセントも収縮していっているっていう観測結果が出ているし、形も変わってきているらしいですね。早ければ一年以内に爆発するだろ?って予測している学者もいるんだよ」

「そうなんだ。へえ……。

「爆発したら、どうなるんです?」

昴さんが言つた。

「ううだ。そう言えばそうだ。どうなるんだろう? 気になる。」

森田さんは、ふふふと笑いながら答えた。

「さあて、どうなるんだろうねえ? それは僕も知りたいところですね。ちょっと調べたら、いろんな説があつたんだよ。爆発して数週間は夜も明るくなるとか、昼間は太陽が一つあるように見えるとか……」

「くえ」

「この件は、世界中の学者が注目することは確かだよ。肉眼で確認できるところでの大規模な超新星爆発なんて、生きているうちにお目にかかる方が奇跡なくらいだからね。僕も楽しみにしているんだ」

森田さんはとつとも楽しそうだ。

生きている間に超新星爆発が観測できるかもしれないってのは、きっとすごいことなんだと思つ。だけど。

「うーん、私としては、オリオン座がオリオン座じゃなくなっちゃうのは、ちょっと寂しいかな……。」

「親父、星の話してるのは本当に楽しそうだよなあ」

私の右隣から、晴人さんのぼやきが聞こえてきた。

その言い方がなんだかおかしくて、私は声を出さないことに気をつけつつ微笑んだ。

晴人の声は昴さんにも聞こえたみたいで、昴さんもくすりと笑う。

それと同時に、私が体重を預けるようにして床に付いていた左腕に、トン! と何かが触れた。

多分、昴さんの肩、だと思つんだけど。  
さつあと同じですぐに離れていくだろつと思つた私は、そのまま  
にする。  
でも。

……あれ？ 離れない？  
気付いてないのかな。

どうしよう、なんだか、落ち着かないんですね、けど。

そんな私をよそに、森田さんの説明はなおも途切れることなく続  
く。

「オリオンの左膝の星はリゲル。そして左手の先にある明るい星が  
アルデバラン。おうし座の一部だよ。おうし座の隅にほおつと見え  
るのがフレヤデス星団だね」

「オレの星や」

隣で、昴さんが呟いた。

「え？」

思わず、昴さんの方を向く。

昴さんは、首だけをこすりに向けていた。微笑んでいるのがわか  
る。

それくらい近くに、つまり私が思つていた以上に近くに昴さんの  
顔があつたのに驚いて、私の身体が強張つた。

でも、昴さんは私のそんな状態には気付かなかつたみたいだ。

「フレヤデス星団の和名、『すばる』やる？」

そう言つと、また星空を仰いだ。

ちよつと、ほつとする。

はあ、ビックリした。心臓に悪い……。

暗がりの中だけど、昴さんの表情がはつきり見えたもの。相当、  
近かつたんだよね？

今さらだけど、頬に熱を感じてくる。

うー。部屋が暗くてよかつた。明るかつたら、またからかわれち

やうもの。

それにしても、そうだ。そういえば、そうだ。  
ブレヤデス星団つて、すばるだ。

昴さんの名前、もしかして、ブレヤデス星団から取ったのかな。  
だけど、『オレの星』つて。ちょっと言いすぎ、かも……。  
昴さんの横顔をちらりと見て、私もまた、視線を夜空へ向けた。

なおも丁寧に説明を続けてくれる森田さんに向けてか、河合さんの声がする。

「大三角の上の一つある明るい星は何ですか？」

「あれはふたご座だよ。それぞれ、カストルとポルックスって言つんだ」

また赤いポインターが動き、一つの星の位置を教えてくれる。

「俺、ふたご座なんだよねー」

右隣から晴人さんの声が聞こえてきた。

「晴人つて、何月生まれなん?」

今度は、私を挟んで左側からの声。この関西弁はもちろん昴さんだ。

「六月」

晴人さんの答えに、私は目を丸くする。

星座が見える時期と、誕生星座つて、全然関連性がないんだ。ふうん。

「へー。星座が見える用つてわけじゃないのね」

同じことを思つたらしい武田さんの声が聞こえてくる。

森田さんが少し笑つて言つた。

「誕生星座つていうのは、元々はその人が生まれた時期に『太陽が存在している位置の星座』なんだよ」

「あ、そうなんですか」

「まあ、地球の公転が正確に三百六十五日つてわけじゃないから、

それもだんだんずれてきてしまつているだらうけどね。

ああ、ちょうどふたご座の星も紹介できだし、冬のダイヤモンドを教えておこづか

森田さんほそう言いながら、またポイントを動かした。

「冬のダイヤモンド?」

「初めて聞きます」

「大三角ほど有名じゃないからねえ。でも、覚えてしまえば見つけるのは簡単だよ。

おおいぬ座のシリウス、こいぬ座のプロキオン、ふたご座のポルツクスとカストル、ぎょしゃ座のカペラ、おうし座のアルデバラン、オリオン座のリゲル。この七つの星を線で結ぶとダイヤモンドの形になるだろう?」

「あ、ホントだ!」

武田さんが嬉しそうに言つた。

そんな風にして、楽しい時間はあつという間に過ぎていく。

その間ずっと、昴さんの肩は、優しく暖かく私に触れたままだつた。

ペペペペー・ペペペー・ペペペー・

ケータイにセットしていた目覚ましアラームが、今朝もまた鳴り始める。朝が来たんだ。

でも、

うー、眠いよー。もうちょっと寝てたい……。

確実に睡眠不足だ……。

止める人がいないからアラームは相変わらず鳴り続いている。仕方なく、私は腕を伸ばしてアラームを止めた。

ふう、ようやく静かになった。

もうちょっと寝つけてたいけど、起きなきや。遊びに来てるわけじゃない、お仕事しに来てるんだもん。働くなきや。

寝返りを打つて両手で目を擦る。

昨夜、森田さんのお宅から帰ってきたのは、もう日付を越えてからだった。その後お風呂に入つてお布団に入つたところまでいいんだけど、それからが大変だった。

なんだかよくわからないんだけど、なかなか寝付けなくて。

すごく綺麗な星空を見たせいで神経が高ぶっちゃったのかな。でも、本当にすごかつたんだもん。降つて来そうって思つくらい。

ケータイで時間を確認するのを我慢しつつ、何度も何度も寝返りを打つて……、気がついたら目覚ましがなっていた。

多分、少しばはれた、と思つ。うん、眠れたはず。そう思い込もう。

私はようやく身体を起しきり、お布団から這い出した。

昨日の朝はあんなにひどかつた筋肉痛も、少し和らいでる。少しだけどね。

雪の上で身体を使うのが、ちょっとは上手になつたのかもしれない。そうだったらいいな。もひゅうと滑らかにスラロームが滑れるようになればいいなって思うから。

昨日の朝の反省を活かして、今日はちゃんとパークーを着てから洗面所へと向かった。隣の部屋から音がしないところを見ると、昂さんはもう起きているみたいだ。

身支度をして厨房に行くと、もう調理を始めてるマスターと浩美さんがいた。

「おはようございます」

私が声をかけると、一人が私の方を見てニコニコと微笑んでくれた。

「おはよう、雪奈ちゃん」

「おはよう。昨夜眠れた？」

「それが、あんまり……」

私は苦笑いしながらシンクに立つて、サラダ用の野菜を水洗いし始めた。冷たい水に一気に目が覚める。

「やっぱりね。森田さんのお家から帰ってきたとき田がキラキラしてたから、あーこれはなかなか寝付けないだろうなって思つてたの。だから、起きて来てくれて吃驚しちゃった」

浩美さんはそう言って笑つた。

えつと、私、そんな風に思われたのかな？ 確かにここに来てからずっと、すごく楽しませていただいてるけど、一応、アルバイトに来てるつて自覚はあるんだけどな。

「本当にえらいよ、雪奈ちゃんは。昂なんてまだ起きてないもんなえ、昂さん、まだ起きてなかつたの？」

隣からまたたく音がしなかつたから、とっくに起きたんだと思つてた。

確かにいつもならこの時間は厨房で朝食の仕度を手伝つてゐるけど、いないのは、別のお仕事をしてゐるからかなあつて。

「まったく……。アイツの分の朝食作るの止めるか。働かざる者食うべからずつて言つしな」

マスターのぼやきに噴き出しそうになりながらも、手はしつかりと動かし続けた。

冷たいのを我慢して、水の張つたボウルに手を突つ込みながら野菜を洗う。真つ赤になつた手でザルに上げて水を切つて、食べやすい大きさに切つたらサラダボウルに移す。

そういうえば、いつの間にか、朝食のサラダ作りは私のお仕事になつてゐる気がする。

『任せてもらえてる』つていう気がして、なんだかちょっと嬉しい。マスターお手製のドレッシングをかけたら、サラダは出来上がりだ。

サラダを作り終えても、昂さんは起きてこなかつた。

もしかしたら、身体の具合でも悪くしてゐるのかな……？ まさか、ね。昨日まではあんなに元気だったもんね。

それでも不安を拭いきれない私に、マスターが苦く笑いながら言った。

「雪奈ちゃん、本当に悪いんだけど、昂を起こしてきてくれないかな」

「え？ エエ、いいですけど……？」

もうちょっとしたらお客様への給仕を始めなきゃいけないんだけど、いいのかな。

そうは思いながらも、手拭いて厨房の出口へと向かう。

「悪いね。昂が起きたらすぐ戻つてきてね。あ、なかなか起きないようだつたら蹴つ飛ばしてくれといいか」

火のついたコンロの前で、マスターが脚で蹴る真似をする。浩美さんはその隣でくすくす笑つていた。

相変わらず手厳しいな。

私は苦笑しながら頷いて、昂さんの部屋へと向かった。

私の使つてゐる部屋のお隣が、昂さんが寝泊りしていいる部屋だ。寝泊りと言つのは本当にそのままで、寝るとき以外、昂さんはペンションのお仕事を手伝つているか雪山にいるかのどちらかしかなつて言えるくらいに、あんまり部屋を利用していない。

部屋の前に立つと、私は扉をノックした。

「昂さん、起きてください。朝ですよ？」

予想はしていたけど、中から返事はない。

私はもう一度ノックした。やっぱり返事どころか人の動く気配すらない。

うーん……やっぱり直接起こなきやダメかなあ。もちろん蹴り飛ばしたりはしないけど。でも、起きてもらわなきや困るし……。

「昂さん」

ずーっとノックしてゐるにやっぱり何も反応がない。ちょっと虚しくなつてしまひやつた、かも。

「開けちゃいますよー」

私はノブを回して、昂さんの部屋のドアを開けた。

昴さんの部屋の中はまだ暗かった。とにかくカーテンを開けよう。

「えっと、失礼します……」

小さな声でそう言いながら部屋のに踏み込み、昴さんを踏まないよつに忍び足で回り込んで窓へとそつと近づく。

その途中で、昴さんを起こしに来たのに何故か音が鳴らないよう気に附いている自分に気が付いて、なんだか笑ってしまった。カーテンをサッと勢いよく開けると、光が部屋に射し込んだ。

「うん……？ な……んや？」

部屋の中央に敷かれた布団の中から、昴さんの寝ぼけた掠れ声が聞こえてきた。

私は振り返って、お布団の脇にしゃがみ込んだ。

眉間に皺を寄せる昴さんが、なんだか少し可愛く思えてしまう。

「昴さん、朝です。起きてください」

胸の辺りと思われる付近を叩きながら起こしてみる。

昴さんが薄く目を開けて私を認め、また目を閉じた。

「うー……。何やの……？」

「昴さん、朝です。朝食作るの手伝ってください」

「えー？ まだ朝ちゃうやん……。もうちよつと……メッチャ眠い

……」

「ちよつと、しつかりしてくださーよつ！」

昴さんは頭からお布団を被つてしまつた。

もしかして、本当に蹴つ飛ばさないとダメ、かも？

「もーつ！ マスターも浩美さんも、もうとっくに起きてるんですからつ！」

私が布団を揺すりながら大声で叫ぶと、昴さんは布団から顔を出

して私をもう一度見た。

「ん……あれ？」 雪奈？」「

「やうです、雪奈ですっ」

息巻く私に対し、昂さんが両手で田を擦りて寝起きのぼんやりとした顔ながらにこいつと微笑んだ。

はあ。ようやく起きてくれたみたい。

「おはよう」やむこめす

「おはようから。なんや、雪奈、オレを襲いに来たんか？」  
ツ！

昂さんの言葉に私は真っ赤になる。

ななな、なんてこと言つんですかっ！

昂さんつてばつつ！

もー怒つたつ！

昂さんが私をからかっているのがなんか悔しくて、私は立ち上がると布団を両手で掴んで上へと引つ張った。

「違いますよっ！ マスターに言われてお越しに来たんですっ！」

起きないなら、お布団剥いじゅこいますっ！」

「わッ、アカン！ ちょお待ち！ わかつた、起きるつて、起きるさかい！」

何故か途端にものすじく慌て始めた昂さんは、上体を跳ね起こすと必死の形相で私が引っ張る掛け布団を自分の方へと引き戻した。さすがに私の力なんかじや男の人には勝てないから、結局昂さんはコタツに入るみたいな感じでお布団の中に残ってしまった。

仕方なく、私は布団から手を離した。

一応起きてくれたみたいだし、まさか今から一度寝はしないよね、多分。

ルームウーハらしいトレーナー姿の昂さんは、珍しく頬が赤くなっている。おまけに私の方を見ようとしない。  
なんでだろ？

私が不思議に思つて昂さんを見ていると、昂さんが言つにくそう

に頬を指で搔きながら口を開いた。

「あんな、雪奈。着替えるさかい、先行つといてくれると嬉しいんやけど……」

「……あ、すみません」

私は口に手を当てて、慌てて昴さんを飛び越えると厨房へと走った。

「雪奈ちゃん、昴君、ちゃんと起きた？」

厨房に戻ると、浩美さんが私に訊ねてきた。

「え？　ええ、なんとか……」

息を整えつつ答える私を見て、マスターが面白そうに笑う。

「へえ、あの寝覚めの悪いアイツがもう起きたつて？」

「そりゃ、大介さんが起こすよりも雪奈ちゃんみたいに可愛い子が起こしに行つた方が、昴君も田が覚めるわよ」

「そりゃそりゃ。じゃあこれから雪奈ちゃんがいる間は、昴を起こす役は雪奈ちゃんに任せるとかなあ」

ええ？　あの大変なのを、またやるの？

あの、えつと、できれば遠慮したいな……なんて思つてゐることは言えず、私は笑つて誤魔化することにした。

マスターも浩美さんも、そんな私の気持ちをわかつてゐるのかいないのか、顔を見合させて笑つてるし。

そう言えば、男の子の部屋に入るのつて初めてだ。思つてたよりも綺麗だつたな。荷物も全然なかつたし。まああの部屋は昴さんが普段から使つてる部屋つてわけじゃないんだけど。

ん？　よくよく考えてみたら、男の子の部屋に一人で入るのつてもしかしてちょっとキケンだつた？

典子ちゃんが言つてた氣がする。男はみんな狼なんだから氣をつけ過ぎるくらいに気をつけるつて。誰彼構わず笑顔振り撒いたり、ちょっと仲良くなつたからつて部屋に呼んだり行つたりしちゃダメ

だつて。雪奈は特に気をつけなさいって。

最後の一言だけは余分だよつてそのときせ典子ちゃんに言つたけど、私、何の警戒もなく昴さんのお部屋に行つちやつてた……。

うー、やっぱり私、典子ちゃんが言つようじ、いろいろと自覚が足りないのかなあ？

「うーん……。

「うん、そんなことない、はず。うん。そう、そうよ！　だいたい、今朝のはマスターに頼まれたから行つたんだもん。

そうよ。だいたい、マスターもキケンだつて思うなら私にそんなこと頼まないはずだし。

それに、相手は昴さんだし。昴さんはとっても優しいもの。

だから、大丈夫。うん。

「何を一人で百面相してるん？」

「すっ、昴さん！」

私が自分を納得させるため一人うんうん頷いていたら、突然昴さんには声をかけられた。

吃驚して、文字通り飛び上がつてしまひ。

「うー、やっぱり昴さんつて、心臓に悪い……。

「おはようさん」

厨房に入ってきた昴さんは、もういつも通りの昴さんだった。

「遅いぞ、昴」

マスターがちょっと厳しく言つと、昴さんはマスターと浩美さんの一人の前まで行つて頭を下げて謝つた。

それを見た私はちょっと驚く。

そうか。この一人つて、叔父と甥であると同時に、（タダ働きとは言え）雇い主と労務者でもあるんだ……。

「ん。じゃあ手伝え」

マスターが言つと昴さんがすぐに動き始める。

その昴さんにマスターが付け加えた。

「あ、次やつたら、また雪奈ちゃんに起しに来つてもううからな

ええつ？ 決定事項なの？

私の頬が引き攣つてしまふ。

昴さんは私の方を見ると、両手を顔の前で合わせ声を出さず、「堪忍な」と口を動かしてウインクした。

ペンションのお仕事を終えた後、私と昴さんはまたゲレンデへと向かった。

ボードも三田田ともなると随分慣れたもので、今日は昴さんの助けなく全部自分一人で準備できた。うん、なんだかちょっと満足。ペンションからゲレンデまでボードを持ったままでも、随分早く歩けるようになつたし。

今日は河合さんたちとは別行動。

ゲレンデで何度も見かけたけど、どちらかがリフトの上だつたり、コースが違つてたりとタイミングが合わないままだったんだよね。

昨日は本当に偶然だつたんだなって思っちゃう。

昨日がとっても楽しかったから、一緒に滑れなかつたのはちょっと残念だけど、でも、河合さんたちはあの四人の仲間で楽しみに来てるんだもんね。

それに、昴さんと一人だけつていつもも変に気を遣わなくてよくて、砕けた楽しげがあるし。

と言うワケで、今日は昨日河合さんに教えてもらつてちょっと滑れるようになつたスラロームの猛特訓を昴さんに受けました。

「あーホラ、雪奈、顔上げえつて。田はオレの方や、オレの方」

昴さんが裏コノハで滑りながら器用に私を先導してくれる。

言われた通りに昴さんの方を見ようとすると顔をちょっと上げなきやいけないんだけど、まだスラロームに慣れてないから私の視線はついつい真下にあるボードの先の雪を見ちゃう。

今日昴さんに注意されてようやくわかつたんだけど、足元を見な

いで滑るのってなんか怖いですっ！

昴さんは昴さんで、そんな私を見て楽しんでいるのか、ずっと笑つてゐし。

「ほら、雪奈、いわちやつて」

昴さんがまた私を呼んだ。

その弾んだ声がなんだかずいぶん恨めしくて、私は唇を尖らせながらちょっと睨むみたいにして昴さんの方を見た。

昴さんが声に出して笑う。

「そんなカワエエ顔しても許さくんよ」

うー……。

なんか、悔しい、かも。

私はきゅっと唇を結び直すと、昴さんを睨むように見つめたまま滑るスピードを上げた。

昴さんの表情から一瞬笑みが消え、すぐに楽しむような挑戦的な表情に変わった。

もう少しで追いつけそつだつたのに、昴さんも速度を上げたせいでまた追いつけなくなる。

昴さんは裏口ノハのままなのに。

そうやって追いかけっこ(?)をしながらしばらくコースを下つて、ならかな開けた場所に差し掛かったところで昴さんがボードを止めた。

私もその場所まで一気に滑り降りる。  
気がついたら、今までに出したことがないくらいのスピードになつていた。

あ、ちょっとヤバイ、かも？

私は膝に力を入れて重心を落としてブレーキをかけた。ターンして雪煙を舞わせながら昴さんの田の前に止まる。

つもりだつたんだけど。

「あつ」

失速し切れていなかつたらしく私はバランスを崩した。

そのまま、田の前にいる昴さんに体当たりするみたいにして、私は前めりに倒れそうになる。

冷たさと痛みを覚悟して、私は咄嗟に田を瞑った。

昴さん、巻き添え！めんなさい！

「おつと」

「どんっ」という音がして、身体が止まった。

「……あれ？ 転ばなかつた？」

不思議に思いながらそつと田を開けると、田の前にあつたのは、昴さんの腕。私が完全に身体を預けちゃってるのは昴さんの胸だ。昴さんが、私の身体を抱き止めてくれていた。

ああっ、「ごめんなさい昴さん。

私は慌てて身体を起こそうとした。

だけど、ぎゅっと抱きしめるみたいに、昴さんの腕が私の背中に回されてくる。すく優しいのにとても力強く、腕も自由に動かせない。

「うう、どうしよう。

え、ちょっと待つて。

なんか、これって、完全に、だ、だだ、抱きしめられてる……状態、だよね？

うそ、つ！ な、なんか、急にドキドキしてきたんですけどー！ 私と昴さんの今の状態を傍目から見たらって想像したら、きっとすっごい顔が赤くなるんだから、想像しちゃダメよ、雪奈。

とつぐに手遅れだけど、私は自分に言い聞かせた。そしてその体制のままやつとの思いで言葉を紡いだ。

「あ、あの、昴さん。動けない、です……」

「ああ。そりや堪忍。大丈夫やつた？」

昴さんが私の肩を持つて身体を起こしてくれる。

「ええ。ありがとうございます」

「どうつてことないで。ちゅうか、役得やな」

昴さんは笑っていたけど、私はますます赤くなるしかない。

そんな私に追い討ちをかけるよう」、昂さんが言った。

「せやけどな、雪奈。今朝といい今といい、オレを襲いたいっつちゅう気持ちはわかつたけど、できれば場所と時間を選んでくれへん?」  
なつ……?

も、もひつ、昂さんつてば!

周囲の雪が溶けそうなくらい真っ赤になつた私の顔を見てけたけたと笑う昂さんを放つて、私は一人またリフトの列に向かって斜面を滑り始めた。

同じリフトに乗りながら、昂さんは上機嫌で私の頭をぽんぽんと優しく撫でた。

「ま、たまにはああこう」ともあるけど、雪奈、随分上達したやん」「でも、やつぱり顔上げるのって怖いです。ボードが雪に取られちゃいそつで」

「遠くから先に見とくねん。あの辺でカーブしよ、とか、あそこでターンしよとか」

「難しいです……」

「せやから、オレが先に滑つてるんやんか。そしたら雪奈はオレのこと見つめてたらええだけやろ?」

見つめるつて……そんな言い方されると、どうしたらいいのかわかんないじゃないですか。

私が答えられずにいるど、昂さんは肩を竦めて頬を指で搔いた。

「今だけやぞ、タダでこんなにオレのこといくらでも見つめられるんは……」

えつ? 何ですかそれ?

「普段はお金取るつてコトですか?」

昂さんに私が聞いてみると、昂さんは悪戯っぽくニヤッと笑つた。  
「つ、またからかわれたのかしら、私。

昂さんから視線を外すと、ちょうど昨日見たハーフパイプが視界

に入った。

昂さんもそれに気が付いたらじっく、そつちの方へと顔を向ける。

今日は今乗っているソフトで最後にする予定。そろそろペンショ  
ンに戻つて夕方のお仕事をしなくちゃいけない時間。結構、ギリギリ  
になつちゃつたから、終わつたら大急ぎで戻つて、マスターと浩美  
さんのお手伝いをしなくつちや。お客様の夕食の準備が間に合わな  
くなつちやう。

今日最後の一本かあ……。

うん。よし、決めたつ。

私はやっぱり真剣な表情でハーフパイプを眺める昂さんの横顔を  
見ながら、にっこりと微笑んだ。

「昴さん、あつち、行きませんか？」

中級者コースを中腹まで滑り降りたとき、私は言ひてみた。

私たちは、コースの隅でちよつと休憩している。私は膝を着いて、昴さんはお尻を着けて。隣同士で。

私が指差す先には、さつき見た、ハーフパイプとジャンプ台のあるところへ行ける林道がある。

「ええけど……」昴さんが顔を曇らせ、言葉を濁した。「あつち行つても、ハーフパイプとジャンプ台があるだけやし、雪奈は面白ないよ？」

『雪奈は』って、私だけに限定した言い方に、やつぱり、昴さんはあつちで滑りたいんだって確信した。

「そんなことないです」私は言つた。「昴さんが滑るの、見てみたいですよ？」

昴さんは一瞬驚いた顔をして、すぐにクスリと笑つた。

「雪奈がそないに言つなら行こか

「はい」

私は嬉しくなつて、笑顔で頷いた。昴さんはまたにっこしながら私の頭をぽふぽふと叩く。

「せやけどな、オレが滑るん見たら、雪奈、きつとオレに惚れてまうで？」

「え？ なんですか？」

「なんで？ オレの滑りが、めちゃめちゃカッコええとかいに決まってるやん」

あまりに自信満々に言つ切る昴さんに、私は噴き出した。

「あははは、ちよつ、あはは、昴さん、お腹痛い……」

「あ、笑うたな？ ゼーっといたいに惚れさせたる！ 覚悟しあきや！」  
昴さんはそう言つと立ち上がつた。そして、さつき私が指差した  
林道の方へと板を向ける。私もそれに習つて、昴さんの後に続いた。

ハーフパイプとジャンプ台の前に着いた。結構たくさんの人人が、  
それぞれのスタート位置に列を作つている。  
斜面の上から見ると、リフトから見るよりもすづく怖いんですけど。

ねえ、昴さん、本当にここを滑るの？

「あー、思ったより混んどるなあ。しゃーない。時間ないし、ジャンプ台だけにしどこ」

昴さんはゴーグルを上げて、私の方を振り返つた。

「雪奈は先に下りつて待つといでんか。ホレ、あっちの脇に迂回ロ  
ースあるやろ？ ジャンプ台は人の回転が速いとかい、すぐやわ。  
見逃したらあかんで？」

昴さんが示したのは、ハーフパイプの脇にある通路。さつき通つ  
て来た林道と同じくらいの幅だから、私でも楽に滑れる。

「はい」

私は頷いて、先にジャンプ台の着地地点の脇へと向かつた。  
邪魔にならないように隅に寄つて、斜面の方に身体を向けて  
から新雪に膝を着く。ゴーグルをしたままじや見づらかつたから、  
おでこの上に上げた。

雲ひとつない、高く青い空。

私の下に、斜面に沿つて広がる白い大地。  
本当に、綺麗。

私は、自分の少し後方にある小高く白い丘を見上げた。  
太陽の光がまぶしくて、私は少し、目を細くした。やつぱり、ゴ  
ーグルしようかな。

「ねえ、お姉さん、一人？」

しばらく待つていると、目の前に人が来た。

誰かの見学だらうと思つた私は、その人の方を確認もせずに丘の上を見つめる。

昴さん、未だ来ないな……。

「ねえ、お姉さん。聞こえてる？」

「え？ 私に言つてるの？」

ようやく、その目の前の人を見た。あ。『人』だと思つてたけど『人たち』だ。私と同じ歳くらいの男の人が一人。ボーダーさんらしい。私に目線を合わせるように、ボードを着けたまましゃがみこんで私を見ていた。

「え？」

「あ、ようやくこつち見た。ねえ、君、一人？」

「え？ えつと、どうしよう……。」

「一人なんだつたら、オレたちと一緒に滑らない？」

「あ、あの……」

「ん？」

「私、昴さんを、待つてるんです。」

そう言いたいのに、上手く言葉にならなくて。

ちょっととは人見知りなところが治つたのかなつて思つてたけど、思い過ごしだつたみたい。

答えなきや。ちゃんと、断らなきや。

「行かない？」

男の人の一人がそう言いながら私の方に手を差し出した。

近づいてきた手に、思わずびくんつてなる。

そうなつた自分にも驚いたし、相手の男の人も驚いた顔をした。そのとき。

「あれ？ 雪奈ちゃん？」

予想外の場所から名前を呼ばれて、私はその声のした方を見た。

ちょうどハーフパイプを滑り降りてきたボーダーさんだ。私たちのいる方にスケーティングで近づきながら、ゴーグルを外した。

「あ……」

晴人さん！

晴人は昨夜とまったく同じ人懐っこい笑顔で、私の隣まで来ると、同じように膝を付いた。

「俺の滑り、見てくれたの？」

「あ、えっとそう言うわけじゃ……」

嬉しそうにそう言った晴人は、私の目の前にいる一人のことなんてまったく見えてないみたいだ。

晴人は私が答える前にさらに質問を重ねた。

「つて言うか、昴は？ 一緒にじゃないの？」

「あ、それなら……」

私が晴人に説明しようとしたそのとき、ビヨメキが聞こえて来た。

咄嗟にその方向へ視線を向ける。ジャンプ台の方だ。

真っ白い丘の上から、何かが勢いよく飛び出した人だ。

グレーと赤のウェアが見える。

私は息を呑んだ。

わかる。そう、あれは、昴さんだ。

青い空に、空高く舞い上がった昴さんの姿だけが映える。

昴さんと一緒に飛び散った雪が、太陽の光を反射してきらきらと輝く。

昴さんが宙で踊る。

空中で回転し、身体を反らせ、舞い降りてくる。

その背中に、私は、翼を見た気がした。

田を、奪われる。

心まで、奪われる。

ああ、『めんなさい、昂さん。私、さつきは大笑いしちゃつたけ  
ど。』

でも私、きっと。

昂さんのこと。

好きに、なつちゃつたんだ。

雪の上にふわりと着地した瞬間、昂さんの翼が消えた。同時に我に返る。

いけない、私、完全に見惚れてた……。

昂さんはそのまま私の方へ真っ直ぐに向かつて來た。そして、また、直前で身体をくねらせてブレーキをかける。ふわりと粉雪が舞い上がった。

「お待たせ、雪奈。どうや、ちゃんと見とつたか？」そう言って、昂さんはゴーグルを上げた。「ん？ なんやなんや？ 雪奈、友達できたんか？」

昂さんが私と晴人さん、そしてその脇に座る男の人たちを目に留めて言った。

そこで私もようやく、さつきこの男の人たちに声をかけられたってことを思い出した。

「あ、あの……」

私が上手く説明できずにいるど、男の人たちの方が口を出してくれた。

「あ、俺たちはこの子が一人でなんか寂しそうだったから、声かけただけッス」

「ああ、そーやつたんや」「まあ、知り合いもツレさんも來たみたいだし、俺たちはもあ行きますわ」

「お姉さん、じゃあね」

男の人たちはそう言つと、私に手を振りながら滑り去つて行つた。

残された私と昂さん、晴人さんの間に、妙な間が流れた。

その沈黙を破ったのは、普段より幾分か低い昴さんの声。

「晴人も来てたんやな」

「ああ、ツレとな。あっちでハーフパイプやってる。滑り終わつた  
ところで、偶然、雪奈ちゃんを見つけたからさ」

そう言いながら、晴人は立ち上がつた。

昴さんは誰かがジグザクに滑つてるハーフパイプの方を眺めた。

「ああ、そなん」

「昴もやって行かねえ？」

晴人が誘つてくれたけど、昴さんは残念そうに笑いながら首  
を横に振つた。

「面白そうやけど、そろそろペンションに戻らなあかんねん」

「あ、そつか。そろそろ夕食準備か」

「そやねん」

「雪奈ちゃんも……だよね？」

「ええ」

晴人さんつてば、なんでそんな当たり前のこと聞くんだろう？

そのとき、晴人さんを呼ぶ声が聞こえてきた。あ、向こうの方に  
腕を振つてるボーダーさんがいる。あの人が晴人さんのツレさんか  
な？

「じゃ、俺行くわ。雪奈ちゃん、またね」

晴人は滑り去ろうとして、止まつた。

「あー……」晴人さんが、首だけ振り返る。「昴、さつきの、すげ  
え技だつたな」

「おおきに。かなり気合入れてん」

昴さんがっこり笑う。晴人さんも少し笑い、去つて行つた。

晴人さんがいなくなると、昴さんは大きくため息をつき、私と向  
かい合わせになると膝を着いた。

「なあ、雪奈。聞いてもええか？」

「なんですか？」

とは言つたものの、「惚れた？」って聞かれたらいどうじよつ。

ハイ、惚れました。なんて言えないし……。

私がそんなことを考えていると、昴さんが続けた。

「あんな？ 雪奈、今までに彼氏いたことある？」

「えつ？」

「ちょっと！ なんですか、その質問？！ 何が聞きたいんですか？」

ええ、確かに私は今まで彼氏いたことないですよ。

でも、たった今『好きだ』って自覚しちゃった人に、そんなこと聞かれちゃうのって、ちょっとヒドくないですか？ って、昴さんに言えないんだけど。

「あー、もあええわ」昴さんが言つた。「今の表情でだいたい答えわかったし」

「！？」

もしかして、顔に出てた？

うろたえる私を余所に、昴さんは立ち上がり、ゴーグルをかけた。「ほな雪奈、オレらもそろそろ行こか。急がな、大介兄ちゃんにまた怒られそうや。寝坊した上に遅刻はマズイやろ」

「え？ あ、ええ……」

昴さんが手を差し出してくれる。私もゴーグルを着けると、それを借りて立ち上がった。

「雪奈が先な。こつから一番下までノンストップで行くでー！」

「は、ハイ！」

昴さんに促されて、私は滑り始めた。ジャンプ台からゲレンデの一番下までは、緩やかで平坦な斜面が続いている。私がスラロームで滑つても転ばずに済んだ。

下に着くと、すぐにボードを外す。ブーツを緩めて歩きやすくした後、昴さんに教えてもらった通りに、私は設置してあるエアスプレーで板に着いた雪を払つた。その後、たくさん転んだせいで身体

に着いた雪をばさばさと払う。

あらかた落ちたところで、板を担いで、ベンシジョンへと歩き始めた。

あれから、昴さんがちつとも話さない。会話はエアスプレーを手渡してくれたときの「はい」と「いい」一言だけ。前を歩く広い背中が、怒ってるようにも見えた。

私、何かしたかな?

ちよつと考へて、すぐに気持ちが萎えた。

だめだ。思い当たる節があり過ぎる……。

私は小さくため息をついた。

とにかく、謝る。今ままじゃ、なんか気まずいもの。

「あ、あの。昴さん」

昴さんが振り返った。向かい合つ。

「ん? 雪奈、どうかしたん? あ、歩くん卑すぎたんか?」

「いえ、やうじやなくて。あの、『めんなさい』……」

「は?」

……聞。

「はあ? ちよお待ひ。雪奈、何し謝つとみのん?」

「えつと……いろこひ?」

正直に言つと、理由の可能性があり過ぎてよくわかんないけど、なんか謝つておいた方がいい気がして。

昴さんが眉間に皺を寄せた。

「雪奈、謝る理由もわからんのこ、謝つたらアカンよ」

昴さんの言葉に、私は俯いた。

「でも、昴さん、怒つてませんか?」

「なんで?」

「なんとなく、そんな気がして」

私の頭に、昴さんの手が置かれた。また、ぽんぽんって、私をやすように叩く。

「そんなことないで。どっちか言つたら、オレ自身に怒つとる感じやな」

私は顔を上げた。昴さんが、苦笑している。

「雪奈に免疫がないつちゅうんは、初めつからわかつとつたことやもんな。忘れてたオレが悪いねん」

免疫……？ つて何だろう？

そう言えば、大学で恵美ちゃんにも同じよつなこと言われた気がする。

よくはわからないけど、多分私には、何かが足りないってことなんだらうな。

「ま、要らん心配せんとき。雪奈は何も悪いことしてへん。せやろ？」

私はきゅっと唇を結んだ。

違ひの。もうじやなくて。私は……昴さんに嫌われたくないんですけど。

表情が晴れない私を見て、昴さんは心配そうな顔をした。  
ほら、また。私、昴さんに迷惑かけてる。心配させたりして。  
昴さんはボードの端を雪の上に着け、自分に立てかけた。そして心配そうな表情のまま、私の方へと両腕を伸ばし 私の両頬を指でふにって摘んだ。

「 ふつ！ あははは、雪奈、めっちゃ変な顔〜〜」  
「 つー？」

私が驚いて後ずさると、昴さんの指は簡単に外れた。

「あははは。おおきに。ええモン見せてもらたわ」  
昴さんはそつまつと、再びボードを抱き上げた。

「ちょつ……昴さん！」

「怒る元氣があるんやつたら大丈夫やな。さ、行くでー」

昴さんはやりと笑い、またペンションの方へと歩き始めた。



お風呂上りの乾かした髪を丁寧にブラッシングしながら、私は姿に映る自分の姿を確認した。

まだちょっと髪が落ち着かないけど、仕方ないよね。そんなことを考えながら、私はヘアブラシを化粧ポーチの中に片付けた。

夕食の後片付けを終えた直後の、夜の自由時間。

いつもより随分早いお風呂も、下着を着けた上から着ているパジャマも、なんだかとっても落ち着かない。だけど、今から過ごす時間のことを考えると、絶対楽しくなるだろうなっていう予感からちよつとドキドキもある。

今から何をするかというと　話は夕食の時間まで遡る。夕食と言つても、私や昴さんのじゃなくてお客様の方の夕食なんだけど。

私が夕食の給仕をしていたとき、河合さんたちのテーブルの前で呼び止められた。

「あ、雪奈ちゃん

「はい」

振り返ると、永野さんが窺うように私の方を向いていた。私はてっきり、お箸を落としたとか飲み物が欲しいとかそんな用だと思ったんだけど、続いた永野さんの言葉はまったく予想してなかつたものだった。

「あのね、今夜、私たちでパジャマ・パーティーをしようって言つてるんだけど、雪奈ちゃんも参加しない？」

「え？」

パジャマ・パーティー？

意味がわからずにうろたえる私を見かねたのか、河合さんが優しく微笑みながら言つた。

「ただの飲み会だよ。せっかくこうやって泊まりに来てるんだから、いつもとちょっと趣向を変えて、パジャマでやろうかつて話になつたんだ」

ああ、やうこいとか。

「昂君も一緒に、どう？」

「えつと、あの……」

せっかくみなさんでいらっしゃるのに、部外者が入つたりしていいのかな。

そりや、河合さんたちと週刊す時間つてどつても楽しいけれど。それに昂さんの予定もあるし……（こや、昂さんと一緒に週刊せるのはもちろん嬉しいんだけど）。

私がそんな内容のことと言つと、武田さんが悪戯っぽく笑つた。  
「雪奈ちゃんが参加するって言つたら、夜遊びする妹さんが心配だ  
うつから昂君も來ると思つた」

武田さんはきっと悪気なんてまつたくないんだろうけど、えつと、あの、す、好き…だなつて思つちゃつた人が自分のことを『妹』としか思つてないつて言われたような気がして、胸の奥の方がちくつと痛んだ。

昂さんと相談しますつて答えてその場を去つた私は、昂さんを探した。

自分の気持ちを自覚しちゃつた後も、今までどおり上手く話せるかなつてすつゝく緊張してたけど、昂さんは（もちろん）今までと同じように接してくれたし、私も自然体で話せたから実は安心してたりする。

昂さんにお誘いを受けたことを告げると、昂さんは指で頬を搔いた。

「へえ、パジャマ・パーティーなあ……。雪奈は参加するん?」「え? ええ、そうしようかなって…思つてますけど……」

ちょっと誓約した『初めてのことでも挑戦する』つていうのとは違うかもしぬないけど、向こうから誘つてくださつたわけだし、チヤンスがあるなら経験してみたいから。

「ほんなら、オレも一緒に行こかな。心配やし」

心配、かあ。武田さんの言つた通り、私はやっぱり『妹』なのかな。

憮然とする私に、昴さんはさらに追い討ちをかけるよつて言つた。「あーそや。参加するなら、ちゃんとパークーくらい着いや?」「いつ、言われなくともそれくらいわかつてますつー。」

昨日の朝のことだつてわかつた私のふくれつ面を見て、昴さんはお腹を抱えて笑てくれたのでした……。

そんなわけで、身支度を終えてラウンジに行くと、武田さんと永野さんが出迎えてくれた。

「あ、来た来た」

武田さんが嬉しそうに手招きしてくれる。

ラウンジに敷かれた絨毯の上に一人とも座つてゐる。その前に、トランプの箱が置いてあつた。

でも、どう見ても人数が足りない。昴さんも河合さんも浅倉さんもいなかつた。

おかしいなあ。私がドライバーを使つていたときに、昴さんが先に行くからつて声をかけてくれたんだけど。

「あの、昴さん、先にいらしてませんでした?」

私が聞くと、武田さんが意味ありげににんまりと笑つた。その表情に気付かなかつたらしい永野さんが、隣から答えてくれる。

「ああ、あの三人なら、お酒買いに行つたわよ」

「え?」

あ、そういえば河合さん「飲み会」って言つてたつけ。

「未成年なんだけど……。」

「何カリクエストがあるなら、早めに連絡した方がいいよ」

私の表情に気付いたらしい永野さんが言つてくれる。

そうだ。そういえば、私、昂さんにケータイ番号教えてもらつてたんだつけ。

私は一人に招かれるまま絨毯に座り、ケータイを操作した。

電話帳から昂さんの名前を検索して発信のボタンを押す。

ルルルルルル、ルルルルルル、ルルルルルル……

『　はい』

何度かのコールの後、電話の向こうから聞こえてきたのは、昂さんの声じゃなかつた。この声は……。

「え？ 河合さん？」

おかしいな、ちゃんと昂さんにかけたはずなのに。私、電話かける相手間違えたのかな。

『ああ、ごめんね。昂君に運転してもらつてるものだから。代わりに僕が取つたんだ。どうしたの？』

「あ、そうか。運転してたら、ケータイに出られないもんね。」

『うん。あと十分くらいかな』

あ、遅かつたみたい……。仕方ないよね。自分で紅茶とかコーヒー作つてそれをいただこう。

「そうですか。ならないんです。気をつけて帰つてきてくださいね」私が電話を切ろうとすると、ケータイの向こうから河合さんの声が聞こえてきた。

『　あ、雪奈さん、ちょっと待つて。昂君が……』

昂さんが？

ケータイから河合さんと昂さんのぐぐもつた声が聞こえてきた。

河合さんが電話の口を押さえて昂さんと何か話してゐみたいだ。しばらくして、河合さんがまた電話に出た。

『えっとね、昂君が、雪奈さんの分は桃のジュースと葡萄のジュースでよかつたかって聞いてるんだけど』

昂さん、私がまだ誕生日を迎えてないつて知つてゐるんだ。  
マスターか浩美さんから聞いたのかも。  
何だかとつても暖かい気持ちになつて、私は笑顔で頷いた。

好きになると、その人がどんな些細なことでも自分のことを知つてくれてるつてわかるだけで、こんなにも嬉しくなるんだ。  
学校で秋江ちゃんがよく「あのね、彼がね」つて嬉しそうに話してくれた理由がわかつた気がする。

戻ってきた昴さんたちがパジャマに着替えてから、パジャマ・パーティーが始まった。

武田さんは紺色の地に白い水玉模様のパジャマ、永野さんは上が薄いグレーと白のボーダーで下はグレー一色だ。河合さんはチエック柄だし、浅倉さんは黒、昴さんはグレーのスウェット、そして私は薄い桃色のパジャマだ。

パジャマって意外といろんなデザインがあるんだ。

みんなで円になつて飲み物や食べ物を広げる。今すぐ飲まない分は、厨房の冷蔵庫の隅っこをお借りして冷やしておいた。

食べ物を入れるお皿と飲み物を入れるコップも、一緒に厨房のものをお借りすることにした。マスターにはあらかじめ断りを入れてあるし、もちろん後でちゃんと洗つておくつもりだ。

「おい、永野」

不意に浅倉さんの声がした。私の隣に居た永野さんが顔を上げ、飛んできた何かを咄嗟に顔の前でキャッチする。何かと思ったら、ポテトチップスの袋だった。

「ちょっと、浅倉！ 危ないじゃない。ジュース零れたらどうするのよ？」

永野さんが怒ったように言つたけど浅倉さんは笑つている。その手にはもう半分ほどになつたビールのコップがあつた。

この二人、本当にお似合いのかップルに見えるんだけどな。でも、お付き合いしているわけじゃないみたいだし……なんでだろう？ それにしても、浅倉さんって笑うと子供みたいだ。昴さんといい

勝負かも。

私がほおつとせんなことを考へていたら、武田さんに「これお願  
い」とトランプを託された。

飲みながらトランプ大会をするらしい。何のゲームするんだね？  
私、『七並べ』とか『ババ抜き』くらいしかルールを知らない  
んだけど、大丈夫かな。

「ここ、ええか？」

昴さんが私の返答を待たずして永野さんと反対側の私の隣に座る。  
そして腕を伸ばすと私の手からトランプをせりと奪つた。

「あ……」

一瞬だけ手が触れて、どきりとする。昴さんは気付かなかつた…  
…よね？

確認するよついで昴さんを窺つてみたけど、やつぱり気付いてない  
みたい。大きな手で、すじく手際よくトランプを切つている。さつ  
と、私がやるともたもたしけりつてわかつたんだろうな。

昴さんの手付きを感心して見てたら、河合さんに声を掛けられた。

「雪奈さん、『大富豪』ってゲーム知つてる？」

「え？ いえ……。聞いたことあるんですけど」

「そうかあ。どうしようかな。口で教えるよりも実際にやりながら  
の方がわかりやすいよね」

「あー。ほんなら、雪奈が慣れるまでオレとペアでやりましょか？」  
困り顔に見えない表情で困つたと書つ河合さんに、切り終わつた  
カードを整えながら昴さんが言つた。

「それはいい考えだ。それなら雪奈さんも楽しめるしね。雪奈さん、  
それでいい？」

「えつ？ あ、はい……」

条件反射みたいに答えちゃつたけど……。昴さんとペアがあ。嬉  
しいような、恥ずかしいような。変に意識しなきや大丈夫、だよね、  
きっと。

昴さんが切り終えたカードをみんなに配つてこぐ。永野さんと武

田さんはカードが手元に飛んでくる度に手に取つて眺めていたし、浅倉さんと河合さんはビールを片手に何か話していた。

全部配り終えると、昂さんが私を手招きする。

「雪奈がカード持つてんか」

昂さんはそう言つて私にカードを持たせると私の後ろに座り、肩越しにカードを覗き込んでくる。そして私を包むように腕を回してカードの見方とかルールとか教えてくれた……んだけど、そんな状態で私の頭が正常に働くはずもなく。

「つて感じやねん。わかった?」

「めんなさい昂さん。全然わかりませんでした。

と言つた、全然集中して聞けませんでした……。

だつて、身体が、顔が、近いんですつてば! 後ろからぎゅつてされてるような、それでないような? されてしまんけどつ! こんな状態で、私、ゲームできるかしり? 心配、かも。

と雪奈の予感通り、結局私はほとんどゲームに勝てませんでした。

だつて、みんな上手すぎるんだもん! 特に河合さん。あの癒し系の優しい笑顔自体がまんまと一カーフェイスになつてることに気付いたときは衝撃を受けました。

浅倉さんは表情に出る方だけ手の内を隠すのが上手だし、昂さんは相変わらず掴みどころがないし、武田さんは永野さんとキヤッキヤしながらも意外と勝負師だし、永野さんは堅実に勝てる勝負しかしないし。

ゲームに慣れてないつて言つたら負け惜しみになるけど、一番最後に上がった回数は私がダントツ。だけど、すごく楽しかった。『大富豪』を十ゲームくらいプレイして、『セブン・ブリッジ』や『ブラック・ジャック』をやつて……数時間は遊んだかなあ。

さすがにずっとやつてると疲れてきちゃうから、今はおしゃべりと飲みに専念中です。

意外にも一番酒豪に見える永野さんがジュースを飲んでる。体质的にアルコールが合わないんだって。人は見かけによらないのね。

私はまだアルコール飲めないから、昂さんが買っててくれた桃のジュースを飲みながらみんなのお話を聞いてる。ボードやお仕事、それにゲームをしてちょっと疲れてるせいか、少し眠くなってきたかも……。

「雪奈ちゃんは？」

突然話を振られて、私は瞬きした。

え？ えっと、何の話でしたっけ……？

「あ、聞いてなかつたな？」うろたえる私を見て永野さんが笑う。

「ここで住み込みで働くの、誰も反対しなかつたの？」

「え？ あ、はい……」

私は反対したんですけど、強引に応募させられました とは言えないよね、やっぱり。それに、今はここで働くことになつて本当に良かつたと思つてるんだもの。

「へえ。でも、彼氏とかは？ クリスマスやお正月、一緒に過ぐしたいって言つてこなかつたの？」

「あ、私、彼氏とかいなくて……」

私が答えると、永野さんと武田さんが驚いたように口を開いた。

「可愛いのに、もつたいない」

「そういえば、浅倉君つて彼女いないんじゃなかつた？」

武田さんの言葉に、浅倉さんが困惑の表情を浮かべる。

「オレ？ まあいなide……」

「じゃあ、立候補したら？」

「あ、それいいかもね」

「え？ えええええええ？」

ちちちちょつと！ 武田さんつ、何言つてるんですかつ！ 永野さんもそんな簡単に同意しないでくださいよつ！ 河合さんも笑つてないで、何かフオローするとか！

私が慌てて止めようとしたとき、凜とした声が私の隣から聞こえた。

「あかん！」

思わずその声の主を見る。昴さんだ。少し酔っ払ってるのかな、ちょっと顔が赤い気がする。大丈夫かな。

だけど私の心配は、次に続いた昴さんの言葉のせいで完全に搔き消えた。

「オレが立候補するんやから」

「はい？ 昴さん、今、何て？」

「だから、浅倉さんは永野さんにしどき…」

「え？ なんで私？」

今度は永野さんが狼狽の声を上げる。狼狽って言つよりも、その発言の意図がまったく理解できませんって表情だけど。

「お一人、お似合いなんやもん」

昴さんの発言に声を上げて笑う河合さんを浅倉さんが睨む。永野さんは「どうじゅう」と? って武田さんに聞いてるみたいだし。昴さんもそんな一人を見てしてやつたりつて顔で笑つてる。

そうだよね、別に、さつきの発言に深い意味はないよね。なんだかホツとするのと同時に、一気に眠気に襲われる。

なんでこんなに眠いんだろ? えつと……ああ、そうか。そういえば昨夜、あんまり眠れなかつたんだつけ。どうつで眠いはずだ。うん。でも、もうちよつと、起きてなきや。寝るのは、布団に、入つてから……

笑い声が充満する賑やかなラウンジで、私はついに瞼を閉じた

40　～閑話～　昂の事情（1）（前書き）

今回から数話に渡り、昂視点の閑話となじます。

ベン・ショーン『ソフトライム』のラウンジは、真夜中だというのに明るい。パジャマ・パーティは酣を越え、今はまつたりとした時間が流れている。

その部屋の中で、昴は笑顔を浮かべて目の前の楽しげな四人を見ていた。

客として来た社会人の男女四人のグループ。いつもやつて旅行に来れるほど、性別を超えて仲良くできるというのは純粋に羨ましく、自分も今後そのような同僚に恵まれればいいのにと思つ。

とん

突然自分の肩にかかった重さに驚き、昴は隣を見た。  
そして、目に入った光景にどきりとする。

そこには、安心しきつたように目を閉じる雪奈の顔があつたから。雪奈が、座つたまま昴にもたれかかってきていた。どうやら眠つてしまつたらしい。

そういうえば今朝、浩美さんが「雪奈ちゃん、昨夜はなかなか眠れなかつたみたい」とつて言つてたやんか。<sup>つこ</sup>使い使つてあげなあかんのに。アホやん、オレ。

昴がなんとかしようとしたとき、今このタイミングで一番聞きたくなかった声が聞こえてきた。

「あれ？ 雪奈さん、寝ちゃつたの？」

振り向かなくともわかる。河合の声だ。

「そうみたいなんですね」

「いろいろと疲れてるんだううね、きっと」

河合が慈しむような表情で雪奈を見た。途端に、昂の胸のつりひざわざわとしたモノが沸き起こる。

そんなん、言われんでもわかつてゐる。雪奈が頑張つてゐるのを一番近くで見てるんは、オレやさかー。  
そう胸の内で主張するものの、口や態度こね出せなこよつに怒めた。

雪奈が河合に惹かれてはいるのは、昂も知つてゐる。

この四人が宿泊客として来たときの雪奈の表情を見たときに、すぐには勘付いた。河合も雪奈のことを好ましく思つてこゝつて、何かと雪奈の世話を焼いているのを田にする。

そのたびに昂は、それを快く思つていらない自分を自覚するのだ。

「しゃーない。明日もあるとか、オレたちはずれん上がりせてもらいますわ」

昂はそう言つと、雪奈の肩を抱いて身体を起して優しく揺すつてみた。寝てゐる雪奈をこのまま運ぶのは昂にとってたいした問題でもないのだが、このメンバーが見ている前でそれをするのが少し躊躇われたのだ。

しかし雪奈は僅かに開いた口から小さな声を漏らすのみで起きる気配がない。

「起きねえな」

他のメンバーも雪奈が寝てしまつたことに気が付いたらしく、この間にか皆が昂と雪奈に注目していた。

「いいじゃない、もう寝ちゃつてるんだし、わざわざ起つたくなくてそのまま連れて行つちやえば」

いや、ホンマに永野さんの言わはる通りなんやけど……。

昂とて、そうしてもいいならとつてそつとしている。何より、この寝顔が皆にわいわいでいると言つ事実が、なんとなく気に喰わない。

嘆息しつつ雪奈を見下ろしていくと、真由子の適当な提案が聞こえてきた。

「立候補したんでしょうー？ 彼氏候補。だったらお姫様抱っこくらいやつてみせなきゃねえ」

そういうえば、さつき酔った勢いでそんなことを言ってしまった気もする。すぐに別の話題に移つたから誰も覚えていないと踏んでいたのだが、いやはや、女性の色恋沙汰に関する記憶力は恐ろしい。顔を上げると、真由子の悪戯っぽい笑顔と河合の挑発的な表情が目に入った。

「僕がやろうか？」

「ええです。オレが運びますさかい」

河合の申し出を昴は間髪を容れずにはぐくと、自分に身体を預ける雪奈の脇と膝裏に腕を入れて持ち上げた。

腕にかかる重みが想像よりも随分と軽くて驚いたが、それを表情に出さずに立ち上がると昴は皆に「ほな、お先です」と就寝の挨拶をした。

「ドア開けるね」

河合が素早く動いてラウンジの扉を開ける。

昴が雪奈を抱き上げたままラウンジから出ると、何故か河合も一緒にラウンジを出て後手に扉を閉めた。ペンションの建屋とは別棟にある自分たちの部屋に向かつて歩き始める昴の後をついて来る。

「雪奈さん、可愛らしい子だね」

薄明かりの中、雪奈の寝顔に微笑を向けながら小声で言う河合に、昴は眉間に皺を寄せた。

「しつかりしているよつて『妹』みたいに放つておけないとこりがあるし」

河合が何を言いたいのかわからず、昴は眉間に皺をますます深くする。河合はそんな昴に構わず独りごちるよつに続けた。

「でも昴君にとつて、雪奈さんはあくまでも『妹みたいなもの』であつて……」

「なんですか？宣戦布告ですか？それやつたら……」

業を煮やして河合を睨み付けた昴の表情が、その直後に呆けたものに変わった。その視線の先では、河合が右手で口を左手で腹を押さえ、くつくつと声を殺して笑っている。本当に可笑しくて堪らないとも言つよう。

「やつぱりね。なんか勘違いされてるみたいだけど、僕、カノジョいるから」

河合はそんな昴に手に持つていた携帯電話の待ち受け画面を見せた。

それを見た昴は絶句して危うく雪奈を落としそうになってしまい、慌ててもう一度腕に力を籠めて雪奈を抱き直す。

そこには、河合とその彼女と思しき女性のツーショット写真が映っていた。後ろから河合が彼女を抱き締め、こめかみの辺りにキスしている。彼女はそれを擦つたそうな表情で受け入れていた。

「ラブラブですやん」

「雪奈さんにもそんなこと言われたよ。

ああ、僕には妹がいてね。ちようび雪奈さんや昴君と同じくらいの年齢なんだ。それで放つておけないって言つのかな……。とにかく僕はそんな感じだから。昨夜のあの子、晴人君だつて、彼は本気みたいだけね。まあ頑張つて」

河合は携帯電話をしまいながらソファに腰を下し、ぽんと昴の背中を叩きラウンジへと戻つて行く。

残された昴はしばらく河合の言葉の意味を咀嚼するのに時間を取られていたが、つまり雪奈も河合にカノジョがいると知つているということや、昨日と今日の河合の言動すべてが自分をからかつていたためだとわかると、赤面して大きく息を吐いた。

「あかん、あんな人、絶対勝てへん……」

そして雪奈をもう一度抱き直すとまた歩き出した。

「あ、お帰り河合君」

河合はラウンジに戻るなり、真由子に声をかけられた。

「何話してたのよ?」

そう問い合わせる真由子の目が好奇心で輝いているのがわかり、河合はいつもの微笑を顔に湛えた。

「ん……激励、かな?」

「ふーん……」

「え? 何? 何の話?」

意味ありげな笑みを浮かべる真由子に反し、香蓮は心底ワケのわからっていない表情で一人を見比べている。真由子はそんな香蓮に抱きついた。

「なんでもないよー。それより、四人になっちゃったけどどうする?  
? もう一回トランプやろうか。今度はポーカーとか

きやつきやしながらトランプを手にする真由子とウイスキーのグラスを持って絨毯に座る河合を見ながら、浅倉は「こいつら、性格が悪すぎる……」と引き攣った表情で呟いた。

腕の中の心地よい重みを感じながら田的の部屋の前まで来ると、昴は自由の利きにくい手を器用に動かして扉を開けた。そして小奇麗に片付けられた部屋の様子を見て、嘆息する。

「なんや、布団敷いてへんやんか……」

さすがに雪奈を抱き上げたままで布団を敷くことはできない。かと言つてこのまま気持ちよさそうに眠る雪奈を床に寝かせるのはさすがに憚られた。

昴は入ったばかりの部屋を出て隣の自分の部屋へと入った。戻る時分には布団を敷く余力が残つていないかもしれないと思い、パジャマ・パーティーの前に先に敷いておいたのだ。

足先で掛け布団を器用に捲ると、躊躇しつつも雪奈をそつと布団の上に横たえる。パークーを脱がし、布団を首下までかけて、雪奈の部屋へ布団を敷きに戻るために立ち上がりうつとした。しかし何故か下に引っ張られてしまい、何事かと視線を下に向ける。雪奈が昴のパジャマの裾を掴んだまま丸くなっていた。

昴は小さく息を漏らし、握り締める雪奈の手をそつと上から握つた。そしてなんとか外そつと試みる。

「ん……」

雪奈の口から漏れた声に心臓が大きく鳴る。できるだけその無防備な寝顔を視界に入れないので意識しつつ、昴は雪奈にそつと囁いた。

「雪奈、手、放してくれへん？」

「……や……ん……」

雪奈が何か言つたのが聞こえてきて、耳を澄ます。

「すば……る……やん……」

その声をはつきりと聞き取った昴は、顔を真っ赤にしてその場にしゃがみこみ頭を抱えた。

「あかんわ、雪奈。そりやないで……」

昴にとつての雪奈の第一印象は、可愛らしいけど大人しい子、だつた。駅で遠くから雪奈を見て、他に同世代の乗客がいなかつたらすぐに目的の子だとわかつたものの、あまりの消極的そうな雰囲気に何故ペンションの住み込みアルバイトに応募してきたのかと首を傾げたくなつた。

大きなトランクを辛うじて持つてゐる両腕と危なつかしい足取り、そして自分を見て一瞬怯えたよつた瞳。まるで小鹿のように見えて、保護欲を搔き立てられた。

ペンションの仕事は何気に重労働だ。朝は早いし、それなりに体力も要る。客に対する気遣いも必要だ。

初めは心配していたものの、雪奈は物覚えが早く気の利く女性だつた。包丁を持たせて危なつかしいといふこともなく、掃除を任せればちゃんと埃を払い棚の上を拭いてから掃除機をかける。置物がずれていたら直すし、彼女がベッドメイクを行つた部屋はシーツに皺一つない。

いつの間にか、雪奈を田で追つてゐる自分がいた。

雪山のよさを知つて欲しくて、なんとかボードに誘い出したときも驚かされっぱなしだった。まず、自分の力でいきなり雪の上で立つた。あつという間にコノハの基礎をマスターしたことに驚き、楽しそうに雪の上を滑る姿に嬉しさがこみ上げた。

親しくし始めてようやく、雪奈はどうも男性自体に慣れていないようだとわかつた。平たく言つと、今までに昴が会つたどんな女性よりも初心だつた。試しに必要以上に近づいてみると、まるで林檎のようにならに頬を染め、大きな瞳につつすら涙すら浮かべておどおどと昴を見つめる。

そういえば届いた履歴書を大介に見せてもらつたときに、女子大に在学中と書かれていた。それまでがどうだったのかは想像しかできないうが、きっと雪奈の場合、クラスの男の子とも話すこともなく地味に過ごしてきたのだろう。

慣れない環境で、慣れない仕事の中、文句一つ言わずに雪奈は頑張っている。

言葉は少ないがくるくる変わる表情が堪らなくて、もつと別の表情が見たいと渴望すら覚えた。

どうやら、雪奈に惹かれているらしい。

なんとなくそう思い始めてはいたものの、まだ出合って間もないのにとその気持ちを否定し続けていたのだが……決定打となつたのは、昨夜の出来事だった。

「雪奈ちゃん、展望室、二階なんだ。先に行こ」  
「うぜー

そう言いながら雪奈の手を取つてあつといつ間に田の前からいなくなつた晴人の姿を見たとき、その日の朝に着いた宿泊客の河合が雪奈と親しげに話しているのを見たときよりも、もつとどす黒い何かが腹の中でのた打ち回り始めたのを感じた。

そして直後、その気持ちにさらに墨でも注ぐかのように、そつと自分の隣にやつてきた河合が昂の肩に手を置いて小声で言ったのだ。

「またもやライバル出現、だね」

「なんですね、突然」

「ま、僕はライバルの多い方が、燃えるけどね」

河合は意味ありげに微笑み、晴人と雪奈を追つて部屋を出ようとしている森田さんたちの方へと向かつた。

雷が落ちたような衝撃に、呆然とする昂を残して。

今から考えると、そのときの河合の言動は、昂の気持ちをわかつた上でからかっていたということになるのだが……。

とにかく、一人きりの部屋で、布団の中にいる自分が惹かれている女性に、自分の名を呼ばれながら服を引っ張られるというこのショーニーションは、今の昂にとってイロイロとまずい状況以外のなものでもなかつた。

抱えていた頭から手を離し、もう一度雪奈の手からパジャマを抜こうと試みる。そのとき、気持ちよさそうな雪奈の寝顔が目に入つた。手を止め、指で頬をそつと撫でると薄つすらと微笑んだ気がした。

ふつくらとした唇を少し開いた小さな口元がやけに扇情的に目に映る。

その誘惑に勝てず、昂はいつの間にか瞼を閉じていた。

「そうよ。もともとわかつてたわ。

あなたは初めから、私には興味なかつたのよ。

あなたにとつてはスノーボードが一番なの

頭の中で響いた声に、昂はハツとして目を開けた。

引き寄せられるように自分の唇を雪奈のそれに近づけようとしていた自分に気付き、慌てて身体を離して壁際に寄る。先ほどまでもんなに頑なに自分のパジャマを掴んでいた雪奈の手が、簡単に外れて布団の上に落ちた。

「……あかん、めっちゃ危なかつた……」

心臓がものすごく大きな音をたてながら暴れ回つてゐる。その音に雪奈が起きるんじやないかと思つてしまつくらいだ。

昂は自分の胸を押さえつつ立ち上がりつて部屋を去ると、雪奈の部屋に入り布団を敷き始めた。

黙々と布団を敷きながら先ほどの声を反芻する。

それは、もう一年近く前に別れた前の彼女の言葉だった。

昴の元カノジョは、同じ大学の女性だった。同じ学科というわけではなくサークルの後輩だったのだが、春の終わりに告白されて付き合い始めた。

夏の間は上手くいっていた。一人でデートもしたし、グループで遊びに行ったりもした。しかし今から思えば、ボードのシーズンに入る頃にはもう既にぎくしゃくし始めていたようだ。

冬にしかできないスポーツを楽しみたかった昴と、雪山に魅力を感じない彼女。毎週末ボードに出かけていた昴が何度も一緒に行こうと誘つても、彼女がそれに応じることは一度もなかつた。ボードはやつたことがなくて足を引っ張るから、と彼女は言つていたが、自分が教えるからと言つても彼女は頑なに首を縦に振らなかつた。何度かそれを続けていた昴は彼女とボードに行くことを諦め、ボード仲間の友人たちと楽しい時間を過ごすことにした。

そして冬休みにペンションに長期滞在すると告げたときに、彼女に言わされたのだ。

「私とスノーボード、どっちが大切な？」

あまりに次元の違うものを並べられ、昴は驚きのあまり絶句した。何も言わない昴に向かつて彼女は続けた。連絡するのはいつも自分からだつたから、昴の方から連絡をくれるのをずっと待つていたのだと。

そういえば、ボードのシーズンに入つてから、自分は何度彼女と会つただろうか。何度電話をただろうか。何度メールを送つただろうか。

思い出せないくらい、彼女に対して何もしていなかつたというところなのだろうか。

自分自身に衝撃を受ける昴に彼女は泣きながら先ほどの言葉をいい、そして去つて行つたのだった。

不思議なくらい失恋したという思いはなかつた。その点では彼女の言ひとおりだつたのだろう。

しかし、恋愛することや『カノジョ』といつ存在を持つことへの躊躇いを昴に植えつけるには十分な出来事だった。

敷き終わつた布団に雪奈を移し、昴は立ち上がつた。  
扉に手をかけ、名残惜しそうにもう一度雪奈を見つめると、昴は音をたてないようになつと部屋から出た。

自分の布団に入つても、眠気はなかなか訪れてくれなかつた。  
自分の腕に残る雪奈の柔らかい感触、そしてつい先ほどまで雪奈が寝ていた温もりが残る布団、枕に残るシャンプーの香り、瞼の裏に残る雪奈の安らかな寝顔　　そのいずれもが昴を悩ませた。

昴は何度も寝返りを打つていて、やがて頭から布団を被つた。  
「ホンマにアホや、オレ……。雪奈に『惚れさせたる』とか言つておいて、オレが惚れ切つてるやん」

真つ暗な闇の中、昴は一人溜め息をついた。

ゲレンデにてできるだけ雪奈の後ろを滑つていたのは、まだボーディに慣れていない雪奈に何かあつたときにすぐに助けに行けるからだ。雪奈にジャンプしているところが見たいと請われてジャンプ台の列に並んでいるときも、昴は離れた位置からずっと雪奈のことを見守つっていた。

ジャンプ台の下でじょじょんと座る雪奈をじつと見つめる田に映つたのは、雪奈に話しかけようとしている見知らぬ二人組みの男の姿だつた。男の一人が雪奈に手を伸ばそうとして、嫌がつたらしい雪奈が身を引いているのが見えた。

なんや、アイツら！？

頭にカツと血が昇り慌てて列から抜けて雪奈の元へ滑り降りようとしたとき、もう一人男が加わった。急激に頭が冷える。

あれは……晴人か？

既に馴染みとなっている晴人とは何度か一緒にボードをしたことがあるから、滑り方の癖やウェア、背格好ですぐにわかつた。

晴人が側にいるなら、あの二人組みの男が雪奈に何かすることはないだろう。

だが。

雪奈が他の男と一緒にいるというだけで快く思わない自分に呆れてしまう。これが嫉妬というものだらうか。前のカノジョに対しては誰といよつと一切そんなこと思いもしなかつたのに。

晴人、やっぱり雪奈に惚れたんやろか……。雪奈はどうに思つてんやろ？

やつぱりすぐに雪奈のところへ行こう、そう思い列を外れようとしたとき、ジャンプ台の自分の番が回つて来た。

それやつたら……！

『惚れさせる』んは本気混じりの冗談にしても、晴人に牽制したるわ！

昴は勢いよくジャンプ台に向けて斜面を下り始めた。

その後の態度から見て、晴人は昴の雪奈に対する恋心に気が付いただろう。晴人がその程度で諦めるようなタイプではないにしても、自己主張しておくことでライバルに対する牽制にはなる。

でも、たとえ周りを追い払っても、肝心の雪奈が自分をどう思つかは別の話なのだ。

自分に向けてくれる表情や仕草から、少なからず好意は持つてもらえてると思うのだけど。

それに以前と同じ失敗をまた繰り返してしまつとも限らない。

かといって、スノーボードは今や昴という人間の一部のようなもので、ボードを辞めるという選択肢はあり得なかつた。

昂にとってスノーボードはとても大切な趣味で、恋愛とはまったく別の次元にある。

もし雪奈が自分を選んでくれたなら、そしてボードの季節になつたら、そのとき雪奈にも前のカノジョと同じことを言われてしまうのではないか。もしそうなつたら、立ち直れなくなりそうだった。

ああ、あかん。悪い方向にしか考えが行かへん。ちゅうか、早よ寝な。また雪奈に起こされたらかなん。

昂はまた寝返りを打ち、身体を丸くした。

今朝目覚めて、雪奈の気遣いながらの笑顔がすぐ近くにあつたとき、まだ夢を見ているのだと思った。そう思い込んでいた割りに、変なことを口走つたりメチャクチャな行動を取らなかつた自分を拍手喝采で褒めてあげたいと自分でも思つ。

布団を剥ぎ取られそうになつたときはさすがに慌てたが。

雪奈は恐らく、男の朝の事情など知らないだろつ。否、それに象徴される男のこんな後ろめたい感情など知つて欲しくない。

雪奈に向ける自分の笑顔の下にこんな強い独自欲や嫉妬心を隠していることも、できれば知られたくない。名前の通り雪のように真っ白な心のまま、あの笑顔を自分に向けて欲しい。

「あかん、ホンマ、重症や……」

42 ジ 閑話～昴の事情（3）（後書き）

閑話『昴の事情』は今回で終了です。  
次回より、再び雪奈視点へと戻ります。

「えつ……また昴さん寝坊してるとですか？」

朝、いつものようにケータイの目覚ましで起きて、身支度をしながら厨房に行き朝の挨拶をした後、マスターから聞いた言葉に私は聞き返した。

私の前には、呆れた顔のマスターと苦笑気味な表情で厨房に立つ浩美さんがない。

「そりなんだよ。本当に悪いんだけど、今日も起こしてもらひるる？」

私は引き攣つた頬をなんとか笑顔に変えると頷いた。

昨夜はパジャマ・パーティーだった……はず。

うん、あれは夢じゃない。とっても楽しかったもの。だけど、楽しかったのは覚えてるんだけど、途中から記憶がないのがちょっとびり不安。お酒を飲んだわけじゃないから、途中で眠っちゃつただけだとは思うんだけど。

一昨日の夜、上手く寝付けなかつたせいで、睡眠不足だつたんだらうつな。

トランプゲームの後、みんなでおしゃべりが始まつて……急にすつゝぐ眠くなつてきちゃつたんだけど、みんながとても楽しそうで水を差したくなくて言い出せなかつたところまでは覚えてる。

ただ、なんでなのかよくわからないんだけど、朝起きたら何故か自分の部屋の布団の中にいた。

私、布団を敷かずにラウンジに行つちやつたはずなのに……。

多分、私以外の誰かが敷いてくれたんだと思つ。多分、と言つか、絶対に昴さんだと思うんだけど。きっと私を部屋まで運んでくれた

のも昂さんだ。

あのままラウンジで寝ちゃついたら、確実に風邪引いてたどだろ  
うな。それに、運ぶの重かつたんじゃないかな。私、普段運動しな  
いからすぐ太っちゃうし。

昂さんを起こしたら、まずお礼を言わなきゃ……。

私は昂さんの部屋の前に着くと、今朝もまた扉をノックしてみた。

「昂さん、おはようございます。起きます?」

私の声が、母屋の廊下に空しく響いた。

しばらく待つてみると、予想通りまったく反応がない。  
やっぱりまだ寝てるんだよね……。

昨夜、遅かったのかな? 私を運んでくれた後、飲み直してたか  
もしれないよね。何時頃までみんなで飲んでたんだろう?

今日も昨日みたいにすぐ起きてくれるといいんだけどな。昨日の  
マスターの感じだと、昂さんがすんなり起きるのって珍しいみたい  
だから。

「あの、昂さん。入りますよー?」

一応断りを入れてから扉を開けて部屋の中に入った。  
思つたとおり、昂さんはぐっすり眠つてゐみたい。  
まず部屋の中を明るくしなきや。

昨日と同じ要領で、カーテンを勢いよくバッと開けると、外の光  
が部屋の中に差し込んだ。残念ながら今日はあまり天氣がよくない  
から昨日ほど明るくはないけど、でもこれだけ明るかつたら十分寝  
てる人には眩しいと思う。

昂さんは、まったく反応しないけど。

私は布団の脇にしゃがむと、布団の上から昂さんを叩きながら声  
をかけた。

「昂さん、起きてください! 一日も続けて寝坊しちゃダメですっ

!」

ダメだ。何度か叩いてみたけど、まったく反応ナシ。

相当深く眠つてゐるみたい。

「昴さんつてば！」

今度は搖すつてみる。振れ幅が小さこと氣付いてもらえないかも  
しれないから、ちょっと大きめに。  
これならさすがにわかるかな？

「うー……」

あ、反応した、かも。起きてくれたのかな？

このチャンスは逃しちゃいけない！ 私は大きな声で昴さんに呼  
びかけた。

「昴さん？ 聞こえてます？ 起きてくださいー！」

「うーん……」

「ちよつと、昴さん わやつーー？」

何が起きたのか、よくわからなかつた。

急に何かに引っ張られて、気がついたら今はなんか……薄暗い？

私、起きてるよね？ 田開いてるよね？

それに、なんだかとっても温いし、ふんわりしてると、私、倒れ  
てるような？

え？ ちよつと待つて、ここって布団の中？ なんで？ 起きな  
れや。

よつと……ん？ あれ？ 動けない？ なんか、締め付けられて  
る？

ちよつ、び、どなつてゐるの

ー？

「うーん……」

私が焦つてここから抜け出そうともがいでいたら、ものすごく近  
い場所から低い声が聞こえてきた。

あれ？ この声、聞き覚えがある。昴さんと同じ声だ。

それに気が付いて身体の動きを止めると、私を締め付ける力が少  
し強くなつた。

「う。ちょっとだけ、きつい、かも？」

「ここから出たくて思わず上を見上げると、そこに顔があつた。昴さん」。

そしてようやく、今自分の置かれている状況がわかつた。  
どうも起にそつとする私を昴さんがうるさがつて、音源（つまり  
私）じと布団の中に引きずり込んだ…みた…い…？」

え？ ええええええええええ！？

ちよつ、まつ、え？ ええ つー？

「う、これは明らかに、マズイ、よね？」

自覚してしまったせいで、心臓が狂つたよつにバクバク鳴り始めた。身体も異常に熱を帯びて頬が熱い。

とつ、とにかく離れなきや！

身を捩つてなんとか昴さんの腕から逃れようともがく。  
それなのに、私を抑え込むよつに昴さんの腕の力がさらに強くなる。

肺を潰された私の口から、ふつと息が漏れた。

「す、昴さん、苦し……」

堪えきれなくて訴えてみたけど、その声は掠れていて自分でも情けないくらい全然音にならなかつた。

ど、どうしようつ？

「ん……」

昴さんが小さく顎を出したのと同時に、腕の力が少しだけ緩んだ。あつ、ちょっとだけど腕が動かせる。

私は必死になつて昴さんの胸をぐいぐいと押した。

「昴さんっ、お願ひ、起きてっ！」

何度も呼びかけているつむぎ、掠れていた声がだんだんしつかりし出で来るよくなつてきた。

そのおかげもあってか、焦っていた気持ちが落ち着いてくる。

「うん、昴さんは寝てるんだし、そんな危険はない、なはず。変なことも起こりない、はず。状況を考えると、死ぬほど恥ずかしいけど……」

「 もう一つ……」

昴さんは好きな人とこんな状況になつてしまつてる私の考えなんてまったく知りもしないんだけど、それで当たり前なんだけど、あまりに反応がないからちょっとムカツと来て拳で叩いてみたとき、昴さんが呻いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3028p/>

---

私をボードへ連れてって

2011年10月8日03時25分発行